

モンハンの世界に転生したらいいので弓で遠くからちまちま攻撃してやろうと思う

リヒアル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

完全に趣味の範囲です。後、にわか知識です。

ユウチュウブのモンハンワールドのプレイ動画見ててふと思いついたので書いてみました。期待はしないでください。

内容はタイトル道理です。ただし勘違いされてしたくもない狩猟をどんどんやらされてく感じです。

主人公臆病なくせしてかなり強いです。無双です(最強とは言っていない)

だいぶ直し終わりました。読んでいただきありがとうございます。これからもがんばりますのでどうぞよろしくお願ひします。

目次

始まりは突然に	1
ハンター開始	
ジャギイ5匹って聞いてたのに…	4
ギルドマスター視点 前編（説明長めかもです	8
ギルマス視点（後編	13
テイラノと俺 ??	18
チートでテイラノ討伐…忘れてたこと…	22
空の王	27
ギルマス！2nd	33
閑話休的なものを	38
うん、可愛いは正義	42
舞姫…戦闘狂の間違えだろ…	47
先輩視点	52
俺は何がなんでも採取クエストに行く！	57
共闘	62
思いつかなかったよ…（視点変更してます）	66
また、騙された…	70
かわいそうなくらい…	75
先輩視点2nd	79
調査依頼	83
とあるハンターの後日談	87
母のために	90
気づき始めた心（先輩視点	96

どこまでも落ちて… 100

母親視点 106

ギルマス 111

絶望の淵に… 116

突然の再会 121

姉視点(物語上読まなくても大丈夫なはずです) 127

二章

試練 134

あつ…ごめんね… 141

村の発展 144

睡眠爆殺 148

美しき天狐に汚い戦い方 154

銀の猛者 160

生態系の覇者 166

最襲 170

決着 175

討伐のあと 180

始まりは突然に

俺は今二度目の五歳児を楽しんでいる。

何を言っているかと思うかもしれないが二度目なんだ。

一度目はどうしたかというモンハンワールドのβテストをしてるときに死んだんじゃないかと思う。

そこからの記憶がないんだよ、だから多分心臓麻痺とかで死んだんじゃないかな。

んで、何が言いたいかというと二度目の人生だから子供の頃からめっちゃ勉強していい大学行ってエリートコース乗ってやる！と昨日までは思っていたんだが…

俺が生まれ変わったのはどうやらモンハンの世界らしい。

なんで気づいたかと言うとドスジャギイの遺体が村に運ばれてきたのを見たのだ。

恐竜もどき？と思ったけど、見た目が前世よくやってたモンハンのドスジャギイのそっくりなんだよ。

きわめつけには母親が

「ドスジャギイなんて久々に見たわ」

なんて言い始めるから俺は悟った。

あつ…ここモンハンの世界だわ…って

てかこいつめっちゃ怖くね？ゲームでやってるときはただのザコみたいなイメージだったけどリアルで見るとこれほんと怖いぞ

こいつに睨まれたら俺確実に動けなくなる自信だけはある

ドスジャギイだけど恐竜みたいで、てかドスジャギイは恐竜なのか？まあ、とりあえず死んでるからいいけどね

そんな世界にいて五歳まで気づかなかったのか？って聞かれたら何も言い返せない：

まあ、住んでる場所が村だし、周りの人の服もおかしいし、文明の利器がない時点でなんかあるとは思ってたよ

でも、モンハンの世界とは誰も思わないだろ！！

ちよつと時代が古いくらいだったら色々作って金儲けしよう！くらいに考えてたけど流石に甘かった：

んで、そんなことがあつて俺はハンターになることに決めた。

いやまあね、ドスジャギイでそんなビビってるのにハンターになれるのかって？

しやあないやろ！調べたらこの世界結構な頻度で村が潰れされるらしい。まあ最低でも2年に1回はどっかの村がモンスターに潰されるって聞いた。

そんな世界に自衛手段も持たないでいたら即殺されるやん、ならハンターになつちやえつていうのが7割くらい

んであとは、純粋にモンハンやっててハンターになつてみたかつたつてのが2割

残り1割は話が進まないからつていう作者の都合だね

で、昨日気づいてから色々考えてみたんだけど

この世界の人間はめっちゃくちや力が強い、モンスターのいる世界で過ごしてるからなのかめっちゃくちや強い

まだ俺は五歳児なのに前世の15歳の男の子くらいの力があるんじゃないかな？たぶん…たしかに前世より体が軽いと思つてたけどここまで来ると異常だ

この力があればハンターになれるんじゃないやね？というのも、ハンター

になった理由の1つだ

ハンターになるってことなら体くらい鍛えなきゃだめだろうって思っただけとか色々してたらいつのまにか10年くらいたってかなり動けるようになってきた。

そういうわけで、今日、村のギルドに登録しに行こうと思う。

うちの村にはハンターギルドがあつて誰でも登録できる。が、命の保証はない。

しかし、安全な採取クエストはある。

そういうのは、成人男性がたまに小遣い稼ぎで行ったりはしてるけどまともにハンターとして活動してるのは10人もいないらしい…まあ、あんなに怖かったら仕方ないよな…

それで、ハンターギルドの登録は滞りなくできたので今から初クエストのジャギイ5頭の討伐に行こうと思います！

あ、いい忘れていたが俺の武器は弓だ。ゲームでは大剣やスラッシュアックスで、攻撃をギリギリで回避しながら高火力で叩き潰すような戦いが好きだった。

でも、今の世界では無理だろ!!モンスターと近距離で戦うのはほんとに無理だ、いや、冗談とかでなくあれめっちゃ怖いから

ほんとしかもあいつらの攻撃マジで痛いし…

って、受けたことあるのかよって言われると

ない!

ただ、周りのハンターの話だとマジで痛いらしい

ならば、ビビリーな俺は弓で遠くからちまちま攻撃してやろうっていう魂胆だ。

ってわけで初クエスト行ってまいります!

ハンター開始

ジャギイ5匹って聞いてたのに…

というわけで！やってまいりました溪流！

いや、それにしても懐かしいね

17〜8年ぶりだよ

ここ3のときめっちゃ来てた記憶あるわ4もXも来てたけどなんか3のイメージが強んだよな…

それで、ジャギイが多そうな石のここ来たんだけどなんでドスジャギイいるんだよ！ 初クエストなんだからさジャギイだけでいいじゃん！ ジャギイ寄越せよマジで、ドスジャギイさんほんと怖いんでどいてもらっていいですか？

しかたがないので、岩陰に隠れて30分位待ってたらやっと移動してくれたよ。

もう足がしびれてやばいんですがどうしてくるんだよ！ しかも残ったジャギイ1頭だし

あと4頭どうすんだよ！あとで考えればいいんだけど、普通に考えてこいつすら倒せるかわからないしな

うし。治ったのでジャギイ殲滅作戦を開始します！

この岩陰から弓で狙いをすまして

って、あ！せつかくだし最後にモンハンワールドで見た竜の一矢のモーシヨンしてみよっかな

って、えっ!?!体赤く光りだしたんですけど

これがためなのか？なんかめっちゃ力が出てきてる気がするよし、とりあえずこれで抑えてる矢を手を離したら…矢に赤い光が集束していき、矢が光をまといながら行ともものすごい勢いで飛んでいく！

これは…強い！

めっちゃかっけえやん！これ外から見たら惚れちゃうんじゃない？

ジャギイ撃沈！一撃ですわね！はい、これ俺最強説あんじゃね？

嘘です。ごめんなさい…

たおしたので、近づいて採取をする。

この採取したやつ革靴に入れるとめっちゃちやくくなるの何なの??

そこもゲーム仕様？楽だからいいけどさ質量とかどうなってんだよ

あと弓、家でやってるときは気づかなかったけど一発打つと勝手に矢がチャージされてくんだね

チャージされる瞬間はどう頑張っても見えないからどうなってるのかわからないけど

どっから来てんだよほんと

さすがハンターだわー不思議なことしかない

この調子でじゃんじゃん狩っちゃいましょー！

3体目が、今狩り終わったんだけど、これゲームのモーションで動く普通に打つより強い！絶対！

豪射とか曲射もできるし、もちろん溜めると赤い光が体の中？から迸ってすごいカッコいい

そしてなにより、めっちゃや便利

モーシヨン覚えててよかった

とか考えながら3体目の剥ぎ取りしてたんだけどやばいです！

ドスジャギイに見つかりました。

このままだと死んじやいますまる

背中向けて逃げるわけには行かないし…

たしかヤツゲームじゃザコモンスターだったよな…

やるだけやってみよう。死んだらそれまでだ…って諦められるわけねえ！

ゲームのモンスターの動きはある程度のやつまでなら全部頭に入ってる目指すはノーダメで外からちまちま時間かけた狩りだな

幸い、制限時間はないし、

と弓を展開したところでドスジャギイが襲ってくるのをゲーム通りに横に転がりながら回避する。

そしてそのまま矢を1発放つ、効かないわけじゃないみたい。これなら倒せるかも…

あれから5分後くらいだったけど、あれ？

倒せそうじゃね？今の所ゲーム通りの動きだから全部回避して俺はノーダメだし

これは 倒せちゃうパティーンじゃないっすか!!

と、足に矢があたりドスジャギイが倒れた。

この瞬間待ってましたー！行きますぜ！俺の新必殺 竜の一矢!!!!!!

いや、テンション高くなりすぎたんです。すみません…

って倒せたぜ!!!はぎ取ったらどうすんだっけ?

えくと、大型モンスターを倒したときは照明弾だっけ??を打ち上げるとお迎えがくるんだだけ?

なんか受付嬢が言ってたけど可愛くて見惚れてて話聴いてなかったんだよな…

まあいい!とりあえず打ってみっか!

打ってから気づいたけどジャギイあと1匹忘れてた!!!!

足りないやん!

クエストクリアできないと違約金発生するじゃん!やばい!!!

おっ!ちようどいいところに1匹はっけーん!弓矢を素早く展開して、奥義 竜の一矢!

クエスト完了!危なかったぜ

あとは迎え待っただけだよな?

うん、とりあえずドスジャギイ剥ぎ取りながら迎え待ってまて…つて早!

いやまじで、もう迎え来てるじゃん!ここもゲームと一緒によ!

無駄なところ再現度たけえな おい

そんなこんなで、初クエスト無事終了で帰りまーす。

いやー生きてて良かった…

そういや、迎えの竜車にギルマス乗ってたのなんでだろ…暇なんかな?

ギルドマスター視点 前編（説明長めかもです

私はとある村のハンターギルドマスターをしている。

いや、私という年ではないな、儂ということにしよう。

昔は儂もハンターをしておりそれなりに強かったと自負していたが今は引退してギルマスになった。

儂の村のハンターギルドはハンター自体は多いのだが純粹なモンスターと戦うハンターは9人しかいない。

命をかけてまで戦おうとするような奴な少ないのはわかるが少し腑抜けすぎではおらんかのお…

ほんとに、近頃の若モンは…

すまないのあ…ぐちがこぼれてしもうたわい…
などと考えていると

トントン

ドアを叩かれた音がしたので

「入れ」と返すと

副ギルドマスター兼受付嬢が入ってきた

本来なら副ギルドマスターは受付嬢の仕事をする必要は無いのだが、何でも現場の声が聞きたいとかなんとかで受付嬢もしている。

こいつは、そのせいで下の受付嬢がビクビクしていることに気がついていないのか…

いい部下ではある。そして人の上に立つ人間として良いとは思うのだがそこも気づいてほしいと儂は常々思っている。

「どうした？」

あまり脱線して考え事していると変な目で見られるので用件を聞くことにした。

「モンスターを狩る方の、ハンターになりたいという新人の子が来たので報告にきました。」

「そうか、ほんとに久々じゃのお…前来たのは二年前のあの子達が最後だったかのお？」

して、その子はすぐにクエストに行くといっおるのか？」

「はい、なのでいつも通りジャギイ5頭の討伐に行ってもらおう手配したので、あとは送迎するだけです。今、竜車の準備していることにして待ってもらってます」

「相変わらず仕事が早くて助かるのお…」

じゃあ、いつも通りにするので準備を頼む」

「それも、終わっているのではあとギルドマスターだけです。」

「……相変わらず仕事はやいわ…」

と急いで準備始める。

なんの準備かと言うとうちのギルドはとにかく命をかけて戦う純粹なハンターが少ない。

なのでそのハンターのレベルを超えるモンスターと戦わせて死なせてしまうと大変なことになる。

そのため、最初のクエストでギルドマスターとある程度の強さのハンターで影から見守ることにしている。

これには2つ理由があり。

1つは、そのハンターのレベルを見てどのクエストを受けさせるかの基準にするために実力を見極め向いてない場合はやめさせるという目的だ。

見込みがある場合でも採取クエストなどをしてもらい徐々に実力を付けさせてから大型モンスターのクエストをさせる。命大事にだ。

例外的に、極端に強い場合は、2箇目のクエストから大型モンスターと戦ってもらう事になるのでとても大切なのだ。そんなハンターは今うちのギルドに3人しかいないがいずれも、かなりの大物になった。

2つめは、見込みがある新人が初クエストで大型モンスターと遭遇してしまうことがある。

大体の新人はそこで動けなくなり死んでしまうことが多いある。そのため、うちのギルドでは影から観察し、大型モンスターが出現した場合は助けることになっている。

そのための、もう一人のハンターだ。

長い説明はあとにして、もう新人が出発してしまったので急いで追いかけることにする

しかしあの新人の武器が弓な気がするが気のせいだろうか…
新人のハンターで弓を使うものはあまりいない。

新人と言ったがベテランでも殆ど見ない…弓は不人気なのだ。
やはりハンターになるのは若い男性が多く、ハンターたるもの近接武器が男のロマンなどと言っている人達なのだ。

それくらい気概がないとなかなか命の張り合いをするハンターという職業になる人間はいないのだ…

そして、何よりの問題は残弾数と取り回しの難しさだ

モンスターと戦っている間に矢がなくなってしまうてはどうしょ

うも無い…

また取り回しも難しく弓矢を動いている敵に動きながら当てるのはとても難しくかと言って止まっていればモンスターの格好の標的にされるのだ。

したがって弓矢を使うハンターは非常に少ない…

どうやら新人は溪流に付くとすぐにまるでモンスターの場所がわかっているかのように走り出したので急いで追いかける

しかし、なかなか早い、儂も引退したとはいえ元ハンター、プライドにかけて気づかれないよう後ろについていく

しばらく行ったところで新人はモンスターを見つけたようで、岩陰に隠れたので、儂も影に隠れてモンスターを見る

ああ…また運の悪いことにジャギイ数匹とドスジャギイがいる。

ここでドスジャギイに向かっていくなら止めなくてはならないが…新人は気配を消し岩陰から動かない…

「あの新人、なかなかすごいですね…」

と、隣のハンターが感心したかのように声をもらった

確かにそうなのだ、新人というのは自分の力を試したいという気持ちから戦いに焦りがちなのだが彼はじつところえて待っている。

真意は図りかねるが、これはなかなかすごい事なのだ。

「マスター、今回のやつは、なんで弓なんでしょうね？」

「わからん、だが、むやみに突っ込まない新人じゃ、それなりの考えがあるのかもしれない…」

などと話しながら待っているとドスジャギイが移動を始めジャ

ギイが一匹になった。

これはチャンスじゃのお…

…
するとその新人はその場で弓を展開して、矢をつがえ狙いを定めた

…
あの力ではジャギイを仕留められず仲間を呼ばれるのお…
となるとやつかいじゃ…

だが新人は矢を一度離し、もう一度見たことのないモーションで構える。

新人が赤く光り始め、光があふれ出したと思ったら弓に集束していき、矢に光が集まっていき纏い始める。

矢から手をした瞬間、ものすごい速度で赤い光と共に矢が飛んでいき、ジャギイに突き刺さりジャギイが倒れる。

なんじゃあの矢は!?!しかもジャギイが一撃だど!?!

「マスター、これは想像以上かもしれないですぜ…」

ギルマス視点（後編）

さっきのはなんじゃあ!?

あんな弓の攻撃見たことがない!しかも、ジャギイが一撃で沈むとは…

何と言う威力なんじゃ…

確かにジャギイは弱い、ただ弱いと言っても一撃で仕留められる人は少ない、うちのギルドでもいま隣にいるやつとあと二人ができるかどうかというレベルだ。

儂も若い頃は一撃で仕留められていたが今は最低でも2発は攻撃を当てねば倒せない

だが、うちのギルドは少数精鋭、奴らは優秀だから2回も攻撃をすれば確実に狩ることができる。

ただ、新人がしかも弓でとなると…

これは当たりを引いたかもしれんのお…

と観察をしてると新人はなんの事もないと言うかのようにジャギイの剥ぎ取りをしていく。

「マスター、こいつはなかなかでかい新人じゃねえですか?」

「そうじゃな、これはなかなか期待ができる大型の新人かもしれないのお…」

そんな会話をしているとあつという間にジャギイを4体倒し…
っ!?!新人がドスジャギイに見つかった

これはまずいかもしれんなあ…

「マスター！新人ドスジャギイに見つかったぞ！おい！どうすんだ？死んじまう、加勢するか？」

「いや、まて、少し様子を見よう

危険になったら独断で加勢しても構わん…」

新人の様子を見るととてもドスジャギイに見つかった直後の新人の動きには見えないのだ。

それどころか弓を展開して攻撃すらしようとしてるのだ…

なんじゃ…あの新人は…

と、思っているとドスジャギイが新人に高く飛びあがり、飛びかかっていくが新人はそれを知っていたかのように左に飛び込みながら前転をすることにより回避し立ち上がりながら矢をつがえ弓を引き強烈な一撃を放っていく…

「これが新人の動きなのか…」

「これで新人とは未恐ろしいな…」

ドスジャギイの攻撃は一度も当たることなく新人はドスジャギイを追い詰めていく

紙一重でかわしては弓を放ち、弓を放ったと思ったら攻撃を回避していく、まるで流れるような作業に目を奪われる

矢がドスジャギイの足に当たりドスジャギイが倒れる。

そこにジャギイを一撃で倒したときと同じモーションでまた矢をつがえていく、

新人が赤く光り、光が強く三回ほど溢れたとき、ドスジャギイは立ち上がり始めた、そしてその光は矢に纏われていき今までで最大の光が矢に集まった

その瞬間

ジュバツ!

ジャギイを倒したときの勢いの何倍もの速度で矢が飛んでいき
ドスジャギイに突き刺さる。

立ちかけた状態からまた倒れ動かなくなってしまった…

ほんとに動かなくなってしまったのお…

どうやらあの新人はドスジャギイを倒してしまったようだ

「マスター。今気づいたけどあいつ何歳だよ若すぎねえか?見た
目、18?くらいに見えるが、」

「俺も知らんのじゃよ…」

ギルドに戻れば、書類に書いてあるからわかるが…

何分見る時間もなくてきたもんでな…」

「まあなんとしても20以下ではあるだろ、マスター、あいつまじで
すぐくねえか…」

「そうじゃな…あれだけの強さと若さがあれば上位クエストもすぐ
に行けるようになるかもないのお…」

伸びしろが恐ろしいわ」

「いや、上位どころじゃねえG級にだってすぐにたどり着くかもし
れないな!

俺もうかうかしてられんな」

「だが、あの新人の成長のためと無理は禁物じゃな…

強いハンターが来るのは歓迎じゃが死なれてしまったては元も子も
ないないからのお…

お主も、案外すぐ抜かされたりしてな(笑)」

「おいおい、流石に冗談きついぜ…」

おい、マスター！あいつ照明弾打ち上げたぞ！迎えいかなきゃだな」

「まだ、クエスト終わってないんじゃないかのお…」

確かに、予想外の大型モンスターと戦ったら気持ちもわからなくもないがなあ…

まあ、そこはじっくり教育してればいいな！」

「マスター、見てたか？」

「いや、何も？どうした？」

「あいつ、照明弾打ってから最後の1頭のジャギイ倒したぞ

これでクエストクリアだな

まじであいつおもしれえ!!」

「なんと…」

「マスター。迎えは頼んだ！ちよつとあいつ見てたら俺も動きたくなってきたからなんかモンスターと戦ってくるわー

先帰っててくれ！じゃあ！」

「…っおい！はやいのお…」

もう、どこに行ったかわらん…

さすが我がギルド最強のG級ハンターじゃな

そろそろ迎えに行くか…」

今来たかのように少し戻り、新人を迎えに行く

どうやらわしがギルドマスターと知ってるようだった。

この村ではある程度有名だか、よくわかったのお…

やはりこの村出身なんじゃな…

この新人をどう育てるか次はどんなクエストに行かせるかたのし

みじやおお！

これが、後の東の大陸最大のギルト（最強男と言われた男とそのギルドマスターとの出会いになる始まりの物語だったのはこの時は誰も知らない：

余談になるが

あの新人まだ15歳で親に言わずにハンターになってたようで村についてすぐに親らしき人物に怒られながら連れて行かれておったわい

さすがの超大型新人といえども母親には勝てないようじゃの（笑）

テイラノと俺??

目の前にテイラノもどきがいる

えっなにがあつた？飛びすぎ？だつて？

仕方ない、なんでこうなつたのか順を追って話していこう
まずドスジャギイ倒しました。ギルマスが迎えに来ました。
家帰ります。親に内緒でギルド登録したので怒られます。

その後無茶な動きしすぎて3日間完全に筋肉痛で動けなくてベツ
ドで療養生活してました。

そして。復活したのが昨日！んで、もう二度と大型モンスターと
は戦わない！って思ったんだよ。

めっちゃ怖いし 体痛いし そして怖いし

そこから昨日1日かけて親を説得して（説得できたとは言つてな
い）

まあそりやそうだよな。15歳の息子が命がけの仕事してきます
なんて言ったら俺なら確実に反対する。

ちなみに母親は俺がドスジャギイを倒したのは知らない…多分、
無傷で帰ってきたから採取でもしてた思ってたんじゃないかな？

「大型モンスターに会ったらどうすんの!？」とか言われてたし、は
い、倒しましたよってね

言つてないけど

それでも出ようとしたら昨日1日監禁されてたから夕方4時には
寝て朝3時に起きて抜け出して時間つぶしてギルドに来たってわけ
ですよ！（……）どや

そしたら、受付嬢がいて、

「…………… 古代 ……………… なの で ……………… さんに
…………… アンジヤナフの討伐をお願いしたいんですが…」

「はい…」

ん？つてえ!? あ？んん?? と？なにがおきた？

え？、アンジヤナフ討伐？ アンジヤナフつてあれだよな？ てかあれ
絶対テイラノだろ！

つて現実逃避はやめて…

いや、今何が起きた？

どうして？ なにどんな流れでギルドに登録して1回しかクエスト
に行っていない新人がアンジヤナフの狩りに行かなきゃいけないの!?
なに、ドスジャギイのでつかい版だから、簡単だろ？ とか言わない
よな

ゲームでももうちよつと優しいよ

「では、そのように手配します。

頑張ってくださいね！ニッコツ」

あつ…受付嬢さんめっちゃかわいい…

「クエスト受注完了しました。

行ってらっしゃい！」

つて、えっ? もうクエスト受注完了?

受付嬢さん仕事早いよ…

しかも、クエストの違約金この前のドスジャギイ討伐で稼いだ金よ

り高いんですが…

これ拒否したら、借金まみれじゃん…

行くしかないのか…

って、あの受付嬢絶対サキュバスか何かだよ。

魅了系のスキルとか持ってるよ。

目が合うとぼーっとしちゃうし、めっちゃかわいいし…

んで後ろにいるギルマス！目があつた瞬間笑うな！

何がグッジョブだ！親指立てるな！俺ほんとに死んじゃうよ？ア
ンジャンフだよ？テイラノサウルスだよ？

こんななら親の言うことちゃんと聞いとけばよかつ…

って言ってももう遅いし、万全の用意してから向かうしかないよな

…

子供の頃からの10年間で色々調べて作った数々のアイテムを
見せるときが来たようだ。

あとは俺のライトボウガンのお披露目会やな

弓？やつは今回封印だ。なぜかって？俺には隠された必殺技が…

いや、ないけどね。なんか先輩のハンターと話したら弓は近接武器
に入るらしいからさ…

近接武器怖いじゃん？ってわけでもっと遠くのライトボウガンさ
んの出番ってわけですよ

ホントお願いします！ライトボウガン先輩！今回俺の命はすべてあなたにかかっています！

なんてふざけながら用意をして…

最終チェック

ここで忘れ物したらほんとに死ぬ…

スリンガーよし ライトボウガンおけ 回復薬10個しかもてな

い…落とし穴よし シビレ罠よし

その他諸々よし！

もう怖くてテンションおかしくなってる…やばい

んじゃ、行きますか…

そして、古代樹にやってまいりました！行きたくないです。

キャンプで飯食べて、討伐に向かいます…

つていつも思うけど、飯の量多すぎ！こんなん食ってどうやって動くんだよ、なんで動けんだよ、力溢れ出てくんだよ。

じゃ、アンジャナフ探し開始！

死にそうになりながらフラフラアンジャナフ探してたら

冒頭に戻ったわけですよ。

思ったより長かったね…

チートでテイラノ討伐…忘れてたこと…

目の前に巨大なテイラノがいます…今からこいつと戦うとなると震えが止まりません…

何かすごい大事なこと忘れてる気がするんだが…

15年も前の話だし、まだβテストの途中だったんだよ…忘れてるってことはそんな大事じゃないはず

なんとかアンジャナフは倒せた記憶はあるんだけどその先が…

って、目の前にテイラノいるのにこんな考える余裕ないわ

気づかれる前に準備をしなくては…

こちらスネイク、これよりスリンガー松明作戦を開始する！

ん？だと思った？スリンガー松明とか卑怯？

いやいや。しゃあないやろ！アンジャナフめっちゃ怖いんだよ…

しかも元日本人がこんなモンスターとまともに戦えるわけ無いだろ！

いやね。俺もゲームやってたときは下方修正求むとか、あのチート技は使わねえとかいきがってたよ？

でもさ、リアルならなりふりかまわってられないやろ！ここで出し惜しみとかして死んだら洒落にならないし

今なら下方修正求めてた俺を殴りたいくらいだよ

なんだかんだ言いながら落とし穴の設置終わったんだけどこの落とし穴も謎だよな。なんで置いただけなのに穴開くんだよ…開かなかっただらどうしよ…動作不良とか…

ほんとわけわかんねえ

で、俺様調合の樽G 2個とこのために持ってきましたライトボウガン様！

出番ですぜ！

起爆榴弾3発セット完了！

すべての準備は整った。

特攻開始！

ライトボウガンをアンジヤナフにむけて弾を一発撃ち込みアンジヤナフに気づかせる。

って早！気づいて即こっち走ってきてるしめっちゃ怖いっすよ、まじ死ぬ！死ぬ！ほんと死ぬから！

おし、落とし穴落ちたか…

君はこれで終わりだ。

樽に向かってスリンガーで松明を撃ち込んでいく、松明により樽Gに火がつき爆発する

樽Gすげー 樽Gと起爆榴弾による爆発が連鎖しものすごい爆発が起きていき爆炎があがっていく

まじどんな爆発してんだよ

一瞬アンジヤナフ見えなくなったぞ

起爆榴弾と松明すげーコラボどんどん削れてる感がある

めっちゃ苦しんでるやん！俺はそれを見ながら遠くからライトボウガンで撃つだけとか楽な仕事ですなー

これでお金もらえるならいくらでもやっちゃおう！

どんどん仕事よこさ…

早くないですか？もうアンジヤナフ脱出してるし
ってめっちゃ怒ってるやばいって食われる…

と向かってくるアンジヤナフを右へ左へとギリギリで回避してい
く

って避けるのに必死過ぎて弾を変える時間すらないわ！

これゲームの奴らどうやってたんだよ

マジふざけんなし

止まって弾なんて撃つたら確実に食われるぞ

どうすんだよ…

確かポーチにナイフ系がたくさんあったはず
ぎりでかわしながら毒ナイフを投げつける

アンジヤナフの胴体にナイフが突き刺さる…

これゲームと一緒になら一つじゃ効かないよね…2個目を投げけるが
タイミングが悪くかわされる…三個目でなんとか前足に刺すことが
でき毒状態になった!!!成功!

あ！現実だからナイフ突き刺さったまんまなのね…
なんか怖さまりました気がするんだが…

何はともあれこんな時のために作つといてよかったぜー
さつきと同じような感じで麻痺ナイフで麻痺らせて…

今のうちにシビレ罫設置…完了!

これより第二次スリングー松明作戦開始!

起爆榴弾もセット完了!

さあ来い！アンジヤナフ！最終バトルといこう…
って、ごめんなさい…めっちゃ怖いです。漏れそうです。
アンジヤナフがこちらに向かって直進してくる。

途中でシビレ罫にあたりアンジヤナフが止まる

よし、なんとか罨にかかった

チートわざ発動！ スリンガー松明

先に設置した起爆榴弾に松明があたり爆発する。

松明に連鎖し起爆榴弾がどんどんと爆発をしていき、アンジャナフの足にどんどんと傷ができていく

「フツハハハツ、圧倒的じゃないか我軍は！」

やべー 言ってしまった…

前世で一度は言ってみたかったセリフ第三位

これめっちゃハズい…：穴があつたら入りたいくらいやばい

シビレ罨の効果切れた!!はいよ！そして効果切れたのわかり易すぎ！

ビリビリ言つて稲妻みたいなのがアンジャナフの体をかけていたのが一瞬で消えたし！

体感時間でゲームの半分もないよ…

これ以上どうやって戦えつて言うんだ…

えっ！足引きずつて逃げてくじやん！

キター!!

これ勝てちゃうパティーンじゃね？

空の王

あ!! 思い出した!! なんでリオレウスって思ったけどワールドのアンジヤナフクエストってリオレウスでてくるんじゃない!

あいつめっちゃ睨んできてるし!

あの巨体空飛べるんだ: すごい: (現実逃避)

リオレウスでかくね? ゲームで見るやつの2倍位ある気がするんだけど:

ゲームと現実の差かな? めっちゃ怖いです

また希少種や黒炎王じゃないだけまし: つてなるわけ無いだろ! 畏もうないし樽Gも、使い切っちゃったよ!?

あれ? 詰んでね: (絶望感)

ホバリングしながら睨んできてるんだけど

これ背中向けたら3秒たたずに食われるよ: たぶん:

てかなんで睨まれてるの?

俺狙い? 俺狙いつすか? やめてください (切実)

またはアンジヤナフの肉狙ってる? だとしても食われたら討伐証明できないから違約金じゃん:

15歳で借金生活とか: 世の中辛:

いや、その前に生きて帰れるかすら怪しい:

咆哮うるせえ!!!マジ耳壊れる!!この距離でこれとか……ほんとごめんなさい!ゲームのときに耳栓とかいらないやろ(笑)とか言いながら大剣で特攻させてごめんなさい……

謝るんで耳栓ください!

あ、絶対ゲーム内のハンターってこんなこと考えてるから咆哮の後しばらく動けないんだな(確信)

つてあぶねえ!

油断もツ!リオレウスの尻尾が横から飛んでくる、スキもあつたもんじゃねえ……

リオレウスは前世のゲームで1番狩ったモンスターだったからモーション覚えてて、なんとかかわせるけど……

これ知らなかったらほぼ確実に死ぬ

麻痺ナイフ残ってるコレクター!とリオレウスに麻痺ナイフを突き刺し、しびれ状態になった!!

やっぱ体中に稲妻みたいなのがかけるのは変わらんなんだね

大樽も残ってるじゃん!1つだけ

ないよりマシだ!!神の思し召しやな!

つて神いるならリオレウスに会わないようにしてくれよ!

なら!準備をやり過ぎなくらいまでしてた俺!マジ!ナイス!

と大樽をセットして遠くから撃ち抜く。やっぱ弱いか……樽Gと比べると半分もない……爆発が広がっていく

あとは起爆榴弾と松明……がない!?

おワタ：遠くからリオレウスに徹甲榴弾を打ち込んでく、

あ、これβテストのときは時間制限でクリアできなかったけど時間制限無いし。

ライトボウガンでチマチマと遠くから徹甲榴弾を当てていく

閃光玉でまた落としては遠くから少しずつ削っていく

徹甲榴弾で気絶値も溜まったのか途中一回気絶させることに成功した。

これ、今んとこ前世のモーション覚えてるからノーダメだけど受けたら、一発で死ぬよな…

もし死なくても腕とか無くなる、んで気になったんだけどさ？腕飛んで回復薬とか使ったらピッコロさんみたいに生えてくるの？

怖くて絶対できないけど！

生えて来なかったら人生詰むし！

生えてきたらそれはそれで軽くホラーだよ！人間やめてるよ！

解毒薬とかも持ってるけども使うまでもなく爪当たったら死ぬしな

使いみちがねえ

ほんと前世で

チキンとか空の王（笑）とか言ってますいませんでした!!

今してる人も舐めてると痛い目に合うぜ！って誰に言ってるんだ

…

リオレウス怖すぎておかしくなってきた…

まともな精神じゃ絶対戦えないよ！アドレナリン出まくりだよ！

とかやりながらリオレウスが頭につきささった徹甲榴弾の爆発とともに空から落ちる

今ので顔面部位破壊できてんじゃん！！

よっしゃあ！松明新しくゲットしたしこれでとどめじゃー！！

小樽G持ってるやん2つだけセットして

小樽Gをボウガンで撃ち抜く爆炎が上がりリオレウスが見えなくなる…

って小樽のくせして、なんで大樽より爆発してんだよ

「やったか…」

あつ…これやばいフラグ立てちゃった…

絶対生きてるやつだよ、怒ってるや…

爆炎が晴れ倒れ伏しているリオレウスが見える

えっ!?倒した!?フラグは?いや、回収したくなかったけどそんなことあるの!?

まあ、倒せたから良し!!!

今度こそあの狩猟の曲流れてるよ…

あれ結構好きなんだよな

あの曲やりきった感があつて

それにしてもほんと怖かったよ

ホントはこのまま腰抜けて倒れそうだけどこここで倒れたら他のモンスターに食われそうだし…

照明弾撃つてとつとと帰りたいです…

モンハンターやめます…怖すぎです…

趣味で採取しけません：

って、相変わらず早いなギルマス！またギルマスだし！

ギルマス暇なの！？ねえ？しかもニヤけるな！

まじ、家帰って寝たいです：

また怒られてなかなか寝れなかったです まる

ギルマス！2nd

この前の新人の衝撃的デビューから3日がたった…

あれから新人は来てない…

あの新人なかなか見込みがあつたのにお…親を説得できなかつたか…残念じゃ…

ガツタツ

おお！この前の新人じゃな…

親を説得できたんかのお…

これは楽しくなりそうじゃ

と、ここで副ギルドマスターと目があつたのでうなづく。

この前のクエストが終わつたあと…副ギルドマスターと会議をしてどのくらいの良識があるか次のクエストにアンジヤナフの討伐に行ってもらふとふっかけることにしたのじゃが…

流石に厳しいかのお…

本人が拒否したら無理強いはしないように言つておるがあの副ギルドマスターのことじゃからな…

「今回のクエスなんですけど古代樹の森でアンジヤナフが確認されたのですがそれを…さんには狩つていただきたいと思つています。

それと、古代樹の森でリオレウスが確認されたという情報が入つておりますので気おつけてください…討伐できれば討伐してもらつても構いませんが…ボソツ

では、アンジヤナフの討伐をお願いしたいのですが…」

「はいー」

エツ!?返答はやすぎやしないか…。

アンジヤナフだぞ…普通新人が狩るようなモンスターではない

しリオレウスも近くで目撃されている

そんな危険地帯にほぼ考える時間もなく返答するとは…アンジヤナフやリオレウスを知らない可能性もあるかものお…

リオレウスは空の王として有名じゃが…

アンジヤナフは最近発見されてまだあまり見た目はしられて…

と、新人を見ると

なんじゃあその目は…まるで獲物を狩るかのような闘志のみなきつた目で受付嬢を見てる…

まさか、アンジヤナフとリオレウスを知りながらも行きたいと

何が倒す方法があるとでも言いたげなあその目は…下手したらリオレウスも同時に倒してやるとでもいうかのようななんて目をしてい
るんだ…

止めるべきかと思ったが…

これは行かせてみるのも面白いかもしれないのお…

新人と目があったので

(やりたいようにやれ) という意味を込めて微笑みサムズアップを
する。

あやつはほんとに楽しませてくれる…

しかし副ギルドマスターは仕事が早い。手続きは全て終わりあと
新人が出発するのを待つだけとは…

しかもあの目を見てもビビらないとはなかなか…

だが、心配じゃのお…

そして、アンジヤナフを狩りリオレウスを避けるだけの戦略…見て
みたいものじゃのお…

今回もこっさりつけていくことにしよう…

そこからが、はやかった。

新人はアンジヤナフを見つけ何かを準備したと思っただけなのに
アンジヤナフにライトボウガンを打ち込む…

しかし、ライトボウガンとは珍しい武器じゃのお…

実践で使っているのは濃とて、初めて見たわい…

って、なんて戦い方してるんだ新人は！

あんな、もうアンジヤナフが可哀想じゃないか…

しかもあの樽なんであんな爆発してるんじゃないか！あの地面の火も…
もう疑問がたえないぞ！

しかも、二度も同じことして…

もうアンジヤナフが足を引きずっているじゃないか!?

あの新人なんて強さじゃ…（強さなのか…？）

寝てるアンジヤナフにまた爆弾を仕掛け…なんて恐ろしいことを

…

そんな、ことされたら…と、倒した!?

なんじゃ！何なのじゃ!?!もう苦笑いするしかないような気分じゃ

…

それと途中に一言だけ言った

「圧倒的じゃないか我軍は！」ってなんじゃ…

もう自分でも混乱して感情がわからなくなってきたぞ…

グアアアアアアアアアアアアアアア!!

っ、まずい…リオレウスが…

あの新人はリオレウスが現れたのに逃げようとせずに睨み合っているなんて度胸だ…

リオレウスと対峙して生きて帰れるハンターがどれだけいるか…

大規模な街のギルドの話を知ると年間30人はリオレウスに殺されているらしい…

しかもあのリオレウスでかい！普通のリオレウスの2倍近くあるじゃないか!?

そんな、リオレウスと怯えもせず睨み合う新人とは…末恐ろしい…が勝算はあるのかのお…

新人が何かを投げたと思ったら

ピカッ!!!

目の前が急に明るくなる

うあわ!!!目が!目があ!目がアアア!!!

やっと治った…えっ?、リオレウスが落ちている?あの空の王者が空から落とされて…

あの新人…もしかしたらもしかするぞ…

そこからは一方的だった。

まるで未来が見えているかのようにリオレウスの攻撃を躲し新人の攻撃は吸い込まれるかのように当たっていく…

これは…と、また爆弾を設置し…

「やったか…」

え!?そのセリフ言うの!?数々のハンターたちがそのセリフとともに死んでいったそのセリフを…

そのセリフいつてモンスターが倒れたの始めてみたぞ!?

わかっておったのか?

で、新人は余裕であったとも言える様に照明弾を打ち、剥ぎ取りをししていく…

普通リオレウスと戦ったハンターはG級でもなければ一度へたり込む…

それほどにリオレウスは強いのだ…

リオレウスに勝つことができるハンターは全体の4割もないと思う…しかもそれを無傷となると…G級ハンターならいけなくもないが、上位ハンターならごくごく一部ができるかどうかの世界だ…

なんて新人なんだ…

またバレないように移動し竜車で迎えに行く

帰ってからわかったがまだ親に許可を取ってなかったようだ

あの新人は面白い。今度わしも交渉に行ってもいいかもしれんなあ…

あと、あの討伐した方法、新人にとっては生命線になるかもしれないが公開してほしいのお…

あの方法なら今よりはもつとハンターの死亡率が下がるかもしれないのお…

閑話休的なものを

「あーおじさん！今回はイビルジョーですか?!?!?
まじすごいつすねー!!流石です!!」

「まだおじさんって年じゃねえと思うんだけどな…」

お、わかるのか？いや、この前お前のハンターデビュー戦見てから体がウズウズしてなw

なかなか手応えのある相手だったよw」

っと、いま会話しているのは俺が五歳のときに見たドスジャギイを討伐した先輩のハンターだ。

何でもこの前俺のハンターデビュー戦を影から見たらしく

3日怒られて監禁されたあとギルド行く前暇つぶしてるときにシヤガルマガラを狩ってきた帰りのおっさんと遭遇し偶然仲良くなったのだ。

何でもこのおじさんもなかなか強いらしく2度目のクエストでドスジャギイを倒しそこからはトントントン拍子でG級まで上がり詰めたらしい。

だからからかい半分でおじさんなんて呼んでいるが年齢は28くらいだ（本人談

「しかし、お前もなかなかすげえよ

アレだろ？二度目のクエストでアンジヤナフとリオレウスのど同時討伐だろ？

まじで見たかったわーw」

「いや、それほどでもないですよ…」

ホントギリギリの戦いだしめっちゃ怖かったですもん」

「ギリギリとか言ってお前一撃もモンスターに攻撃受けてねえじや

ねえか！」

「えっ!? あんなに一発でも当たったら死んじゃいますよ
てかなんで知ってるんですか?」

「いや、それでも異常だよ! お前ほんとおかしいわw おもしれえ!
あつ…、いやな…ほらどこにも目立った傷が無かったから、初クエ
ストみたいに全部回避したと思ったんだよ。」

なんかめっちゃ怪しんだが…

まあいいやそんな大事なことじゃないしw

てか、ドスジャギイもアンジヤナフもリオレウスもめっちゃ怖い
けどゲームだと基本雑魚モンスターに入りそうだし 怖いけど(大
事なことだから二回言う)

そんなすごくくないと思うんだよな…

リアルで遭遇したらトラウマ級だけこのおっさんみたいなハ
ンターも現実にいるんだしほんとにゲームみたいなハンターとかお
おそうだし…

てかこのおじさんマジですげえー

シヤガルマガラ倒して物足りねえとか言ってイビルジョー倒し
に行くとか何もんだよ、バトルジャンキーかよ!」

「バトルジャンキーじゃねえよ! お前声漏れてるぞ

それならお前のほうがバトルジャンキーだろ

アンジヤナフ倒してそのまま逃げてくればいいのにリオレウス倒
すとか」

「いや、知らなかったんですよほんとに討伐したモンスターの遺体
がないと討伐完了ならないと思って」

「それで倒せる神経がおかしいw」

なんて楽しい会話を先輩ハンターとギルドに向かい途中でわかれ、

鍛冶屋に向かう。

来たぜ来たぜーこの日が！

この前倒したりオレウスとアンジヤナフを使って俺専用の防具と弓矢を鍛冶屋に作ってもらったのだ。

ずっと思ってたんだけどさゲームであんだけでかいモンスターの素材あるのになんで装備一式作れねえんだよ！鍛冶屋下手くそか！

っと思ってたけど昨日交渉しに行ったら作れんじやねえか！むしろ余った素材売って懐ろが温まったままである。

んで、なんで装備を作ったかというと採取に行きたいのにあのギルドの奴ら俺を無理やり狩猟に行かせるからだ。

採取にしか行くつもりはないが強い装備を作っとけばいざというときに役に立つ。もともとハンターになったのも自衛のためだしな

：

あと村なんでモンスターに襲われないんだよ

肥やし玉でも家の塗装に塗ってんじやねえのか？

と考えながら、鍛冶屋に向かう。

「おやっさん！できましたか？」

「おう！よく来たな！あんだけ上等な素材があれば…な

完璧だ！ついてきてくれ！」

「おおー！！」

思わず声をもらしてしまうほどかつこよかった

リオレウスとアンジヤナフの融合装備なんてゲームでは考えられなかったがここは現実なので自由が聞くのだ。めっちゃかつけ!!!

これを俺が倒して作ったって考えるとめっちゃくちや愛着がわく。

ベースがリオレウス装備なのが所々にアンジヤナフの革や牙などが使われており…まあ、とにかくかつこいいのだ。

「これ装備してもいいですか？」

「おう！サイズとか合わなきや言ってくれ！
すぐ直すから」

「これびっくりするくらいピッタリですよ！」

「おう、なら良かった。」

「そういや、あのジジイがお前が来たらギルドに来るように言っ
いてくれて言われてたな…」

「その装備そのまま着てっていいから行ってこい！お代はきちんと
貰ってるしな！」

「エツ…、ギルドマスターが…」

「嫌な予感しかないんですが…」

「しかも俺、まだ2日しか休んでないよ…」

「命の張り合いして説教と筋肉痛と帰ってきた日死んで…」

「次の日武器作ってもう召集ですか」

「とんだブラック企業だ!!夏休みよこせ!!!クソジジイ！」

「と心の中で叫びながら新装備をまとい嬉し半分苦し半分でトボト
ボとギルドに向かう…」

うん、可愛いは正義

と言うわけでギルドにやってまいりました！

あのクソギルマスはどこだー？

って、もう絶対めっちゃ待ってたやん！

これ面倒くさいこと頼まれるやつだよ…ホントやめてください…
大型モンスター怖いです…戦いたくないです…

で、ギルマスの部屋に入ってきたんだけどなんでサキユバス疑惑大の受付嬢も入ってくるのかなー？

あれれ？逃げたいです…

「して、こんな所に呼び出した理由が気になっていると思うが…

ここ最近この村の周辺で暴れているモンスターがいることは知っておるか？」

「いいえ、」いや、絶対巻き込まれたくないんです拒否させていただきます
いほんと噂聞いたことあるよ倒せとかいうんだろ！

ジョジョやるぞ！俺的ここぞというときに行ってみたいセリフ
第三位の！

「そうか、まあ暴れてるモンスターがおるんじやがな…

そのモンスターは本来霊峰にいるはずなんじやが何故かこの村の
近くにいてのお…

商人たちが困っておってのお…ギルドとしても早急に対処せねば
ならんくて…他の村のギルドにも協力要請をして何人ものハンター
を送ったんだが立ち撃ちできるものがおらんくてのお…

殆どの者が命からがら逃げてきたんじや…

そこからついた名が『無双の狩人』じや、

えっ!?

ここユクモ村なの!?!違うよね雰囲気とか違うし

でもその設定とその二つ名とか出身地的にはやつしかいないよな
…

いや、無理だつてあいつパッケージモンスターだよ!?!何故かわから
んけど王つてつくんだよ？見た目も怖いし、うそだろ!?!なんで俺なん

だよ丁重にお断りさせてもらおうわ

ほんと勝てないから…

「で、そのモンスターが牙竜種と呼ばれるまだよくわかってない種族で、名前が雷狼竜ジンオウガじゃ、」

「ってやつぱり!?最終的には金雷公とかいうよくわかんねえ名前つけられたりするやつじゃん!」

無理だよ?やんないよ?

「って、受付嬢!こつちを見るな!今回は絶対目を合わせないかな!フハハッ目を見なきやこつちの勝ちなのだよ!」

「して、今回はそのモンスターをとあるハンターと協力して狩って貰いたいのだが…」

え!?無理です

「てか協力って誰とだよ

まあどつちにしろ

「今回の件h…」

「入ってくれ」

いや断らせろよ!話被せんなよ!マジふざけんなよクソジジイ

と後ろからドアを開けて入ってくる女性ハンター

おっ!?女性ハンター初めてみたんだけど…

「ってそれ以上にめちゃくちゃ可愛いんですけども

年も2つ上くらいかな?めっちゃ近そうだし

「なんか、受付嬢を美人系だとするとこのハンターはかわいい系だな

絶対!

「ってか目離せないんだけどめっちゃタイプです!結婚してくださいな!」

「俺この人に合うためにハンターになったのかもしれないなあ…」

「と言うわけでじゃ、二人で行ってくれ

ほんとに受けてくれて助かったわい…

竜車はもう用意してあるからいつでも行けるがお主らで話し合つてタイミングを決めて行つてくれ

今日は遅いから明日の朝でも構わんが…」

ん？あれ？耳がおかしくなったのかな…

「じゃ今回はよろしくー！」

と、先輩のハンターさんが手を出してくる

あつ、握っちゃったよ

これ行きますつて事だよ。

今更拒否できないよね！くそっ！！あのジジイまたやりやがったな（完全に自分のせい

「じゃあ、いったん出て作戦会議しよつか！」

「はいー！」

つてハイじゃねえよ！なんだよ！めっちゃ笑顔で返答しちゃったじゃないか！やつも、サキユバスなのか!?!うんそういうことにしよう
じやなきや納得できねえ…

てかサキユバスおおすぎ！

15年生きてて全く会わなかったのにここ何日で2人も会うとか
草生えるわ…

つて現実逃避はやめないとほんとに大変なことになる…

「じゃあ、第一回！無双の狩人、狩人が狩りに行っちゃうぞ！作戦の作戦会議をはじめます！イエーイ」

「イエーイー！」

つてよくわかんないこと言ってるけどめっちゃ可愛いから乗っちゃう。なんだこれ…

「んで、一応ギルマスから聞いてるけど情報はなるべく合わせなきやだから確認するけど君はどんな武器を使うの？」

「いや…あの…、弓を使っています…」

やべー何だこの恥ずかしさ！

弓使ってる人めっちゃ少ないしかっこ悪いみたいな風潮あるから言いづらい…幻滅されたら立ち直れないよ俺…

「弓かあ…」

やめてー！そういうリアクションやめてー

俺のライフはもう0よ！

「先輩の武器なんですか？」

「あー、双剣だよ！」

「かわい…かっこいいですね！」

やべー危うく可愛いつていうとこだった

初対面で言うとか恥ずかしくて無理

「先輩の武器って何属性ですか？一応今回のモンスター、氷で攻撃とかすると有利な気がするんですよー、水や炎も効かないわけじゃないんですけど…

あ、自分は炎しか持ってないんで炎なんですけど」

「えっ…属性？何それ…？まあ攻撃すると氷みたいなのは一瞬見えるけど、これなんだけどわかる？」

「あつ、氷属性ですねー！これで攻撃するとめっちゃ有利ですよ！」

やべー、この世界少し遅れてる？とは思ってたけど属性もわかんねえのかよ！

もうこれやばいんじゃない？

こんな感じで会話していき情報を照らし合わせ作戦を作り明日の集合時間を決め解散する

はあ…もう明日来るなよ！ジンオウガとかホント無理だから…

死にたくねえよーバツクレたら違約金だし

まず第一にあんな可愛い女の子一人で戦わせるわけには行かない！誰だ今女の子に近距離で戦わせて

遠距離からちまちま攻撃しようとしてるやつが何を言うとか言つたの。事実だから何も言い返せねえよ！おい！

明日に備えて今日はもう寝ます。

舞姫：…戦闘狂の間違えだろ…

あ、うん、あの人まじ怖い…

なんで右手切断されて吹っ飛んでつたのに笑ってんだよ！

ジンオウガまじ怖い：ほんとに一瞬だったよ…腕を高く振り上げ
手降ろしたと思ったら先輩の右腕が宙を舞っていた…

んで先輩も先輩だよ

落ちる前に右手空中でキャッチしてるして笑顔で右手をもとの場
所にあてがって秘薬呑んで元通りにくつつくとか…どこのファンタ
ジーですか!?!あ、モンハンですね…

モンハンってこんな狂気的な世界なの!?

もう目も当てられないじゃん!怖えよ…

涙出てくるわ…あれ絶対バトルジャンキーだよ、

たのしんでるよ。この世界何でもありだよ…

切れた腕が葉飲むだけで回復…怖くてやる勇気ないけど…ハン
ターで、そりゃあ、四肢が切断されてる人とかいないわけだよな

女の人でハンターしててあまり大きな怪我とか見当たらないから
あまり慣れてないのかと思ったら、

そういうことなのね…

しかもあの人ジンオウガ見つけた瞬間切りかかっていったからね

なんで!?!もうこの世界のハンターみんな特攻精神の持ち主なの?
怖くないの!?!

で、まあ詳しく話すならモンスターが視界に入った瞬間、隣から
走って行って段差を使ってエリアルばりの大ジャンプしたと思っ
たら、その場で方向転換そしてジンオウガの背中に照準を合わせ

どっかの栗兵長を思い出すようなワールドの双剣の乱舞？ だっけ？を繰り出し初めて戦闘開始だよ！

しかし、きれいだったなー

流れるような動作で切り込んでいくから、まるで舞を見ているようだった…

二つ名とかつけるなら舞姫って感じだな

たしかにさ、背中を氷属性で切ると弱点なんで大ダメージ入りますよ とは言っただけどさいきなりそりやないだろ！

って危な！オウガさんこっち狙ってきてるしこんなこと考えてる余裕ないじゃん！

まじ死ぬ!!そりやさ！女の子に前衛で戦わせて男の俺が遠距離からちまちまは、どうなんだよって思ったよ…

だけどそれしかできないからオウガの攻撃とかに合わせて先輩の動きやすいように怯ませたりしてたよ

んで先輩の腕切られてそのまま先輩殺されそうだったから目狙って打ったら怒って攻撃してくるわな…

てか先輩ニヤけながら腕くっつけてこっち来るし何なんだよあの人…

オウガさん速すぎっす！かわすので精一杯だよ…

攻撃とかしてるヨユーないよ…

あれ？

先輩赤いオーラ纏ってね？どっから出てきたの？あのオーラー？悟空の界王拳みたいなかんじでオーラーが生きてるみたいな感じなんだけどもマジで怖いですよ先輩！

先輩の後ろに はんにや？みたいな見えてるよ！

目もやばいよ、あれがちな捕食者じゃん…

あれ、絶対鬼人化だよな…リアルで見るとマジで怖い…この世界のハンター近接戦闘系はめっちゃくちや発展してるのな…

って先輩はやい!? 右から左、左から右へと赤いオーラの残像が通っていくのは見えるが先輩が見えない

俺もちまちま攻撃してくけどさオウガさん! かわいそうすぎるだろ! どんどん線状の切り傷ができてるんだけど…

俺はちまちま落とし穴設置しながら見てま…

落ちた!! はえええー!!!

設置2秒とか? って先輩落ちても変わらず攻撃って…オウガさんより先輩がこええよ

俺もさり気なく竜の一矢とか打ってるけどさ

先輩やばすぎてダメーシ入ってる気がしないよ

先輩の鬼人化めっちゃ長いしゲームの5回分くらいの時間たってますよー

うん、この世界のハンター危険すぎ、だから閃光玉とか落とし穴とか無かったのね…いらぬいもん…

これ俺いるの…?

っと、ジンオウガがひとときわ大きな咆哮をしそのまま倒れてく…って倒した!? 無双の狩人を?

マジすげー、先輩なにもんだよ!

「お疲れー! いやー、危なかったね、なんとか倒せてよかったよ!」

「お疲れ様です! いや、先輩が凄すぎて圧勝だったように見えるんですけど…」

「こんなことないよ? 後輩君がうまく動きとめてくれたから。楽に狩れたし!」

「まあ何はともあれ、終わったんで自分照明弾打ちますね…」

「おねがーい！私疲れたから少し休憩来てるねえ…」

と照明弾を打ちギルマスを待つ。

あれ？今回ギルマスじゃないんだね…

しかも来るの遅いし…

討伐できてよかったよ…

村に帰る途中の竜車でボツとしてると急に目の前に顔が出てきて…

「楽しかったね！また一緒にクエスト行こーね！」

先輩近いつてめっちゃいいにおいするから

「いや…あの…えーつと…自分足手まといになっちゃうので…」
と、しどろもどろになりながら答える。

先輩近くて緊張したとかじゃないよ…見た目だけは滅茶苦茶可愛いから思わず 「はい！」 って言いそうになったけど！そうだよ、悪いか？前世でも今世でも彼女なんていたことないし女性と話したこともねえんだよ！

こんな近くに來たらビビるわ！惚れるわ！いやもしかして惚れるのかとか勘違いしちゃうよ

っていうのもあるけどこの人と狩りに行ったら絶対大型モンスターじゃん！バトルジャンキーじゃん！こえええよ

俺はもう採取クエストしか行きたくないよ…

「そうかな？むしろこんな楽なら毎回一緒に来てほしいくらいなんだけどな…」

毎回一緒に!?!それ新手の告白ですか？

ハンター業界での「毎日、俺のお味噌汁作ってくれ」的なやつです

か!?

つて、あるわけないよな…いいだろ頭の中くらいこんなこと考えても!そんなくらいさせろ!

「今は、やりたいことがあるのでできません

すいません…」

つて、やりたいことも何もないけども後でも言わないと無理だからほんと…

「そっか、残念だな…」

んで、その後は二人で楽しく話しながら村に戻ってきた…ん?村の入り口にいる鬼は…

つて母さん!?

母さんはジンオウガよりも怖かったです…まる

先輩視点

昨日の狩りは楽しかったなあ…

というのも普段はソロで活動しているのだが昨日はとある新人ハンターと狩りをしたのだ。

最初はあまり乗り気にはなれなかったがあこのクソギルドマスターと失礼、ギルドマスターと一緒に狩りに行ってほしいハンターがいると勧めてきた

私はソロが好きなので最初は断っていたがあこのギルドマスターが異常に勧めてくるのですこし気になつてはいた…

よくよくそのハンターの話聞いてみると武器が弓やらライトボウガン？という珍しい武器を使ってるらしいのだ…

遠距離の安全圏からちまちまから攻撃してかてるのか!?なんとうやつめ！臆病者！けしからんやつだ！

と思つたのだが…

何でも初クエストでドスジャギイを狩り、2度目のクエストでアンジャナフとリオレウスを同時に討伐したらしい

これは異常なことだ…私でさえ普段リオレウスと戦ってギリギリ勝てるかどうかなのにアンジャナフまで狩ると言うのはわけがわからなかった…

そしてどんな戦い方をしているのか気になつてしまった…

なのでギルドマスターの提案を受け入れて一緒に行くことにした。

初めて顔を合わせたときは意外だった…

新人だがアンジャナフとリオレウスを同時に狩るくらいだから体も大きくて肉の団子みたいなのがあると聞いたのだが

意外に小さかった。

何でも15歳でハンターになったらしくまだ幼さの残る少年だつ

た…

こんな少年がリオレウスを…

どちらかというところとパツと見た瞬間に守ってあげなきゃ!と思った。少年はジーツとこちらを見ていた。なんかあるのかな?

ギルマスの話が終わったみたいだったので

「今回はよろしくね!」

と手を出すとすぐに握ってくる

頬が少し赤くなっているみたい…可愛い…

慣れてないのかな?こんな子がハンターか…向いてないよね

などと思いつつ部屋から出て外で作戦会議を行なう。

ただハンターの出発前の作戦会議なんて出る時間と攻撃のときにかぶらない様に攻撃部位を分けるくらいしかしないのだけど…

不思議な子だった

属性とか背中を攻撃するのがいいとかこんな動きをするから気を付けてとかこんな作戦会議をしたのは初めてだった…

なんだかんだあつて次の日に狩猟に出ることにした

で、肝心の狩りだがものすごい楽だった!

弱点というのが気になって発見した瞬間に背中に飛びかかったのだがいきなりダメージを入れられたようだった…これいいね

で、私が近距離で攻撃していたのだがモンスターの攻撃にあわせて矢を打っているのかモンスターからの攻撃の殆どは相手か怯んで当たらなかった

ただし、あまりに攻撃が当たらないので1度油断してしまい右腕が飛んでいく…モンスターと戦っているハンターにはよくあることなのだが、新人はものすごい驚いていた…

私はまだ飛んでいる腕を空中でキャッチしモンスターを見た瞬間!右腕を大きく振り上げていたのだ、あつ…死んじゃう…

と、赤い光を纏った矢がモンスターに飛んでいき、目に突き刺さる。

それを見て私は一歩下りなんとか攻撃を回避するモンスターはさっきの一撃に対して怒ってしまったようで少年に向かっていく…

私は嬉しかった…助けてくれたのが…一人で戦っていたら確実に死んでいた…

そしてあんな戦い方をしているととても面白いと思ってしまった。

顔がにやけてしまったが腕を切れた場所に当て秘薬を飲む…と緑の光を放ちながら切断面がみるみるくつついていく

新人…いや、後輩君がモンスターをひきつけ時間を稼いでくれているのでゆっくりと回復することができた。この回復のときに焦ってしまい腕が動かなくなったハンターも何人かいるのだ…

よし治ったー！

こつからは本気を出させてもらおう！と、双剣を使うハンター達に代々継がれていくモーシオンをする

と体の奥底から力が湧いてくるようだった

それと共に赤いオーラのような物が体からあふれ出してくる

それを纏い、後輩君が頑張ってひきつけてくれているモンスターに向かい、走り抜けながら切り裂いていく…

モンスターの攻撃は後輩君が防いでくれると信じてただひたすらに特攻をしていく

後輩君が何か押していると思ったらモンスターが穴に落ちた

そのままチャンスとばかりに私はどんどん走り抜けながら切り裂いていく

モンスターが一際大きな咆哮を放ち倒れていく

え!?勝った!?無双の狩人に!?

まさか勝てるとは思っていなかったのもものすごく嬉しかった

一応、先輩なので私から話しかけることにした

「お疲れー!いやー、危なかつたねー、なんとか倒せてよかつたよ!」

「お疲れ様です!いや、先輩が凄すぎて圧勝だったように見えるんですけど…」

「こんなことないよ、後輩君がうまく動きとめてくれたから。楽に狩れたし」

「まあ何はともあれ、終わったんで自分照明弾打ちますね…」

「おねがーい!私疲れたから少し休憩来てるねえ…」

なんて会話をしながら私は双剣の奥義を使って動かない体をバレないために影に行き少し休む…

本当は他のモンスターがいつ襲ってくるかわからないから言わなければいけないのだが…

何故か体が動かないのをバレたくなかつた…

しかしあの少年はすごい…

次から一緒に狩りに行けたらどんだけ楽になるか…

そして、話もなかなか面白い…私はあの少年を気に入ってしまったようだ…

村に帰る途中の竜車でボーツとしているようだったので…

「楽しかったね!また一緒にクエスト行こーね!」

近づいて話しかける 赤くなっちゃってかわいい…

「いや…あの…えーっと…自分足手まといになっちゃうので…」
しどろもになりながら答えてくる…

緊張しちやってるのかな?足手まといなんてむしろ次から後輩君無しで狩りなんて多分無理だ…

「そうかな?むしろこんな楽なら毎回一緒に来てほしいなあ…」

「今は、やりたいことがあるのでできません」

「すいません…」

まあ、そりやあそうだよね15歳でハンターってよっぱどの何か事情があるのかと思っただけどやっぱりそうなのか…私も協力できたらいいんだけど…させてくれそうにないよね…この子…でも、いつでも私は助けに行くからね！

「そっか、残念だな…」

んで、その後は二人で楽しく話しながら村に戻ってきた…

あんなに強い超大型新人でも母親は怖いみたいですw モンス
ターを一切怖がらないから心配したけどやっぱ15歳の少年なのね

w

で、後輩君の母さん…ジンオウガよりも怖かったです…まる

俺は何がなんでも採取クエストに行く！

先輩との狩りからまた3日がたった…

いつも思うけど筋肉痛ひどすぎ…

一日目とかベツトから動けないし、歩いただけで涙出る筋肉痛ってどんなんだよ…

というわけでやってきました！我がギルド！4回目のクエストを受けに来ました！

うん今回は採取クエストに行くよー！

ギルマス？知らないですね…受付嬢？もう慣れた（強がり）

んで入ってきたんだけど、

「後輩君!!!一緒にクエストいこーよー!」

入った瞬間飛びついてくるのやめてくれませんかねえ

心臓がやばいです。マッハで加速してるよ

うん、先輩諦めてくれなかったのね…

なんとなくわかってたよ…こんちくしよおー!!

「今日は採取クエストに行きたくて…」

「え?なんで採取クエスト?」

「欲しいものがあるんですけどなかなか売ってないので自分で取りに行こうかなって思ってた」

そうだよ…色々足りないんだよ!悪いか!無理やり、大型モンスターばかり狩らせるから、アイテムがマッハで減ってたんだよ。

ストックも、殆ど無いし…あと3回クエスト行けるか行けないかってとこだな…

え?3回分あるなら先輩とデートでもしろよ!羨ましい?

いやいや、3回しかないんだよ…念には念を入れないとこの世界何があるかわからないじゃん!

村とかモンスターに襲われるかもしれない…

「なるほどね…」

そっか…私も採取クエストそろそろ行きたかったんだけどね…今日はもう他の大型モンスターのクエスト受けちゃったから…

また、今度一緒に行こうね！」

「き、キカイガアツタラお願いします…」

「カタコトだけど大丈夫？」

や、やばいまともに話せてないよ…

「じゃ、じゃあ、自分で行きます！」

と、受付嬢のところに行き採取クエストを受け溪流に向かう

(この頃ギルマスはあの新人が採取クエスト…これは何かあるのか…?とか思ってます。)

ブルブル…

何か今ものすごい身の危険を感じたけど気のせいだよな

ただの採取だし、来る前ギルマスが変な顔してたけど何もないよな

…

などと思いながら蜘蛛の巣や光蟲カクサンデメキンなどの必要なものを集めていく

!?

あれ、ハンターらしきとモンスターが戦ってる…?

よく見えないし少し近づいてみよ…

って、ティガレックスじゃん！

戦ってるのは4人のハンターだ。でも装備弱そうだったぶん運悪く遭遇しちゃったんだろうな…

かわいいそうに…

って、俺もやばいって！絶対やばいって！

バレたら死ぬって

時速50キロで走ってくる竜とかただの悪夢だよ

一応、毒瓶とか何かあっても対応できるようなには持ってたけどさ轟竜は予想外だから！

ホントやめてー！リオレウスの弓だから毒瓶使えるじゃん！使えたら使おう！とかテンション高かったけどあいつに使えるわけねえだろ！ふざけんなよ！

俺もこれも全部ギルマスのせいだ!!!

って、あのハンターたちやばくね…

壊滅寸前じゃん…なんとか今は抑えられてるけど

もう少ししたら一番左でおさえてる人が崩れて壊滅する未来しか見えねえよ

なんでわかるかって？

元ゲーマー舐めんな！装備欲しくて何頭のティガレックスを葬ってきたと思ってんだ！あとちよつとで絶滅するかと思っただくらいだぞ！

嘘です…ゲーマーとか調子に乗りました。ニワカです。

って、やばい！左端の崩れると思ってた人が転んでしまい尻餅をついてしまった

すかさずティガレックスが左腕を上げ叩き潰そうとしてる…

スバツ

って撃つちやったよ！勝手に体動いちやったよ!!!

え、見捨てて逃げようとしてましたよ。3秒前までは

つてティガレックス俺狙ってきてんじやん！

はい！はい！怖いって！

元日本人舐めんなオラア!!!目の前で子供がトラックに引かれそうになってたら思わず走っちゃうだろ!!それと一緒にやおりやあ!!!それで助けられたのに子供死んだら次の日からまともに寝れねえだろ！自分の命とか考えずにつっこむだろ！（そんなことありません…そんな経験ありません…

つて、ティガレックスこえー

てか、あいつら何時までそこでへばってんだよ！

助けるか逃げるかしろよ！助けられたところで邪魔だけど…

グアアアアアア!!!

咆哮か！フツ！俺には効かないな！俺にはこの前作ってもらった耳栓があるんじやあ!!

今のうちに落とし穴設置！

おらこつち来いやティガレックス!!

落ちた!!

「お前ら何やってんだ!!

ここは俺に任せて早くいけえ!!!」

あれ？このセリフもやばくね…

樽Gセット

爆撃開始!!!

少し離れ弓で樽の真ん中を撃ち抜く

ズガアアアン!!!

ものすごい爆発が起き爆炎が立ち込める。

爆炎多すぎてティガレックス見えないし、

なげえ…やっとか！爆炎が晴れティガレックスが見え…ん!?脱出

してるじゃん！

そしてものすごい速さで近づいてきてそのままの流れで大きく右腕を振り上げた…

あつ…しぬ…今からじゃ回避間にあわないし…しんじやう…唯一の救いは他のハンターが逃げるのを確認できたことくらいかな…と、考えながら今までの第二の人生の一生が頭の中に流れてくる…

親も優しかったし今考えると先輩もいい人だ…死ぬと考えるとギルマスも懐かしいな…

これが走馬灯ってやつか…前世はいつ死んだかわからなかったけど…今世は早いな…

今回はフラグ回収しちゃうんだね…したくなかったよ…

母さん、ねえちゃん…ごめんなさい…

親より先に死ぬ不幸者を許してください…そしてありがとう、楽しい15年でした　まる

悪くない人生だったな……………

共闘

一向に痛みが来ないことに違和感を覚え目を開けると血の色とはまた違った赤が見えた…

えっ!? 赤? 血じゃない…なにこれ…でも見覚えがある気がする…

「大丈夫か? 後輩くん!」

「えっ!? 先輩!? なんでここに?」

赤いの先輩の鬼人化のオーラか!

俺は先輩にお姫様抱っこをされていた…っってお姫様抱っこ!? 前世含めても一度もしたことなかったのにやる前にやられちゃったよ…キヤアー、

モウオヨメニイケナイ…

「クエストでたまたまね…」

「後輩くん、こそ採取じゃなかったのか?」

いやね 採取したかったよ…

ただ体が勝手に…

「ッ!? 先輩危ない!」

俺の視界にティガレックスが土の塊を飛ばそうとしているのが見えた…

それを先輩は俺を抱きかかえたまま…後ろを振り返ることなく、右に移動して避けた…よく考えるとすごいよな…15歳で先輩より少し小さいとはいえ男の人1人抱えて走り回るとか…さすが先輩だな…

「色々話したいことはあるけど会話はあとにしようか、まずはあいつを倒す!」

「はい!」

と言うなりすぐに

先輩はティガレックスに切りかかってく

が先輩の鬼人化はとけているらしく赤いオーラは消えていた
ティガレックスが咆哮を放ったので俺は竜の一矢のモーションを
準備する。

体から光があふれ出し矢に集まっていき矢が極限まで光をまとつ
た瞬間手を離す矢が赤い残像を残しながらティガレックスの左目に
吸い込まれていくかの様に向かっていき

突き刺さる！

「先輩くん！ナイスだよ！」

うん、先輩かわいい…ただ、あのティガレックスを獲物を見るか
のように見る目さえなければけど…でも、今はその目が果てしなく頼
もしい…

しかし、目に突き刺さった!!よし！この世界だとリアルだから目
に突き刺せるんだな…しかも刺さった矢がそのままだから視力は奪
えたはず…

ティガレックスの左目に矢が刺さったため左側に死角ができたよ
うでティガレックスの動きが悪くなり始めた…

「はい！先輩！」

俺はティガレックスの死角に移動してシビレ罠を設置する。

と、ティガレックスは目を刺したのが俺だと気づいたようで俺に狙
いを定めて近づいてくる

が、途中のシビレ罠にあたり動きが止まる。ティガレックスの体に
電気のような物がビリビリと走る

「先輩！チャンスです！」

「任せて！」

先輩の体から赤い光が溢れ出して先輩の体にまとわりつく

先輩は怒涛の連打攻撃をティガレックスに仕掛けていく

俺は何をしているか？って？矢に毒瓶で毒を塗ってるんだよ…ゲー
ムみたいに簡単にできないから結構時間かかるんだよ…終わったー。

竜の一矢のモーションをし、残った右目を狙っていく…

そんな目で見るとよ…打ちづらいだろ…

矢に光が集まったので手を離す罫で動けないティガレックスの右目に俺の放った矢が吸い込まれていき突き刺さる！

これで視力を奪った！罪悪感が半端ないです…

でも、命のやり取りをしてんだ！ 仕方ない！

と、自分に言い聞かせる…卑怯とか言うなよ…俺だって思ってるよ…でも死にたくないんだよ！

…
そこからは一方的だった…それこそ可哀想なくらいに…ごめんなさいティガレックス…

ティガレックスが目が見えていないからかバランスを崩し倒れる

…

「先輩！一度離れてください！」

俺は倒れたティガレックスの横に大樽爆弾Gを置き、少し離れて弓で撃ち抜く…

ごめんな、ティガレックス…せめてひとおもいに…

矢が樽につきささりものすごい爆発が起きる

爆炎が立ち込め風で爆炎が消えたときにはティガレックスの死体のみが残っていた…

「倒した…」

と、その瞬間俺は足から力が抜けて膝立ちになり緊張していたものが崩れいろいろな感情があふれ出してきて涙がこぼれ落ちる…

死にそうになったのもそうだし勝ち方もそうだ…もう自分がわからなくなってきた…目の前が暗くなっていくような気さえしてきた…

…

何かが頭に触れた…先輩の手だった…優しく頭をなでてくれる…

「大丈夫だからね」

先輩は俺を前から抱きしめながら頭をなでてくれる…

「大丈夫だから…」

そこ瞬間自部の中で何かが崩れ落ちた音が聞こえた…周りもはばからず…ただひたすらにみつともなく泣いてしまう…

先輩は優しかった。

ひたすらに、俺が泣き止むまで抱きしめてくれた。

先輩は暖かかった。

「先輩…すいません…」

「気にしないで！後輩くんこそ大丈夫？」

「はい、もう大丈夫です。先輩のおかげです。」

ところで先輩はなんでここにいたんですか？」

「ああ、それはな…朝討伐に誘っただろ？」

そのモンスターがこれだ。」

と、先輩はティガレックスを指差す。

「というわけで意図せず共闘することになったわけだ」

「そうだったんですね！でも助かりました！

ほんとに死んじやうと思いましたよ…」

「ほんとに無事でよかった…」

ところで後輩くんはなんてティガレックスなんかと戦っていたんだ？採取じゃなかったのか？」

と言われたので事情を話し…何故か頭を撫でられた

そのまま帰る準備をし照明弾を撃ち竜車に乗って先輩と帰っていき…

帰りの竜車の間先輩はずっと優しかった。端々で俺を気遣ってくれているのがわかった…

ほんとにこの先輩いい人なんだよな…見た目もすごいかわいいし…

だからこそバトルジャンキーなのが残念だ…

それさえ無ければ、ほんとに結婚したいくらいなのに…

思いつかなかつたよ…（視点変更してます）

俺は今危機的状況にある…

ドスジャギイを倒すクエストを受けたのだが途中でティガレックスが襲い掛かってきたのだ…

これでもまだ若手ハンターとはいえ、2年もハンターをしていたんだ！討伐は無理でも退治くらいはしてやると意気込んだのだが…現実にはそんなに甘くなかった…

ティガレックスは想像以上に強かったのだ…自分の考えの甘さに気づいてしまつのだ

四人でパーティーを組んで2年 徐々に強くなっている感覚はあつた。

それでも、ティガレックスは格が違った…

パーティーでも普段サポート役に回ってくれる仲間の限界が近かつた。

と、そいつが転んでしまつた…まずい！

ティガレックスはそのスキを見逃さずすかさずそいつに狙いをさだめ左腕を振り上げた…

すまない…なんて俺は無力なんだ…リーダーなのにパーティーメンバーすら助けられないなんて…

とその時、左側から赤い軌道を伴いながら

何かが飛んでいきティガレックスの左腕突き刺さる…あれは矢だ、ティガレックスは矢が左腕に突き刺さり狙いがずれたのか左腕を振り下ろした位置が少しはずれパーティーの仲間は助かる…

矢の飛んできた方向を見ると…あれはこの前登録しに来てた新人!?

ティガレックスもその新人に気づいたようで

一直線にその新人に向かっていくがその新人はきれいに横に飛ぶことで回避する…

あまりに突然のことに見惚れてしまっている

ティガレックスが巨大な咆哮を放つ

俺は耐えきれず両腕で耳をふさぐがその新人はなんのこともないかのように何かを地面に設置した

ティガレックスは方向が終わるとすぐに新人に向かっていくが今は新人は回避しようとしな

危ない!と思ったところで新人が設置した何かのところでティガレックスが地面に落ちる…

「お前ら何やってんだ!!」

ここは俺に任せて早くいけえ!!!」

ハッと我にかえり仲間を引き連れ去ろうとしたとき

後ろからものすごい爆発音が聞こえた

振り向くともものすごい量の黒い煙が立ち込めていた…

それでも少年は油断はしない、というように爆炎に向かって少し離れた位置から矢を放っていた

風が吹き爆炎が晴れたときティガレックスは落ちた穴から脱出しており少年に襲いかかる

危ない!!少年は動けていなかった

振り上げた左腕が少年襲いかかろうとした瞬間

赤い光の残像を残し何かを通り過ぎた様に見えた…

あれは!私達のギルトで実力ナンバー3と言われている舞姫だった。

舞姫というのはその戦い方のまるで舞を踊っているようだと言うことと本人の美しさからつけられた二つ名のようなものだ…

少年と舞姫は何か少し会話をしたあとティガレックスに襲いかかる

見事な連帯だった…あまりに凄すぎて俺には何をしているのかわからなかったがあああの戦いはひたすらに美しかった。

ティガレックスが再度咆哮を放つ

少年は一切動じずに矢をつがえ体が赤く光りだした

その光はどんどんと矢に集まり今までよりも強く光ったと思った

瞬間少年は手を離し

矢は赤い軌道を残しながらティガレックスの左目に突き刺さる

なんて攻撃だ!!

ティガレックスの目は人間同様弱いとはいえ傷をつけるのは非常に困難だ…

ただ少年はまるで当然のことをしたというように振る舞っていた

「ナイスだよ！後輩くん！」

舞姫と少年は掛け声を掛け合いながらどんどんとティガレックスを追い込んでいき

右目にも矢が突き刺さる…なんて、戦い方を…

ティガレックスバランスを崩し倒れる…

そこに樽？のようなものを少年が置き少し離れて矢で撃ち抜く

見たこともないような巨大な爆発が起き…爆炎によりティガ

レックスが見えなくなる

さっきのはこれか!!!

爆炎が晴れたときそこにはティガレックスの亡骸があった。

それを見て少年は力が抜けたように崩れ落ち、膝立ちになり涙を流していた…

確かにそうなるだろう…ハンターとはいえわずか15歳の少年があんな凶悪見た目のモンスターと戦い死にかけたのだ…

俺が15歳の頃だったら、あの死にかけた直後に戦えすらないだ

ろう：

それを見た舞姫が近づいていき頭を撫で抱きかかえる…その瞬間少年は完全に何かが崩れたかのように泣きじゃくっていた

ん!?舞姫と目があつたが睨まれる…

確かにそうだな

このままここにいるのは野暮だと思い仲間を引き連れ音が立たないように村に戻る

この際、俺はある覚悟を胸に決めた…

パーティーの仲間たちと帰り道に話し合つたが全員同じ気持ちだつたようだ…

帰つたら村に帰りギルマスに頼んだら話をつけてくれるとのことだつた。ほんとにありがたい。

また、騙された…

あ…うん…なんで俺こんな街中いや、村中か

まあどつちでもいいけど道のど真ん中で成人男性4人に土下座されてんの!?

理解が追いつかないよ…何なんだよ…この人たち見た目若そうとはいえ俺より年上だよ多分

24くらいなんじゃないかな…?

うん、他の人たちが白い目で見てるから通行の邪魔になるからさどこうよ

「お願いします！どうか、俺達に戦い方を教えてください！」

「えっ!？」

そういえばこの人達この前助けた人たちだ！

つてなんでだよ！俺弓使いだよ！この世界だと不人気じゃないの!?!弟子入りするなら先輩だろ！

あの舞うような戦いとか見惚れちゃうし

「お願いします。この前の戦いを見て自分たちもこんなふうにな戦えるようになりたいと思っただのです。どうか弟子にしてください！何でもします！」

うん、これ傍から見るとかなりヤバい状況じゃない……15歳位の少年が20を越える成人男性4人を土下座させて何でもします。つて言わせてるんだよ…

俺だったら通報する

「あの、頭上げてください…ここだとあれなので少し移動しませんか…?」

男の一人があたりを見回しこの状況に気づいたようで、顔が赤くなっただ…

「そうですね…気づきませんでした…すいません」

ギルドに併設している酒場に行きそこで話すことになったのだが
：何でも彼らは最近伸び悩んでいるとのことだった

最近リオレイアを狩れるようになったが、リオレイウスは無理だと話
していた。

そんなときにティガレックスに襲われ俺に助けられたらしい

その時、俺と先輩の戦いを見て弟子入りしたいと思ったそうだ

うん、わけがわからないよ

なんで俺なのか聞いたら戦い方、立ち回り、まるで未来でも見えて
いるかのような動き、数々の戦闘を助けるアイテム……とにかく俺の
戦い方は革新的らしい

「ほんとにお願いします！自分たちはもつと強くなりたいんです
！」

「狩りには行かずに武器の扱い方やアイテムの作り方くらいなら
……」

いやね、これ俺の生命線だけどさ

この人たちめっちゃしつこいんだよ！

多分これ教えるまで毎日土下座しに来るよ絶対！

何なんだよ……新手の営業かよ……

「何に話してんの？私も入れてー」

と先輩が後ろから抱きついてくる。

「先輩!?」

何してんの!?え!?後ろから抱きついてくるとか、彼女ですか!?勘違

いしちゃうよ!?

「赤くなっちゃって……」

と笑ってくる。

この人絶対わかってやってるよ！性格悪いよたぶん！あつ……優し
いです。マジで優しいです。だからやめてそんなケルビを見つけた
腹ペこのリオレイウス見たいな目をしないで……怖いから震えが止まら
ないから……

そんなこんなで、先輩に今までの流れを説明すると

「面白そう！私もずっと気になってたんだよね！私にも教えてー！」

先輩もかよ！あんた自分で戦えるだろ!! まあ1人も2人も5人も
変わらないからいいけどさ…

「いいですよー！」

「やった!!!」

めっちゃ喜んでる。子供みたい…めっちゃ可愛いです…結婚してください！っと危ないこの人バトルジャンキーだった…ほんとに危ない…この人可愛すぎる…なんなんだ…

「話は聞かせてもらったー！」

えっ!?この声は…クソギルマス…ニヤケナガラコツチクンナ

絶対めんどくさいことになるよ！ほんとに！やめてください！

「なかなか面白いことをしてるのお…ちようどギルドの会議室が空いているからそこで色々教えてみたらどうじゃ？ここじゃ、教えづらいこともあるだろうに、あとは武器の使い方を教えるならギルドの演習場を使うといい…使用許可は出しておく」

えっ!?気が利くじゃん！絶対裏があるとは思うけど…ここは酒場なので少しうるさい、昼間から酒を飲んだおじさんたちが騒いでいるのだ…

「だが断るー！」

ただし、この提案を受け入れるのとうるさいのは別だ。あのギルマスのことだ絶対何か裏がある。

「え〜いいじゃん！行こうよー！ギルマスがせっかく提案してくれてるんだしー！」

「はい！そうですね！」

言い訳はしない！先輩は可愛かったです まる
と言うわけでやってきました会議室！

で俺は、アイテムの作り方や特性やモンスター属性や動き、弱点などを説明していく。

流石に覚えられないのか、ノートのようなものにメモしていく。

授業みたいだ：

つてこの世界紙を作る技術は高いんだな：たしかにクエストも全部紙だけだし：

たしか、中世と違ってあんまり紙が無かったんじゃないけ？いや、ごめん詳しくないからわかんないけど……

で説明が終わり、ギルドの演習場に移動して今度は武器の説明を行う

先輩！期待した目でこつちを見るな！あなたの双剣に関しては教えることはありません！完璧です！俺にはあなたよりうまく使える自身はありません：

というむねを伝えたら先輩がすごい落ち込んでいた。罪悪感が半端ない：

4人に関してなのだが武器はスラッシュアックス、大剣、太刀、片手剣だった。

リーダーらしき人がスラッシュアックスを

一番ガタイのいい人が大剣を

太刀は少しひよろめだが、武士のような雰囲気をもった人が

片手剣の人は普段みんなのサポートに回っているらしい

順番に1人ずつ武器の特徴や戦い方を教えていく、一応ゲームではどの武器も使っていたから教えることはできるが、モンスターと戦うのは無理だ。

近距離怖い：

片手剣の人は弓を教えてほしいと言われたので、弓の使い方を教えたらず喜んでいた。

ちなみに、終始先輩が一番真面目に聞いていた！いや、あんたさ双剣使いじゃないの!?

1通り説明を終え帰ろうと：

「お主らなかなかいい動きになったのお……」

ここはどうだ？ボルボロスの狩りに行って実践を行いながら戦い方を教わるというのは、実践でしかわからないこともあるしのお……」

「「行きたい！」」

全員の声がかぶった。

クツ！出たなギルマス！やっぱろくなこと考えてねえじゃないか！ふざけんなよ！俺はもう狩りには行きたくねえんだよ！

お前らそんな目で見るな！クソっ！

「そうですね…行きましょうか…」

あの目に負けた…なんかボルボロスならいいかなって思えたんだよ。最近まともなモンスター狩りでできてなかったし。

ボルボロスが、可愛く見えてる時点でだいぶ毒されてる気がするけど…

と言うわけで、その後会議室に戻りボルボロスの、説明をして明日の朝出発することにした。

あつ…先輩もついてくるのね…もう何も言いません。

いつか絶対あのギルマスになにかやり返す…と復讐心をたぎらせながら眠りにつく

かわいいそうなくらい…

ボルボロスを発見したんだけどさ…

現実だと6人でも狩りができるんだね

この世界だと普通4人以上で狩りをするのは殆ど無いらしい…

なんで四人以上でしないかというところみんな近接武器だから攻撃範囲がかぶって逆に討伐しづらくなるかららしい

例外的に古龍の場合は多数で戦うこともあるって言った

で、今回は6人で討伐に来たけど俺と先輩はあまり参加するつもりはない

そして今回の俺の武器はヘビィボウガンだ

今回はあまり討伐に参加しないっていうのと参加人数が多いので新しい武器を使ってみることにした

流石に一人のとき使ったことのない武器を試すのは怖い…

戦闘が開始したんだけどよくやってると思うよ…

初めに大剣の男が段差を活かしたジャンプ切りで切りつけ背中に乗り、ボルボロスを刺して倒した。

ちなみにこの乗り攻撃は俺が教えた

で、倒れたらスラッシュアックスのリーダーが頭に集中砲火浴びせて太刀が背中から切りつけていき大剣が倒れた前足を狙ってた

最初は攻撃していたがボルボロスが立ちそうになると少し離れて罠を設置していた。

2年もハンターをしてるのだ

綺麗な連携だった

リーダーが吹っ飛んだ！ちなみにこれはボルボロスにやられたわけじゃない

スラッシュアックスの覚醒張り付き属性開放突きを教えたのだ

ボルボロスが罠にかかった瞬間側面に飛びつき属性開放突きをして最後の爆発で吹っ飛んだのだ

ってあれめっちゃシユール！かつこいいけどさ！

張り付いてやると虫みたいで…最後自分で吹っ飛ぶのも見てると

面白い

太刀の奴には鬼人兜割りを教えたんだけどかつこよすぎかよ!!!あれ!!!なんだよあのモーション俺もやりたいと思っちゃったじゃん!やらないけど…

大剣のエアリアルジャンプや武士道の絶対回避などお教えた…なんかすげーよ…あのサイズの剣持ってもものすごい飛んでるし…回避からの攻撃とかかつこいいし…うん、なんかすごかった

で弓の人もうまく立ち回れていたと思う

いまだに矢を外すことがあるけどこのまま行けばだいたいいいパーティーができそうな感じだった…

そこまで見て俺も戦闘に参加する徹甲榴弾打ってみたかったんだよ!Lv3の!

俺がトリガーを引くと弾丸が発射されボルボロスの体の側面に突き刺さると…時間をおいて小たる爆弾くらいの爆発を引き起こす…

これはなかなか…いい…

でそこからは先輩も参加して余裕を持って狩りをしていく

途中のガトリングガンあは楽しかった…

なんかボルボロスが怖くなかったんだけど…これはもう末期なんじゃないかな…

帰ったら一週間くらい休暇を取りたいと思った。

!?あは…ディアブロス!?

ディアブロスが現れ床を破壊し、ボルボロスとディアブロスが落ちていく

「リアムさん…これどうすんだ?」

リーダーが聞いてくる。ちなみに今まで言っただけが無かったが俺のこの世界での名前はリアムだ。

最初は師匠とか先生とか呼ばれてたんだけどやめてもらった…自分より年上の男性先生とか師匠とか呼ばれるのはなかなかくるものがあつた…

なかなか相手も引いてくれず最終的にはさん付けで落ち着いた。それでも抵抗はある…

だってさ！俺15歳だよ？15歳が24歳にさん付けで名前呼ばせてるんだぜ…これは軽く事件だよ…

「縄張り争いですか…これはこのまま戦わせませす。そうすると弱い方がゲガをすることがあるので狩りが楽になるはずです。」

たしから、ゲームをしてたとき縄張り争いをしてるを何度か見かけたがボルボロスとディアブロスのダメージはめっちゃくちゃばい

俺の記憶が正しければボルボロスにディアブロスが1024のダメージを与えていた

これやばいだろ！ハンターが30とかのダメージで頑張ってるのに1024って！どんだけダメージ入れるんだよ！

下に降り観察をするちなみに降りるときはめっちゃくちゃ高くて怖かった…なんでみんなあんな普通に降りてんだよ！前世の人間ならみんな間違えなく死んでるよ!!!

俺はそんな怖いことはできなかったのでグライダーの装衣を使った

あれめっちゃ飛んで楽しい！

で、ボルボロスは足を引きづって逃げていくのでみんなで追う…

ボルボロスが寝たので作戦道理にみんなに持ってもらった樽Gをボルボロスの周りに設置していく

一人2個だから12個！これはやばい

ゲームでも見たことがないのでどんな爆発をするのか楽しみな自分がいる。

設置が終わりみんなで離れる。

今回は俺がヘイイボウガンで樽を撃ち抜くことになっているのだがワクワク感が抜けない！

ヘイイボウガンを構えボルボロスに初撃が当たらないようにし樽Gだけを撃ち抜く

っ?!雷が落ちたかと思うような地響きと爆音が響き渡る

えっ!?爆発は俺の想像をゆうに越えビルの5階位の高さまで広がっていく。

これは…TNT何個分だよ！火力高すぎ!!

最初っからこれだけで狩れたんじゃね…爆炎が晴れたときボルボロスの遺体はあつたけど可愛そうなことになっていた…

完全にオーバーキルだなこれ…

照明弾をうち村に戻る…かくしてボルボロスの討伐は無事に終わったのだ…

また村に戻ると母親が鬼とかしていた…

ほんとに今度こそはハンターやめようと思いました。

母親ほんとにk……………別に母親が怖いとかじゃないからね！モンスターが怖いんだし！だから睨まないで…………

先輩視点2nd

ティガレックスの討伐から少したったのだが…

あの日から後輩くんはギルドに来ていない…

あの日はほんとに後輩くんが死んじやうんじやないかと焦った。
あと一秒遅かったら死んでしまっただろう…

その時、私は後輩くんを守らなきゃ！と強く思った

事情があつて、一人で狩りをしているらしいがもうそんなことはさせない…

何があつても後輩くんのクエストに付いていくつもりだ

で、ここ数日間クエストを受けずに後輩くんをギルドで待つてる

もし、私が他のクエストに行っている間に後輩くんがクエストを受け死んでしまったらと考えたら気が気でないのだ

後輩くんはいつも無理をしよう…こんなことを続けていたらいつか死んでしまう…だから私が監視をしなければならぬのだ…

外から大きな声が聞こえたので、見てみると後輩くんが大人4人に土下座されて困ったような表情を浮かべていた。

あれ？あの人たち…うちのギルドの人じゃない！

真つ昼間から何をしてんのよ…後輩くんも困ってるじゃない…と後輩くんたちが近づいてきたので隠れる…

酒場に入り話をするようだったので近くの席を取り話を聞く

「なるほど…戦い方を教えるのね…」

実を言うと、私も気になっていたのだ

後輩くんがいつも使っている閃光玉？と言うあの光る物体や何故かできる即席の罨やどこから出てくるかわからないものすごい威力の爆弾などなど

例を上げれば切りがない…しかし盗み聞きしてたとは思われたくない…

「何話してんの？私も入れてー？」

と抱きつき誤魔化しながら今来たことにして話に参加する

「先輩!？」

男たちのリーダーは私が後ろに座っていたことに気づいてたらしく怪訝そうな顔で見てきたので睨んでおく…あ、目逸らした…逃げたな…

「赤くなつちやつて…:…:…:カワイイ…」

と後輩くんを見ると真つ赤になっていた

そして一応聞いていたが話の流れを聞き私も参加することにする。

そのあと、クソギルドマスターが来て会議室と演習場を貸してくれるというので借りることにした

たまにはいい仕事をするみたいね…

その後は後輩くんの話を聞いていたが私の知らないモンスターの知識やアイテムなどすごいためになる話だった

しかし、後輩くんはこの知識をどこから知ったんだろ…

その後、演習場に行き武器の使い方を聞いていたのだが後輩くんはどの武器も一通り使えるみたいだった…でもなんで私には教えてくれないんだろ…ずるい…

またギルドマスターが来てボルボロスの討伐に行くことになった。いろいろなことを知って初めての狩りなのでとても楽しみだった

…

あと最後にモンスターは疲れると寝るから爆弾を設置すると言っていたけど…いつものやつを皆で設置したらどんなことになっちゃうんだらう…

こればかりは少し怖かった…

次の日になりボルボロスの討伐に向かったのだが

やっぱり後輩くんはすごかった

モンスターの動きや回避のタイミングなどを戦いながら説明していた

後輩くんは人にモノを教えるのも上手いみたいだった…そういう仕事でもすればいいのに…

でもそうすると、一緒に狩りできなくなるかもだし…言わないでおこう…

途中ディアブロスが出てきて焦ったのだが後輩くんによると縄張り争いで傷を負うから倒しやすくなるらしい…それも初めて聞いた。

あと地下に降りるとき私達は飛び降りたのだが後輩くんはよくわからない道具を使つて飛んでいた

私も使つてみたいので帰ったら何か聞こうと思う

ボルボロスとディアブロスの戦いは圧巻だった

自分がちっぽけに見えてしまった…

と、戦いが終わったようでボルボロスは足を引きずりながら逃げていった…

確かに傷つくみたいだね

追つていくとボルボロスは寝てしまった

後輩くんの言うとおりだった

この寝てるときに少しでも攻撃してしまうと起きてしまうのだがその攻撃は普段の倍は効くはずと後輩くんが言っていた

あと、この寝てる状態を放置するとどんどん回復してしまうらしい…

それから会議室でみんなで作った大樽爆弾Gと後輩くんが呼んでいたものをボルボロスの周りに設置していく

12個が設置し終わると少し離れて後輩くんがヘビィボウガン？で撃ち抜いた

初めて見る武器なので何か聞いたらヘビィボウガンと言っていた。

この前のライトボウガンとの差がわからないが遠くから攻撃する

武器らしい

後輩くんは遠くから攻撃する武器しか使わない…

近距離の武器もあれだけうまく使えるのになんでだろ…

今度双剣を勧めてみようかな

爆弾なのだがすごかった…ボルボロスが立った状態で3匹分くらいの爆発が起きた

ボルボロスが可愛そうに見えた…後輩くんも唾然としていた

で、あとは戦闘の処理をして仲良く帰りました。

今回の、討伐報酬や素材なのだが報酬は6等分素材は後輩くんが全部四人にあげたいと言っていたのであげることにした

しかし、4人に反対されてしまい。

報酬を後輩くんと私で2等分して、素材は全部四人にあげること
で妥協点となった。

これで4人は少しはまともな武器が作れて強くなれると思う…ほん
とに後輩くんは優しい…

ただその優しさが危うい気がしてならないのだ

村に帰って思いましたがやっぱ後輩くんのお母さん怖いです…

後輩くんのお母さんこそ最強のモンスターなんじゃないかなとす
ら思えてくるくらい怖かったです…

泣きそうな後輩くんを見て、守らなきゃ!と思いましたが無理でし
た…

ごめんね…見捨てて逃げた私を許して…

調査依頼

ボルボロスの討伐に成功して村に帰ったらまた母さんに監禁されてしまった。

今回は監視が厳しくなかなか抜け出せなかったが買い物に行ったタイミングを見計らい抜け出すことに成功した

ギルドに着くとすぐにギルマスに呼び出された

先輩：呼ばれてないよね：なんでついてくるの：？

あのクソギルマスのことだからまた良からぬことを考えているのだろうと思ったのだが聞いてみると村の近くの砂漠地帯が大きく地形変動を起こしたので危険がないか調査してきてほしいとの事だった。

そして、ほんの少し前にボルボロス討伐で砂漠地帯に行ったあとなのでなにか異変に気付くかもしれないという理由で頼んだと言っていた

俺はあまり大きな危険がないと判断して調査に行くことにした

先輩もいるしね

別に報酬に引かれたわけじゃない：今まで無理やり狩りに行かされかなり金が入っているから別に金がほしいとか思っていないから：うん：

で、先輩とこの前ボルボロスを倒した砂漠地帯の調査に来たわけだが：

かなり変わっていた：というよりボルボロスを倒したときがモンハンWorldのマップにある大蟻塚の荒野だとすると変わったあとはクロス旧砂漠の様な感じだった：

何があったのだろうか：

地面に刺さったモンスター鱗のようなものを見つけた先輩が近づいていき

っ!?あれは!

「先輩はなれ…」

グガアアアア!!!

何かのモンスターへの咆哮が聞こえ鱗が内部から爆発し、鱗が辺りに飛び散る…それとともに赤い液体が飛び散るのが見えた…

そして爆発に巻き込まれた先輩は吹っ飛んでいく…

俺は何も考えず先輩に近づく…そして先輩を見るとすごい傷を負い気絶をした状態で倒れていた

俺は気絶した状態の先輩に無理やり秘薬を飲ませ
生命の粉塵をかける

先輩の傷はどんどんと時間を巻きもどすかのように塞がっていったが目が覚めない

俺はさっきの咆哮をしたモンスターの方を見た

そこにいたのはセルレギオスだった…

しかし、何か様子がおかしい…

全身に細かい傷がありすでに怒り状態になっていた

だが、怒り状態になっているのは俺も同じだ…

俺は先輩を木陰になっているところにおろし、セルレギオスに向かう…

正直そこから先はあまり覚えていない…

気がついたときにはセルレギオスの遺体の上に立っていた

持ってきたヘビィボウガンの弾は全てなくなっていた。

罨は全部残っていたのでヘビィボウガンだけで戦ったのだと思う…

人生で初めて怒りで我を忘れるというのを経験した…そして何より先輩が死んじゃうのではという恐怖が俺をおかしくしていた…

死んだはずのセルレギオスの上にたった状態で弾が切れるまでへ

ビイボウガンを撃ち込んでいた気がする……ここまで自分がおかしくなるとは思っていなかった……

その後、少しして照明弾を打ち上げ先輩のところに行くところまで自分がおかしく目がさめたところだった

「あれ……後輩くん？私……」

最初は起きた直後で頭が働いていなかったのか理解していなかったようだが急にハツとした顔をして自分の体を見渡し……

「あれ？傷は!?モンスターは!?!」

「大丈夫ですよ……勝手に秘薬飲ませてしまったのですが全部塞がってるはず……」

あとモンスターは……」

指でセルレギオスを指す

指の先を先輩が見て驚いたような顔をした。そして納得したよう……

「ごめんね……大丈夫だった？」

と、悲しそうな申し訳なさそうななんとも言えないような表情でこちらを見てくる……

「大丈夫ですよ……だからそんな顔しないでください……」

「ごめんね……」

そこからは会話がなく二人で竜車が来るのを待った……

竜車に乗りふたりで帰ったのだが途中でも会話はなかった……ただ少し先輩の距離が近くてドキドキしていた……帰り道は行きの何倍も時間に感じる……

村に戻りギルマスに報告をして、家に戻った。

都合よく親がいなかったので今回は怒られることはないと思う。

かなりショックを受けていたみたいだけど…先輩大丈夫かな…な
どと考えながら痛む体をいたわりながら布団に入り眠ることにした

とあるハンターの後日談

リアムさんに狩りの方法や戦闘に使える道具の作り方を教わってから俺らの成績はうなぎのぼりだった

まずはじめにリアムさん同伴のもとボルボロス討伐に行ったのだがボルボロスがかわいそうなくらいな圧勝だった

途中ディアブロスが出てきて焦ったがそんな状況をも狩りの道具にしてしまうリアムさんはすごいと思う

俺らは今リオレウスの討伐に来てる。

前は倒せなかったがパーティーのみんなまで話し合い討伐に挑戦することにしたのだ

ボルボロスを狩り終えたあとはロアルドロス、ババコンガ、アルセルタス、クルペッコの順番で多少ケガをすることはあってもだいぶ余裕を持って倒せた。

その後、今まではギリギリ倒せる限界だったリオレイアに挑戦し今までよりだいぶ楽に討伐できたのでリオレウスに挑戦しようという話になったわけだ

そして今俺達は古代樹の森にいる

リオレウスを発見することができたのだが、尻尾は切れて体中に小さな切り傷があった：多分他のハンターと戦ったあとなのかと思ひ。

横取りにならないように30分ほど待ったのだが一向にくる気配がない

ギルドの規定では30分待てば戦っていいことになっているのだ

一応、1時間ほど待ったのだが他のハンターは来なかった。

なので俺らはリオレウスと戦うことにした

リオレウスは疲れていたようで眠っていた

俺達は4人で樽Gとリアムさんが呼んでいた爆弾を仕掛ける。

そして弓の子が樽を撃ち抜き爆発する。

俺達は武器を構え戦闘の準備をした

そのまま照明弾を打ち上げ村に帰る　ここはいらないのでは？
だが、リオレウスは大きな起き上がりそのまま倒れ伏した…

!?ものすごく拍子抜けした

行きはリオレウスの討伐と意気込んでたが帰り道はやるせない感
があり会話もなく帰ることになった…

村に戻ると村唯一のG級ハンターのおっさんがドボルベルクの遺
体とともに立っていた

「おっさん！今回はドボルベルクですか？やっぱすごいっすね…」

「ああ…お前らか討伐依頼が出てたから行ってみたんだがなんか今
回のドボルベルクは妙だったんだよな…」

「そうなんですか…？あ、俺らもリオレウスを狩りに行ったんです
けど戦う前から傷ついてました…」

「これはきな臭くなってきたな…：そういやお前ら傷ついていたとは
いえリオレウスを狩れるようになったんだな。おめでどう。」

「いえ、これもリアムさんのおかげなんです…」

「リアム？」

「あっさん知らないんですか？このギルドに入った超大型新人です
よ」

「あー！やつか！名前知らなかったんだよ！

てか、お前らも俺の名前知らないだろ！揃いも揃っておっさんおっ
さん言いやがって俺はまだ20代だつてのに」

「えっ!?おっさん20代なんですか!？」

「20代で悪いか！そうだよこんな成りしてるから老けて見えるけ
ど20代なんだよ！

しかし、あの新人に戦い方を教わったのか…：どうだった？」

「いや、それはもうすごかったですよ

最近なんてリオレイアくらいなら余裕で狩れるようになりま

したし…」

「それはすごいな…」

「そうなんですよ！おっさんも一度受けてみたらどうですか？」

「…考えておこう」

つとあれだ、俺はこれからギルマスに報告しなきゃいけないことがあったんだ！というわけでじゃあな！リオレウスの異常に関しては俺から報告しといてやる！」

「ありがとうございます！じます！じゃあまた！」

別れて俺達はギルドに討伐報告に行く

こんな感じで俺達は日常を過ごしていく……

最近、モンスターがどんどん狩れるので懐が暖かい、これで憧れのリオレウス装備も作れるかな…

母のために

突然だが俺には父親がない…今世では記憶を取り戻したときにはいなかった…だから父親がどんなものかわからない…父親に関するものは一切残っていないかったのだ…

ちなみに前世では両親ともいなかった
だからなのか昔、一度母さんに

「僕のお父さんって何してるの？」

と聞いてしまったことがある。結局（とかの方がいいかと）はぐらかされてしまったのだが、あのときの母さんの悲しそうな顔は今でも忘れられない…

だから、俺はそれ以降父親については一切触れなかった

俺の肉親は父親がないので姉と母だけだ。

姉は俺がハンターになる2年前に突然家を出て行ってしまった。母は詳しい事情を知っていたらしいのだが一切教えてくれなかった。今生きているのかすらわからない

なので今は俺と母で二人暮らしだ。今俺は無理矢理に狩りに行かされ大型モンスターを狩り続けたので大変に懐が暖かい、そして母は働いていない

俺は稼いだお金を母に渡して生活費の足しにでもなればいいと思いつつ何度か渡そうとしたのだが一回も受け取ってくれなかった。女で一つで育ててくれた母に何か恩返しをしたいと常々思っていたのだが手段がなくなってしまうかと考えてきたときに…

「最近寒くなってきたわね…」

と、母がもらしているのを聞いた

その時に母のコートがだいぶボロボロになっているのに気がついた。コートと行ってもモンスタアの革でできた前世と比べるとだいぶレベルの低いものだが…

そこで俺はガウシカを狩りに行き毛皮のコートを作ることにした

ついでにギルドの討伐依頼を受けて雪山に向かったのだが、ギルドで先輩にあい事情を話したところ一緒に来たいと言ってきたので一緒に行くことにした

で雪山につき、あたりを観察したのだがモンスターが1匹もいなかった

もう少し先にいるのかと思いどんどん先に進んでいったのだがモンスターは1匹もいなかった…

最後に雪山の頂上横の広場の様な所に向かう

「!?ガムート!?なんで?」

と、言ってしまったがために…ガムートに見つかってしまった…

「先輩…すみません…」

「大丈夫だよ!気にしないで

それより、まずガムートをどうにかしないと…」

ガムートが長い鼻を真上から打ち付けてくるのを俺と先輩は左右に別れて跳ぶことにより回避する。

先輩は左に回避ながら双剣を抜刀しガムートに右前足に切りかかる

俺は右側に回避したので弓を展開しガムートの左目を狙い撃つていく

が、目には当たらず目の周りにどんどんと矢が刺さっていく

卑怯と言うなよ…この前気づいちゃったんだよ…

目を撃つと狩りがものすごい楽になるって…これはゲームにはない裏技だね、現実だからできるチート技みたいな

俺は少し後ろに回避し一度落ち着く、そしてそのまま矢をつがえ右目を狙う

体から光があふれ出し矢に光が集まっていくのを感じながらガムートの動きを読む…

今だ！俺は矢から手を離す

そのまま矢は光を纏い赤い光の残像を残しながら右目に向かい一直線に飛んでいき突き刺さる

ぐあああ！！！！

目に突き刺さったのが聞いたのか、ガムートが咆哮を放つ

「先輩！」

「わかった！」

俺と先輩は急いで位置を入れ替える

先輩はガムートの右側に来ると体から赤いオーラがあふれ出してきて体にそれを纏う

先輩から聞いた話なのだが鬼人化はとても強力な技で体から力があふれ出してくるらしいのだがそれが強すぎて細かい制御がしづらくなるらしいのだ

今回はガムートが巨大なのでほぼ確実に当たる。

そしてこの前その話を聞いたときに編み出したのがこの作戦だ。俺が弓でどちらか片方の目を狙いその目の方に死角を作り先輩の鬼人化の攻撃を当たりやすくするのだ。そしてその後俺はひたすらに逆に回りひたすらモンスターの気を引きながら攻撃していくという作戦だ。

今回ガムートは異常にでかいたため先輩はものすごい勢いで攻撃を当てていきどんどんとガムート体力を削っていく

そして俺は先程右目を撃つたことによりガムートが俺に狙いを定め鼻を振り回してくるのを右へ左へ上へ下へとどんどんと跳び回りながら回避していく

ガムートは攻撃が当たらず、埒が明かないと思ったのか地面に鼻を

向け息を吸っていく

俺は飛ばされそうになるがなんとか耐える

って先輩そのまま切り続けるって…鬼人化やばい…先輩と母さんだけは怒らせちゃいけない…

と、俺はものすごいアイディアを思いついた…

ガムートが息を吸っているので俺は大樽爆弾
Gを取り出し手を離すと吹っ飛んでいく…

樽が鼻の中に入ったと思った瞬間爆発音とともに鼻が内部から爆発する

!!!
これに驚いたのかガムートはって倒れてくるじゃん…潰されるー

俺は必死に走って逃げた

バタン!!!!

と大きなと地響きをさせながらガムートが倒れる

ガムートはまだ生きているのだがなにせあの巨体だ、立ち上がれな

い

そのガムートを先輩と攻撃して息の根を止める

先輩は刀を納刀すると赤いオーラが体の中に吸い込まれてくように消えていった

「先輩お疲れ様です…」

「お疲れー後輩くん！お母さんにあげるコートだい良いものになっただね

よかったじゃん！」

「そうですね…」

「あ、そうだ！先輩！前から思ってたんですけど…先輩も防具作ってみたらどうですか？こんだけでかいんでガムートで全身作れそうですし、この前のセルレギオスとかジンオウガとか素材俺余ってるんでどうせならめちやくちや良いもの作っちゃいましょうよ！」

「え!? いいの…? でも素材もらっちゃうのは悪いよ…」

「でもほとんど戦ってたの先輩じゃないですか！しかも俺のわがままな討伐についてきてもらったので」

「そんなことないよ…」

「じゃあ、こうしましょう」

俺はガムートの毛皮の母のコート分だけ貰って残りの素材や牙骨などは先輩が

そして肉は余るし、食べきる前に腐っちゃうと思うので俺と先輩主催で村のみんなと焼肉パーティーしませんか？」

「うん、じゃあそうしよっか」

みんなで焼肉パーティーとか楽しそうだね！」

「そうですねーじゃあ、早く帰りましょう！」

俺は照明弾を打ち上げ竜車が来るのを待つ。

待ってる間に先輩が母にあげる分の毛皮を剥ぎ取り帰りの竜車で先輩がコートを作ってくれた。

って先輩めちやくちや器用…！前世のお店に並んでるくらいのやつできちやってるじゃん！可愛いし性格良くて裁縫できるとか無敵かよ…もうほんとにお嫁にほしくらいだよ…」

と村についた。帰り道の途中から先輩の顔が赤かったけどなんでだろ？疲れたのかな…？

村についてすぐギルドマスターに焼肉パーティーをしたいと伝えるとすぐに用意してくれた。

村に帰って2時間で用意が終わりちようど6時で夕食の時間にいい時間になったので焼肉パーティーを始める。その日はみんな飲ん

で食って騒いで遊んだ。とても楽しかった

見たことのない顔の人がかなりいたので気になった。村と言ってもそれなりの広さがあるので知らない人も多少はいるがパーティー中に仲良くなり話したところ、半分くらいの人は最近越してきたらしかった

ただ、パーティーには最初から最後まで母が参加してなかった……それから俺は討伐の疲れもあつたので12時には家に帰った。

俺は家に帰り母さんにコートを渡したら受け取ってくれたのだが複雑そうな顔をしていた……

その後自室に入り俺は死んでるかのように爆睡した。

そして次の日の朝は早く起きた。久々に夢を見た。夢の中で誰かの泣いている声が聞こえていたのだが覚えていなかった

ちなみに俺が起きたときはまだパーティーの音が聞こえてました。

気づき始めた心（先輩視点）

突然だが今私は狩りに来ている

今日突然後輩くんがガウシカを狩って親にコートを作ってあげた
いと言いだしたのでついてきた

後輩くんは私が守る！とか言っておきながらこの前のセルレギオ
スの時は足を引っ張ってしまった…

あのときはショックだった…だから、今回こそはいいところを見せた
い！

と雪山に来て色々を見て回ったのだがモンスターが一体もい
なかった。ハッキリ言ってこれは異常な事だ…何があったのかは知ら
ない…が放っておくわけにもいかない…と私は調査も込みで色々巡
ることにした。

後輩くんはまだガウシカを探してるみたいだった
こういうところなんか抜けてるんだよね

そして最後に行った場所でガムートに会った。
かなりの巨大さにびっくりした。

後輩くんも驚いたようで声をもらしてしまいガムートに見つかっ
てしまった

流星にしようがないと思う、とてつもなくデカかったのだ

ガムートに襲われたので戦うことにしたのだが正直余裕で倒せた。
巨体だったので攻撃が当たりやすいというのもあるが私と後輩くん
の連携がだいぶうまくいくようになったのもあると思う

さすが後輩くんだよね…鼻を爆発させるのは流星に予想できな
かったけどね

後輩くんはほんとに面白い

それで帰る準備などをしたのだが時間が余ったので後輩くんのお
母さんにあげるコートを作ることにした。これでも裁縫には自身が

あるのだ

うん、できた！なかなかの自信作ができた

それを後輩くんにあげると最初は驚いた様子だったのだがその後はものすごく喜んでくれた

こんなに喜んでくれるなら作ってよかった

あと帰り道の途中で後輩くんが独り言のようなことを言っていたのが聞こえてしまった

後輩くん、私はそう言うのは卑怯だと思うよ…

熱くなってきたやつた…ホットドリンク飲みすぎちゃったのかな

…？

その後は村に戻りみんなでパーティーをした

後輩くんの提案で行なったのだがとても楽しかった

私と後輩くんは狩りに行った疲れがあったので途中で帰ってしまっただが最後まで参加したかったな…

次の日ギルドに行ったのだが後輩くんは来なかった…まあ仕方ないよね…いつも1回狩りに行くと3日くらいはギルドに来ないのだ

まあ、私も毎日狩りには行きたくないの、ちょうどいいのだが…最近すぐに後輩くんに会いたくなる…後輩くんといると楽しいのだ…

3日たっても後輩くんは来なかった…疲れていたのかもしれない…大丈夫かな…？新しい装備を作ったので見せるのを楽しみにしていたのだけど残念です…

1週間たつても後輩くんはギルドに来なかつた：私はすごい心配になった：一昨日から夜もほとんど寝られていない：

心配だったので後輩くんの家に向かったのだけど後輩くんのお母さんは私の顔をみるとすぐに追い返して来た：そういえば後輩くんのお母さんは後輩くんがハンターになるの反対してたな：

でもなんで会わせてくれないんだろ：会いたいよ：

それから3日たったのだが後輩くんはギルドに一度も来なかつた：後輩くんなら監禁されても抜け出してでも出てきそうなのに：後輩くんに会いたい：

それからこの3日で気づいたことがある

多分、私は後輩くんが好きだ。異性として

今までそんな経験が無いから言い切れないけど多分この気持ちは本物だ

私は後輩くんに会いたかったのでとある計画をたてた。

次の日私は朝早くに後輩くんの家に行った

そして後輩くんの部屋を外からのぞき込んで探して：見つけた！私は後輩君の部屋に入る。

後輩くんはまだベットで寝ていた：寝顔がとても可愛かったですまる

って危ない！後輩くんに見惚れて無駄な時間を過ごすところだだった！

「後輩くん：起きて…」

と言いながら後輩くんの肩を揺らし小声で話しかける：

「んあゝ、えっ!?!先輩!?!なんで!?!」

「会いたいから来ちゃった?」

後輩くんと話していると自然と笑顔が溢れ出してくる

やっぱり私後輩くんが好きなんだ：

「後輩くん行きたい場所があるんだけどすぐ用意できる?古代樹

の森の中だからできれば装備も…

あと後輩くんのお母さんには話してないから内緒でなんだけど…」

「はい…」

最初は後輩君は驚いたような顔をしていたがついて来てくれるらしい…

後輩くんと抜け出し古代樹の森まで歩いて向かう

竜には乗らないこの行く二人の時間も楽しみたかった

あと後輩くんに新しい装備可愛いって褒められちゃった！ん？装備が可愛いのか？私が可愛いのか？…あれ？後輩くん？どつちなのか？まあ、装備だとしても可愛い装備を身につけてる私も可愛い！ってなるから褒められたってことにしよう！

古代樹の森についたのだけど…

「ネルギガンテ!?!」

なんで!?!なんでなの!?!ネルギガンテって大蟻塚の荒地にいるモンスターじゃないの!?!なんで!?!

って気づかれた…

「ごめんね後輩くん、こんなはずじゃなかったんだけど…」

私は泣きそうになった…こんなはずじゃ…

「ツ！気にしないでください…」

「ホントは連れていきたい場所があつて…」

「じゃあ、さっさと倒してそこに行きましょう!」

「ありがとう!」

落ち込んでてもしょうがないよね…

後輩くんが言ってるんだしとつと倒そう!

どこまで落ちても……

目が覚めたら先輩の顔があった……

何を言ってるんだ……と自分でも思うよ……

ただ、目が覚めたら先輩の顔が目の前にあった。

「んあ、えっ!?先輩!?なんで!?!」

「会いたいから来ちゃった?」

えっ……先輩……会いたかったから来ちゃったって……これ幻覚? 監禁されすぎてついにおかしくなった? って先輩可愛すぎる……もう、幻覚でもいいので結婚してください!

「後輩くん行きたい場所があるんだけどすぐ用意できる? 古代樹の森の中だからできれば装備も……」

あと後輩くんのお母さんには話してないから内緒でなんだけど……」

えっ?? 母さんに話してない……なんで監禁されてるの知ってるんだろ? まあ部屋に入るぶんには、ゲームのモンハンの家みたいな家なので正直どこからでも入ってこられるけど……でも行きたいところって何だろ……?

「はい……」

先輩にはいつもお世話になってるので着いて行くことにした。

先輩には村の入り口で待っていてもらい俺は急いで準備をする

あ、先輩やっぱそこから入ってきたのね……

で、この10日間に何があったのか気になっている人もいると思うから説明しておく。

ガムート祭りをしたあと疲れてしまったので寝たり、うだうだしながら3日を過ごしそろそろギルドに行こうかなと、準備をして家を出ようとしたのだが母に見つかってしまった。

しかし、このとき母は鬼と化していなかった
ただ、左手を捕まれ

「行かないで…」

とつぶやき泣いてしまった…

母は俺唯一の肉親だ。前世も含めてもう血の繋がっている人間は
母しかない…

その母を泣かせてしまったと思うともものすごい罪悪感がこみ上げ
て来てギルドに行くことができなかった

その日はずっと母といた。

その後はいつものような生活をしていたのだが、母は一度も家から
出してくれなかった。

もしも、知り合いが会いに来たら会ってもいいがそれ以外は外部と
の接触は完全に禁止と言われてしまった。

もともと俺は友好関係が少ないので会いに来る人はほとんどいな
いと思う…

そんなこんなで生活していたのだがガムートを倒してからちよう
ど一週間たった日、何故か母の機嫌が悪くなっていた

今日は誰か来客が来ていた…クソギルマスでも来たのだろうか…

と、運動もできないし外にも出れない生活は15歳の思春期真っ只
中の俺にはとてもつらかった…何度か抜け出してギルドにでも行こ
うかと思ったがそのたびにあの泣いていたときの母の顔が浮かび外
に出ることができなかった…

とそんなこんなで寝て起きたら先輩がいたのだ…

お前、母に泣かれて行きづらいつか言ってくれに先輩が来たなら行
くのかよ!?!って言われると何も言えない…

流石に10日も家に引きこもるのは辛いんだよ…ダイジョブ…バ
レないように行つてバレないように帰ってくるから…

「そんなこんなで古代樹の森についたのだが」

「ネルギガンテ!？」

「なんで!? なんで!? 古代樹の森にいるの!? 大蟻塚の荒地じゃなかったの!? 前世のβテストでは大蟻塚の荒地だったよ!？」

「まさか先輩…これと戦うために…俺を…と先輩を見たが…泣きそうな顔をしながらネルギガンテを見ていた」

「ごめんね後輩くん、こんなはずじゃなかったんだけど…」

「ツ！気にしないでください…」

「罪悪感やばい…先輩泣かないでください…ほんとに…大丈夫ですから…ほんとに罪悪感で押しつぶされそうです…」

「ホントは連れていきたい場所があつて…」

「じゃあ、さっさと倒してそこに行きましょう!？」

「ありがとう!？」

「なんとか先輩は持ち直したらしくそこからネルギガンテとの戦いが始まった」

「先輩！ネルギガンテは一撃の威力がとても高いので一撃でも食らったら死んでしまうかもしれません…」

「ですが体力自体はそんなに高くないので…当たらなければそれほど強くなかったはずです…」

「俺は今回、ヘビィボウガンを持ってきていた…」

「近くのしびれガスガエルを打ち抜き」

「ネルギガンテの攻撃をバックステップで回避する」

「ネルギガンテはしびれガスガエルのガスにやられたらしく動けなくなつた…」

「そのスキに俺は松明をネルギガンテの近くに打つ」

その後、樽Gを尻尾の後ろにセット。先輩もセットしていたのでいつもの二倍の爆発だ

そこから樽をボウガンで打ち抜き、ものすごい爆発が起きる。ネルギガンテの姿が一瞬見えなくなったがすぐに見えてきて

俺は拡散弾レベル2、竜撃弾、斬烈弾、徹甲榴弾の順で打ち込んでいく

徹甲榴弾が爆発し始め3つ目の爆発でネルギガンテが倒れる

「先輩お疲れ様です」

「後輩くんもおつかれ!」

「しかしなんで古代樹の森にネルギガンテがいたんでしょうかね…」

「そうだね…なんか最近色々おかしい気もする…」

「あつ! そうだ! 先輩行きたい場所ってどこですか?」

「ごめんね後輩くん…こんなことになっちゃって…」

「全然大丈夫ですよ!」

「えーと行きたい場所はもう少し先なんだけど大丈夫?」

「はい! でもこれどうしますか?」

「放置して行くしかないよね…あとで照明弾打てばなんとかなるんじゃないかな?」

「そうですね」

「じゃあ、行こっか後輩くん!」

その後先輩と古代樹を登っていき頂上につき

「後輩くんこっこだよ」

「ッ!?!」

俺は思わず言葉を失った

なんていう景色だ…こんな景色前世を含めて見たことがない…そこから見る景色は圧巻の一言だった

沈む夕日、オレンジに染まる空、海や荒野、森まで見えた。

そして普段俺達の住んでいる村も小さく見える

これは……言葉にできない美しさだった。こんなきれいな景色は前世を含めても見たことがなかった

俺が前回ここに討伐しに来たときは景色を見る余裕なんて一切なかったし、時間も悪かったのだと思う

「この時間が一番きれいなんだよ？」

やっぱりか……というよりもこの場所自体知らなかった……俺はここから見える景色に魅入られてしまった

「この景色を後輩くんと見たくて……ここ私のお気に入りの場所なんだ……嫌なことかあったときとかによく来て……ここに来ると嫌なこととか全部忘れられるんだ……」

確かにそうかもしれない……この景色はそれほどまでに美しかった。俺の語彙力では伝えきれない

「……こ教えしたのは後輩くんだけだよ……」

「えっ!？」

と先輩の方を振り向くと先輩と目が合い先輩が微笑んでくる
夕日に照らされたその顔は今までで一番美しかった……

「先輩……」

「アリス……」

「えっ……?」

「私の名前……そろそろ先輩じゃなくて名前で読んで……私も名前で呼ぶから……ね? リアム」

「あ、アリス……」

ってこれ滅茶苦茶恥ずかしい……前世含めても女性を下の名前で呼ぶなんて経験一切ない……

やばい赤くなってきた…先輩と目を合わせてられず下を向いてしまった…

う、きまずい…

「そろそろ帰ろつか…」

「そうですね…」

ネルギガンテのところまで戻り照明弾を打ち上げ村に戻る…

村の入り口には母親が立ってました…ごめんなさい…

母さんは何も言わずに俺の腕を掴んで家に帰ろうとした。俺は

何も言わずについていく…

母親視点

私には息子と娘がいる。

娘は2年前に家を出ていったきり帰ってきていない…今生きているかすらわからない…

私の息子は不思議な子だった…子供の頃から一切手がかからなくておとなしい子だったが

五歳のときにあるハンターが狩って来たドスジャギイの遺体を見てからハンターになると言い出して体を鍛え始めた

それから息子が13歳になったときに娘は弟を守るためにハンターになると言い出したので私が反対したら次の日の朝起きたときには娘がいなくなっていた…

机の上に強くなったら帰ってくるという置き手紙だけおいてあった

このことはまだ息子に話していない、いや話せていない…

それから二年がたつて息子は私に黙ってハンターになってしまった…

息子は才能があったらしくどんどん強いモンスターを狩って行ったらしいのだがそんなことは関係ない

あの人と私の息子なのだから強いのは当たり前だ

だが、ハンターにはさせたくなかった

村に戻ってきた息子を何度も監禁したがそのたびに抜け出してはモンスターを狩ってきた

かなりの成果を上げてるらしくお金に余裕があるようで生活費を入れようとしていたのだが受け取ったらハンターになるのを認めたのと同じ気がして受け取れなかった

そして私にもかなりの貯蓄がある

それも息子が死ぬまで面倒を見ることができくらい額だ

このお金は私と旦那がハンターだった頃に稼いだお金だ。
私と旦那はとある街で名の知れた上位のハンターだった。

倒したモンスターの名前を上げればきりがない

リオレウスから始まりジンオウガやディアブロス、はてはイビル
ジョーまで倒したことがある。あのときはギリギリだったが…

そんな私達は娘を身ごもったのをきっかけにこの村に引っ越して
きた。

その後、旦那はハンターを続け私は主婦として家に入ることにし
た。

娘が5歳のときに二人目の息子を身ごもった

あの時は旦那も娘もよろこんでくれてとても幸せだった。

毎日の三人で食べる夕食が私のささやかな楽しみでもあった。

そんなある日、旦那が狩りから帰ってこなかった。旦那とこの村に
来てからそんなことは一度もなかった…街にいるときは狩りにいき
連続狩猟などをしたときは一日で終わらず野宿することもあったが
この村に来てから旦那がそんなクエストを受けたことはないはずだ
それでもハンターが帰れなくなることはたまにあるので…不安は
あったが明日には帰ってくるだろうと思ひ…待つことにした…あ
んな旦那だか上位ハンターなのだそんな簡単には死なないと思っ
たのもある…

だけど3日たっても旦那は帰ってこなかった…

一週間がたったとき私が旦那にあげたペンダントを村のハンター
の一人が私のところに持ってきた…ボロボロになっていた…

そのペンダントはあげてから寝るときとお風呂に入っているとき
以外は旦那がずっと首にかけているものだった。

それを見て私は玄関で泣き崩れた…

その後話を聞いたらいつも旦那がギルドで自慢をしていたのでわ
かったらしかった。

で拾った場所なのだが、森が森でなくなっていたとそのハンターは言っていた。まるで嵐が去った後のように木々がなぎ倒され、森の中なのに何も無い空間が生まれていたらしい…その真ん中にボロボロになったこのペンダントと、金の鱗のようなものが落ちていたと言っていた。

それから息子が生まれて女で1つで息子と娘を育てた。幸いお金は貯金がかなりあったので困ることはなかったのだが大変だった…

5歳の息子がハンターになると言ったときは驚いた…それとなく辞めさせようといういろいろな職業を勧めたが息子は一切意見を変えなかった…

ハンターをしていた私だからわかるがハンターはそんな甘い仕事ではない。確かに討伐できれば多額のお金は入ってくるが毎回命がけなのだ…

それで、旦那のように死んでくハンターも少なくなない…

この前は息子がガムートを狩ってきた…最近寒くなってきたと言っていたのを覚えていたのかガムートの毛皮で作ったコートをくれた…

私は複雑だった…息子からの贈り物…嬉しくないわけがないだが、これを着ると息子がハンターになったのを認めた気がして…着られなかった…息子が狩ってきたガムートの肉で開催した村を上げたパーティーもそうだ。参加はできなかった

そこ三日後また息子はギルドに行こうとしていたのだが私は息子の左手を掴み

「行かないで……」

と言ったところで泣いてしまった…そこから息子はギルドに行くとうとしなかった

たぶん私のためだろう、罪悪感はあるだが、それ以上に狩りに行ってほしくなかった

何日かたつて息子と何度か狩りに行つてゐるのを見かけた女が訪ねて来たのだが私はすぐに追り返してしまつた：息子には家から出ないでほしいと言つてある：知り合いが訪ねて来たら会つてもいいとは言つていたがハンターが訪ねてきたとわかつた瞬間私は息子を狩りに誘いに来たのだと勝手に思つてしまつた。

今思うと、単純に息子に会いに来たのかもしれない

その数日後、朝起きたときに息子の部屋を見たら息子はいなくなつた。私はかなり驚いた。

そして息子の狩りの防具と武器が1式無くなつてゐるのに気づいた：息子も娘のように出ていったのかとも思つた

息子は唯一残つた肉親なのだ：耐えられなかつた

目から涙が滝のようにあふれ出してきた

その後は帰つてくるかもわからない息子を僅かな希望を抱いてひたすら村の入り口でまつた。

竜車に乗つて息子とあの女が帰つてくるのが見えた：

私はあの女を睨みつけ息子の手を取り家に歸つた

そして気づいてしまつた：私はかなり息子に依存してゐる：唯一の家族なのだ：失うわけにはいかない：今までの私の息子に対する対応は甘かつた：

そして私は息子を完璧に監禁することに決めたのだが、息子はほとんど抵抗しなかつた。

息子には誰が訪ねてきても絶対に合わせないと言つたら悲しそうな顔をしたあとうなずいてくれた

それから数日は息子は家からも出さずずっと家の中にいた：ものすごい安心した

何度かあの女が訪ねてきた、だが追いつ返した：もう会わせるわけにはいかない

息子の部屋も外から入れないようにした。そして扉の外側から鍵をかけるようにした。

そんなこんなで数日を過ごしていたのだがその日、村に物凄い轟音が響きわたった

私が外を見たらそこには…

金のクシャルダオラ!?

クシャルダオラが村の広場のようなどころにいるのが見えた…

ギルマス

わしは今、ギルドの仕事に追われている

10年ほど前から小さな異常は村の周辺で報告はされていた…名の知れたとある上位のハンターも簡単なクエストに行ったのだが帰ってこなかった…

それがここ最近になり異常の報告の数が物凄い勢いで上がっているのだ…本来は霊峰に住むはずのジンオウガが溪流いたことや、大蟻食の荒野にいるはずのネルギカンテが古代樹の森いたこと、そして雪山にガムートしかいないという報告からリオレウスが傷ついて倒れていたりと例を上げればきりが無い

ここ最近はそのせいでギルドにずっと泊まっている…

この異常に関して儂はある手を打ったのだが…成果は上がっていない…

我がギルドNo.1のハンターに村の近くを調査に行ってもらいNo.2の実力のものには他の村にも同じような以上がないか確認のために色々なところに出向いていってもらっている…

ところで話は変わるがああの超大型新人がギルドに来なくなってしまうたのだから15日くらいたったのではないかと思はう…

途中、ネルギカンテを討伐したらしいのだがその帰りもギルドに来なかった…

アリスの話によると母親に村の入り口で連れて行かれてしまったと言っていた…まあ事情を知っているがために文句は言いつらい…

それとあの新人には注意をしなければならい

あの新人はなかなかの強くて色々なモンスターを倒してくるのだがその討伐の殆どがギルドを通さない討伐なのだ…

注意しても治らないようなら最悪ギルドナイトの派遣も考えている…

その話はさておきあの新人はすごい…倒したモンスターの実績だけならずにも上位ハンターにできるのだが………

それとあの新人のおかげで新たにハンターになりたいと言ってくる人間が増えた…これは嬉しさ半分のなんとも言えないものだったが

その新しく入った新人には2年前に登録し、あの新人に狩りの仕事を教わったあの4人が戦い方などを教えている

これによって新しく入った新人死亡率は今の所ゼロだ…と言っても3人しか登録しておらんのじゃが…

あの新人のせいで増えたギルドの仕事を片付けていると…

グアアア!!!

と物凄い咆哮が村の近くから聞こえた…

儂は、急いでギルドから飛び出し咆哮の聞こえた方向を見ると金のクシャルダオラがいた

「金のクシャルダオラだど?!」

クシャルダオラは古龍種として有名なモンスターだった。その強さは果てしなく…いくつもの村が滅ぼされ…消えていった…

クシャルダオラの金色は文献でしか見たことはなかったが…特異

固体と呼ばれ…普通のクシャルダオラの何十倍もの強さを持っているらしい…

「副ギルドマスター！避難の指示を！それを動けるハンターをクシャルダオラの方に！」

「わかりました…」

儂はそれだけを副ギルドマスターに伝え装備を急いでつけクシャルダオラが現れた村の広場に向かう…

そこにはすでに何人かのハンターがいた

ただし、立っていたのは舞姫とこの前新人に戦いを教わったパーティーのリーダーと弓を使っている子だけだった…

「わしも助太刀する…」

「ギルドマスター！」

「あれは特異個体と言われるクシャルダオラだ…奴の纏う風の鎧はかなり強力じゃ…おそらくこちらの攻撃はまともに通らない…じゃから、村の人たちの避難が終わるまで引きつきたい…協力してくれぬか？」

正直に言うところはかなり酷なお願いだ…おそらくここでクシャルダオラを引き付けなければ村の者の殆どは死ぬ、かと言って儂らが引きつけるとしたら儂らはほぼ確実に死ぬ…村のために死んではいかぬか？と聞いているのとほぼ同じ質問だった…

これで、この者たちが逃げてもらわしは何も言わないただ一人で引きつけるのはこのおいた体ではかなりきつく…時間が間にあわなないかもしれない…

「は…」

と三人は答えてくれた：

そこからはクシャルダオラを引きつけることだけに神経をそそいだ：

だがそれ以上に金のクシャルダオラは強かった

スラツシユアックスを使ったパーティーのリーダーはクシャルダオラの纏った風に吹き飛ばされそこから動かなくなった：

弓使いの少年は打った矢が風で跳ね返され何本も矢弓が弓使いの少年の体に突き刺さっていたがなんとか耐えて戦っていた：

舞姫も風でできた傷からいくつもできていてわしもそのような感じだった

「クツ、流石にきついかな…」

思わず声が漏れてしまう：持つてあと数分というところだ：

クシャルダオラは想像の何倍も強かった：

ここ十年で起きてる異常はこいつのせいだと確信が持てるほどに強かった：

舞姫が斬りかかるが風の鎧にはばまれ吹き飛ばされ：民家に激突する：

やばいっ！

わしは愛用の太刀を使いクシャルダオラの気を引く：

クシャルダオラはわしを標的に次々と攻撃を仕掛けてくる：ギリギリでそれをかわしていき：

っ!?!クシャルダオラが風のブレスを撃とうとしているのが見えた

…この体制じゃかわせない…

せめてあと3分稼げればみんなが避難を完了させられる時間じゃ
というのに…

ここまでか…

と諦めたその瞬間…

赤い何かがクシャルダオラの顔に向かって飛んていき風の鎧を突
き破り赤い軌道を作りながらクシャルダオラの頭に突き刺さる…

これは!?

と、赤い光が飛んできた方向を見ると民家の上に人が立っていた…
あやつは!!!?

絶望の淵に…

ネルギカンを討伐したあと俺は家にひきこもっていた…いや、監禁されてたに近いかな…？

この前、先輩が入ってきた場所が母に塞がれてしまった。で俺は自分の意思で外に出れなくなってしまうた…

出ようと思えば出れるよ…たぶん…

ただちよつと罪悪感がひどくて…村に帰ったら無言で母さんに腕掴まれて家に連れて行かれて…

その日一日母さん一言も話してくれなかつたんだよ…色々言い訳したりとかしてたけど…あれはなかなかつらい…しかも手離してくれないから逃げれないし…

と言うわけで3日が過ぎただけだけど今回の監禁は誰ともあつちやだめと言われた

先輩に会いたいです　まる

いやね、先輩バトルジャンキーだけどさ可愛いし先輩といると楽しいし可愛いし（大事なことだから2回言ったよ）

グアアアア

ツ!?モンスター!?!?!

しかもかなり近い!

気になって

外に出ると先輩とギルマスそれとこの前戦い方を教えた先輩ハンターがクシャルダオラと戦っていた

って!?クシャルダオラ!?しかも金!

何だあれ!金のクシャルダオラなんて見たことないぞ!

周りには何人ものハンターが倒れていた…

うそだ…俺はこんな時自分のみを守るために体を鍛えてきた…だから逃げる分には逃げて他の村に逃げることはできる…

でも！先輩も戦っているしギルマスも戦っている…そしてこの村で育った思いもある！俺はやつと戦う…死ぬかもしれない…今まで戦ったどのモンスターよりも…この距離でも…怖い…でもそれ以上先輩が死ぬのを…生まれ育った村が潰されるのを見るのはもっと怖い…

と考えた俺は走って家に戻り急いで防具をつける
弓を装備して準備が完了していざ出ようとしたとき

部屋の出口の前に母がいた…

「リアム…いっっちゃだめ…」

「母さん…でも…俺は行かなきゃだめなんだ…」

と俺は押し通り外に出るその時、先輩がクシャルダオラに吹っ飛ばされる瞬間が見えた…

すでにギルマスしか立っていない…

俺はすぐに先輩に駆け寄りたかったけどモンスター見つからない今しかチャンスはない…先輩ごめんなさい…

俺は急いで近くの家の屋根の上に立ち竜の一矢のモーションをす
る…

クシャルダオラは頭の角が砕けると風の鎧がなくなるはず…

俺の体から光が溢れ出し矢に集まっていく…力が限界まで貯まる

りクシャルダオラの角に狙いを定めようとしたその時…

クシャルダオラが風のブレスをギルマスに撃とうとしているところが見え…

俺は焦って矢を離れた…矢はクシャルダオラに向かって赤い軌道を残しながら進んでいくが…狙いが定まっていなかったため頭に浅く刺さったが角を砕くことができなかった…

クソっ！外した…

がクシャルダオラは風のブレスが中断されこちらを睨んでくる…

見つかった！

「ギルマス…ここはクシャルダオラは俺が引きつける！その間に他のハンターの救援を！」

とクシャルダオラが突っ込んできたのをかわす…

俺が屋根に立っていた家がボロボロになった…

ギルマスはもうボロボロで戦闘に参加はできそうになったので救援を頼んだ。特に先輩！早く助けてあげて！

「すまない！」

とギルマスは言いハンターたちの救援をしていく

「クソっ！風の鎧で矢が当たらない！」

俺はクシャルダオラの攻撃を避けながら矢を放っていくのだが避けながらなので十分に力が入っておらず風の鎧にはばまれる…

ガタガタ：

さつき先輩の立ち上がった場所から音がしてそちらを見ると先輩が立ち上がっていた…良かった…

俺は泣きそうになったが今はそんな余裕がない…

先輩は回復薬を飲んでこちらにに向かってきて…

「すまない！リアム私も戦う！」

「先輩…すいません…あんなにカッコつけたのに…一人じゃ無理です。手伝ってください！」

「そのつもりだよ！君一人に戦わせるなんてことはしない！」

俺と先輩は連携してクシャルダオラを倒そうとしていくのだが金のクシャルダオラは強すぎた…

攻撃が当たらない…

クシャルダオラは俺の弓を警戒してるのか先輩よりも俺の方をよく狙ってくる

クシャルダオラが嵐をおこし先輩がまたしても飛ばされる…先輩の体から2メートルくらいの高さび

俺と先輩を見た瞬間

ハッと気づいたら俺にクシャルダオラが右腕を振り下ろそうとしてるところだった

体勢的に回避は不可能…ここまでか…最後に先輩にあえて良かった…母さんごめん…今までありがとう…

クシャルダオラの腕が振り下ろされてくる…ものすごくスローに見えるが俺は怖くて目を閉じる…

今までありがとう…おれは最後の瞬間にそなえ身構える…

突然の再会

バコン!

金属と金属を思いつきりぶつけたような爆音があたりに響き渡る

…

俺はその音に驚き来るべき衝撃が来ないので目を開け…

「やあ、リアム久しぶりだね

元気だったかい？随分とやられてるじゃないか」

姉さんがいた…こちらを向き金のクシャルダオラの腕を背後に回した大剣で塞ぎながら話しかけてきていた

一瞬誰だからわからなかったけど昔の面影が残っている…突然飛び出していった姉が目の前にいるのだ

「ねえ、姉さん…なんで…」

「おーい、感動の再開をしてるところ悪いがそんな話してる余裕はないぞ！早くアイツをどうにかしないと…」

おっさん!?ギルドNo. 1のおっさんもいた

おっさんはフル装備で近くに立っていたっておっさんの武器ってガンランスだったのね…ずっと気になってたんだけどやっと解決してよかった…

クシャルダオラが風のブレスをいきなり撃ってくる…

それをなんとか持ち直した俺とおっさんと姉さんは左に大きく飛ぶことにより回避する

風のブレスは俺達のいた所に直撃しそのまま後ろに飛んでいき何軒もの家を壊した

ブレスは村の端まで飛んでいきブレスの通ったあとには何も残っておらず村の端が見えるほどだった…

「あれはやべえな…」

「G級の俺らの村最強のおっさんでもきついですか？」

「ああ…本気で戦って100回戦って1回生き残れるかどうかってところだ…」

「そんなにですか…」

俺はG級のおじさんによって持つことのできた淡い希望人が絶望の淵に叩き落とされた気がした…

「ただ、それは俺一人で戦ったらって話だ」

「それはっ…」

「幸いここにはお前もいるしお前の姉もいるそして我がギルドN O. 3の舞姫までいるんだからな」

「リアム…私家出したあと結構強くなったんだよ？」

「そうだよ！私がいるのも忘れないでね！」

と吹き飛ばされた先輩が帰ってきて4人で並びクシャルダオラの前に立つ…

ものすごく心強いこんなにもこの人たちとならあの災害級の化物でさえ倒せてしまうのでは…？という気持ちさえ湧いてくる

それはそれとして今気づいたけど姉さん装備麒麟なんだね…ちよつと目のやり場に困るよ…でも姉さん美人だし似合ってるから何も言えない…そんなんで防御力あるの!?

「うしー行くかー！」

と言うおっさんの掛け声で俺ら4人は走り出す

3人はクシャルダオラが走っていき攻撃を仕掛けようとしているの見て俺は再度クシャルダオラの角を狙い竜の一矢のモーシヨンに

入る

光が体から溢れてきたところでクシャルダオラがこちらに気づき3人などいないものかのようになり振り払い襲い掛かってくる

俺はモーシヨンを中断しなんとか回避に成功したがさつき外した矢のせいで完全に警戒されている

俺が必死に回避をしてる間に3人は攻撃をしているのだが

先輩は風の鎧を超えることができずに攻撃が全く当たらない…

姉さんとおっさんは風の鎧を突破することができただがその下の鋼鉄のような金の肌を傷つけることができず金属がぶつかりあったときに出るような爆音を鳴らし続けていた

クシャルダオラは3人の攻撃を回避しようとするらしいなかった

ノーダメか…強すぎだよ…おっさんの攻撃も効かないんじゃないやどうすれば…

おっさんは何かを思いついたかのように少し離れ近くの家の屋根に登りエリアルのような大ジャンプをした…

あれ人間のするようなジャンプじゃねえよ…

おっさんはガンランスをクシャルダオラに向け落ちてくる

おっさんのガンランスはクシャルダオラの口に突っ込まれる…

おっさん何を？

「あの動きは…極龍滅砲!？」

おっさんの持つガンランスに光が集まっていき…

おっさんはクシャルダオラの口の中に極龍滅砲を放つ

ものすごい大爆発とともにおっさんは後ろに吹っ飛ばされていく

…

そしてクシャルダオラは流石に体内での爆発にはどうしようもなかったようで風の鎧が消え…口から煙を出しながら倒れていた

俺と先輩と姉さんはチャンスと見て一斉に襲いかかる

一番の高火力の姉さんが頭を担当し大剣を振っていくのだが3回に1回はクシャルダオラの肌に弾かれる

先輩は尻尾に鬼人化して襲いかり怒涛の連打を叩きこんでいくのだがその殆どが弾かれていた

俺は背中に竜の一矢を当てていたのだが二発目のチャージが終わった瞬間クシャルダオラ風の鎧が戻り吹き飛ばされる…

風の鎧を纏ったクシャルダオラはゆらゆらと立ち上がり

グアアア
!!!!

巨大な咆哮をあげ怒り状態になる

「クソ！角を破壊しきれなかったか…」

俺は思わずもらしてしまふ…とおっさんも立ち上がりこちらに戻ってこようとするのだが

おっさんの周りに竜巻が3つできおっさんを囲む

おっさんに竜巻が近づいていきどんどんとおっさんに切り傷ができていく

3つの竜巻が合わさりおっさんは遥か上空へと吹き飛ばされ…

竜巻が消え…おっさんが落ちてくる…

「ッ…ま…ずい…」

俺は急いでおっさんの落下地点に入ったのだがクシャルダオラに吹き飛ばされる…

「グハッ！」

俺は民家の壁にぶつかり血を吐きながら倒れる…

「リアム!!!」

と叫びながら先輩が近づいてくる

「痛え……」

ほんとに泣きそうなくらい痛かった…初めてこんな傷をおった

…

だがそれ以上におっさんが気になりおっさんを見るとクシャルダオラのほぼ目の前あたりまで落ちてきていた…

クシャルダオラはその落ちてくる途中のおっさんに向かって左腕を振り上げ思いつきり振り降りし…

ドガアン!!!という大きな音を起こしながらおっさんとクシャルダオラの左腕が地面にぶつかる

巨大なクレーターが出来上がりクシャルダオラが腕を上げるとクレーターの真ん中におっさんが倒れていた…

それを見たクシャルダオラは飛び立ち俺らに背中を向け去っていく…あれほど大きかった背中はどうんと小さくなっていきついに見えなくなつた

そこで俺は我にかえり

「ッーおっさん!!!」

おっさんのところに急いで向かう

俺はクレーターの真ん中に行き
すぐにしゃがんでおっさんの頭を抱える

おっさんは反応すらしなかった…

「おい、おっさん！生きてるか!?おっさん！おっさん!!」

おっさんは息をしていなかった

俺は無理矢理におっさんに秘薬を飲ませる

おっさんはどんどん冷たくなっていく…だが俺は認めたくな
かったいや、認められなかったおっさんを揺らし、色々な回復薬を飲
ませていくが目覚める気配はない

「おっさん！おっさん！起きてくれよ！おっさん！あんはうちのギ
ルド最強だろ！おっさん！死ぬな！おっさん！」

と近づいてきた姉が俺の肩に手を置く…姉の顔を見ると姉は首を
横に振った…

「う、うそだろ…なんで…おっさんが…」

俺は初めて近くの人間が死ぬのを体験した…涙が崩壊したダムの
ようにこぼれ落ちて行く…

そのまま目の前が真っ暗になり…力が抜けていく…そういえば
さっきのダメージがあ……………

姉視点（物語上読まなくても大丈夫なはずです）

突然だが私には弟がいる。

いや、世界一かわいい弟がいる

子供の頃なんかほとんど騒がないけどずっと私の後をテトテ歩いてついてきてた

ただ、今はその弟とは離れて暮らしている。ものすごい寂しい…会いたい仕方がない…

何故離れて暮らしているかと言うと5歳のときに弟が急にハンターになると言い始めたのだ。

ハンターは毎年何人も人が死ぬような危険な仕事だ。そんな仕事を弟にさせるわけにはいかない

だから私はあの手この手を使って辞めさせようとしたが弟の意志は硬かった

そこで私はなぜそこまでハンターに拘るのか気になって聞いてみたら

「いつ村が襲われるか分からないのに自衛手段もなく生活していたら夜も安心して寝れない」

と言っていたのだ…

なら私がすごい強いハンターになって四六時中弟を守ればいいんじゃないか？と私は思った

そこで私はハンターになる事にした。それを母に話したのだが一切認めてくれなかった

そこから私は隠れて特訓することにした…

村のはずれの広場で訓練するときガンランスを装備した知らないおっさんが話しかけてきていた。

私はすぐにその人がハンターだと思った。

そしてその人に戦い方を教えてくれと言ったら、7日に1回村のはずれの広場で教えてくれるようになった

そのおじさんはとても優しくかった。何でか気になって一度聞いた

ことがあつたのだが

おじさんがハンターになりたての頃、私の父がハンターのいろはをおじさんに教えたらしかった。その恩をまだ返せていないと言っていた。

私には父の記憶が殆どない：弟が生まれる直前に亡くなつてしまった。ただ、このときほど父に感謝したことはない。

そのおじさんに言わせると私はセンスの塊らしかった：流石父の娘と何度ももらしていた

そんなこんなで10年くらいがたちその間におじさんはいつの間にかG級ハンターになつていた。

私もモンスターとは戦つたことはなかったが実力だけなら上位のハンターとも引けを取らないとおじさんに言わせるくらいまで成長していた

そこで私は村でハンターになろうと思つたのだが母と口論になつてしまった：

母は私がハンターになろうとするのを一切認めようとしなかった

おじさんから昔何があつたのか聞いてはいたので母の言い分もわからないわけではないがこの10年で何十倍も可愛くなつた私の天使をハンターにするわけにいかないでそこだけは絶対に引けなかった

そして、その晩の日私はハンターになるために母には言わずに家を飛び出した

家を出るかはものすごく悩んだ：弟と別れるのはほんとに辛かつた：でも弟に死なれるのはもつと嫌だと思ひ近くの街でハンターになることにした

飛び出す前に弟の寝顔お見てから出ようとしたら決心が揺らいでしまい出るのが予定よりも4時間近く遅くなつてしまった

そして次の日には近くの街につきハンターになつた。そこからは地獄のような日々だった

モンスターは大して強くない、ただ弟に会えないのがひたすらに辛かつた：

2年が過ぎた頃にはその街でトップを争えるほどの強さになっていた。私はその街で鬼姫と呼ばれていたのだが：女の子に鬼はないんじゃないかな：

そんなある日、私の生まれた村にもものすごく強い新人がハンターになったという噂が流れてきた。

なんでもそのハンターは15歳で初クエストでドスジャギイ、2回目のクエストでリオレウスとアンジャナフ、3回目には舞姫？と呼ばれるハンターと協力してジンオウガを倒した

と言うのだ：最初は信じられなかった：弟と同じ年齢の子供がそんな異例のペースでモンスターを狩ってありえないと思った：

でも、私の弟ならそのくらいのをやらかしそうなのでもしかしたら弟君かもしれない：と思ったがありえないと一括した

その後もティガレックスやセルレギオスなどと強力なモンスターばかり狩っているらしかったのだがあまり興味がなかった

その後ガムートを弓で倒し村のみんなに肉を無料で配って焼肉パーティーをしたという話を聞いた

そこで私はまだ確信してしまった。

そのハンターは弟だ！

弟は弓を使うハンターになると子どもの頃に言っていた。そして村のみんなに肉を配ってパーティーなんて弟くらいしか思いつかないだろう：

なんてことだ：

私がハンターになって強くなり弟を守ってハンターには絶対にさせないと決めて村を出てきたのにいつの間にか弟はハンターになってしまっていた。

予定より少し弟がハンターになるのが早かったのだ：私はだいぶ強くなったのでそろそろ村に戻ろうと考えていた時期なのにこれだ：

その話を聞いた日に私は弟を辞めさせるため村に戻ることにした。その際街のハンターギルドに別れをつけ家を引き払ってからきたら想像以上に時間がかかってしまった。ほんとは1秒でも早く帰りたいのだが一応こちらの街で二年も過ごしていたら多少のしがらみはある

そして私は夕方くらいには街を出たのだが村までの帰り道の途中で私がお世話になったおじさんにあつた。おじさんも村に戻る途中だったらしい。

その時はもう夜も更けていたので、その場で野宿することになった。

おっさんとの久々の再開は楽しかった。いろいろな話をした。

その中で新人ハンターの話が出てきたので詳しく聞いたら名前がリアムだとおっさんが言っていた

やっぱり弟だった：

次の日の朝早くに村に戻るため出発したのたのでそんなに遅くはない時間に村に到着できた。

村に到着したとき村の広場らしきところで金色の何かが暴れているのが見えた。

おじさんと急いでそこに向かうと金のクシャルダオラがいた。

金のクシャルダオラは弓を持ったハンターに向けて右腕を振り下ろそうとしていた

まずい！私はもうダツシユでその少年を守った。

その少年は死を受け入れるかのように目を閉じていたが

二年もあつていなかったが一瞬で弟だとわかった。

ただ、二年の間に天使度が上がっている

これは：

と天使は来るべき衝撃が来なかったのに驚いたのか目を開けてこちらを驚いた顔で見っていた。

「やあ、リアム久しぶりだね

元気だったかい？随分とやられてるじゃないか」

「姉さん…」

久々の天使の声はやばかった…もうほんとにこの声だけで死んでしまうのではないかと思うほどに可愛かった。

感動の再開をしたいところだが今はその余裕がなかった…

そして金のクシャルダオラと戦うことになったのだが…ありえないほど強かったのだ…

攻撃は当たるのだが硬い皮にはばまれまともなダメージは一切入らなかった…

そこでおじさんが大ジャンプを決め金のクシャルダオラを倒したのだが…それで金のクシャルダオラは完全に怒ってしまい…おじさんに3つの竜巻があたりはるか上空に打ち上げられてしまう…

弟はすぐに気がついたようですおじさんの落下地点に急いで入ったのだがクシャルダオラに弾き飛ばされてしまった…

「グハッ…」

弟は民家の壁にぶつかり血を吐きながら倒れる…

あまりのことに私は動けなくなってしまった

「リアム!!!」

と叫びながらさつきから一緒に戦っていた双剣の女がかけよった…あとであいつころs…

「痛え…」

すぐに弟にかけよりたかったのだが私はクシャルダオラを警戒していた

がおじさんが落ちてクシャルダオラのほぼ目の前あたりまで落ちてきていた…

すぐにおじさんの落下地点に行こうとしたが距離が遠く間にあうかわからなかった駆け出した直後クシャルダオラはその落ちてくる途中のおじさんに向かって左腕を振り上げ思いつき振り降りし…

ドガン!!!という大きな音を起こしながらおっさんとクシャルダオラの左腕が地面にぶつかる

巨大なクレーターが出来上がりクシャルダオラが腕を上げるとク

レーターの真ん中におじさんが倒れていた…

それを見たクシャルダオラは飛び立ち背中を向け去っていく
それを見て、すぐにおじさんに向けようとしたが

「ツ…おっさん!!!」

と弟がおじさんにもものすごい速度で近づいていった。弟のほうが
少し早かった。

弟はクレーターの真ん中につきすぐにしゃがんでおじさんの頭を
抱える

おじさんは一切反応しない…

「おい、おっさん！生きてるか!?おっさん！おっさん!!」

とおじさんに弟はうったえかけ

弟は無理矢理におじさんに秘薬を飲ませる

その後も弟は色々な回復薬を飲ませていくがおじさんは目覚める
気配はない…

そこで私は気づいた…おじさんはもう…ハンターをしていれば仲
間が死ぬのは珍しい話ではない…

ただ、おじさんが死んだというのはショックだった

倒れそうになった…いろいろな思い出を思い出して涙がこみ上げ
てきたが

「おっさん！おっさん！起きてくれよ！おっさん！あんはうちのギ
ルド最強だろ！おっさん！死ぬな！おっs…」

弟はひたすらに怒鳴っていた…弟は最近ハンターになったばかり
なので周りで人が死ぬのは初めてなんだろう…このままでは弟が壊
れてしまう…と私は涙をこらえ…弟の肩に手を置き首を横に振る…

「う、うそだろ…なんで…おっさんが…」

弟は涙を崩壊したダムのように流した…そしてすぐに気絶をした
…弟も死んでしまったのではないかと思った。

私はすぐに弟にかけより弟を抱える…良かった生きてる…

さっきのダメージと近くで人が死んだショックで倒れてしまっ
たのだと思う…

私はすぐに気絶した弟に回復薬を飲ませる

その後は私も気が緩んでしまった…おじさんの死体を見てしまい
涙を堪えられなかった…

その後は弟を抱えて弟に抱きつきながら涙を流していた…

二章 試練

「うう…知らない天井…じゃない…」

目が冷めたら知ってる天井があった…

自室の天井が目の前に広がっていた。

「あれは夢…」

「よかった！起きたのね！あと夢じゃないよ…」

と言う声とともに姉が抱きついてくる

「夢じゃなかったんだ…」

「そうだよ、あのあと一週間も目が覚めないからすごい心配したんだよ…」

「えっ!?!一週間も!?!」

「そう、しかも秘薬飲ませてでも飲ませてでもほとんど治らないし…」

秘薬が効かない…そっか…もしかしたら俺は転生者だから効かないのかもしれない…

腕を切って生えてくるかどうか実験しなくてよかった…危うく片腕になるところだった…

「一週間って…村とか先輩はあの後どうなったの??」

「村なら被害はかなりあったけど修復不可能ってところまでは行っていなかったから今はみんな協力して直してるよ」

ああ…あの女ね…彼女なら無事だよ！何回か御見舞に来てたし…ほんと忌々しい…」

村も先輩も無事なんだ…よかった…でもおっさんが…

姉さん、なんか先輩が無事か言う前後に何か言ってるよね、聞こえなかったけど…

「そっか…無事なんだ…良かった…」

俺が命をかけようとしてまで守ろうとしたものは守れたみたいだ

：

「それはそうと姉さん久しぶりだね。何してたの？」

「ほんとに久しぶりだね！隣の街でハンターをしてたんだよ…まさかりアムがハンターになつてるとは思わなかったけど…」

「姉さんもハンターしてたの!?初耳だよ」

「してたよ…これでもかなり強いはずだよ！

街でも鬼姫って有名になつてたし…」

「鬼姫って…姉さんだったんだね…」

鬼姫ってあの有名なやつだよ…こんな村まで噂が流れてくるよな…間違えなく近くの街でも最強クラスのハンターだよ…

たしか、戦う姿が鬼みたいで鬼のような強さを持っているのを見た目の美しさから鬼姫ってつけられたんだよね…

「そうだよ…やっぱこの村にまで噂が届いてるんだ…しかし、女の子に鬼はないよね…結構傷つくんだけど」

「そうだね…流石に女の子に鬼はないよね…」
「って何したんだよ姉さんは…」

という感じで世間話や久々に会つたのでつづの話をしていると母が部屋に入ってきて三人でしばらく話していた

そこで俺がハンターをしている話になつたのだが姉に猛反対されてしまった

しかし俺はやめるわけにはいかなかった

そこで3人でじっくり話していたのだが何故だかいつも反対してくる母が味方をしてくれ姉は最後には

「ならば、私が試験をする…私が指定したモンスターと私の前で戦つて私を納得させなさい！」

と言つてくれた

その試験は俺がまだ病み上がりなのもあつて3日後に受けることになつたのだが…御見舞に来てくれた先輩にその話をしたら…

「私も行くー！」

と言ひ出しそれに対して姉が

「お前は来るな」

と返した

「なんでですか!?お姉さん!私も行かせてください!リアムくんは私が守らないといけないんです!」

「何ででもだ…これはリアムの試験なんだお前が手伝ったら意味がない!」

「あとお前に姉と言わせる許可を出した覚えはない!」

あ、うん…怖いです…二人とも鬼にしか見えません…あつ、先輩が勝ったみたいだね…無理やりついていくのはできるようになったみたい…ただ戦いに参加はしないっていう約束付きだけど…

とまあそんなこんながあつて…3日がたった

朝起きたら姉さんはいなかった。

先にギルドに行ってるらしいでギルドに行いたらすぐに竜車に乗せられて出発した…もうクエストは受けてるらしい…あと、さり気なく先輩置いていこうとしてたねたぶん…先輩も先輩でおいて行かないように物凄かったけど…

あの…姉さんクエストの説明くらい…してくれても…

ヒヤい!なんでもありません…僕は言われたクエストをやるだけの人形です…

とたどり着いたのは大蟻食の荒野だったが…何か雰囲気が違う…いつも行く場所と見た目はほとんど変わらないのだが…何かが違うた…

そのまま姉さんは突き進んでいき指定のモンスターを探してく…

なんか…姉さんが蹴散らしていく雑魚モンスターいつもより強くなえ!?

姉さんの強さがいまいちわからないからなんとも言えないけど…

あの雑魚たちってこんな強かったけ…?

しばらく歩いていくと黒い塊のようなものが見えた…あれは…姉さんあれ倒せとか言わないよね…冗談だろ…

「リアム…今回倒してもらおうモンスターはあれだ」

「えっ!?冗談でしょ…姉さんそれはないよ…」

「なんだ?不満でもあるのか?」

「いや、ないです…」

「じゃあ、とつとつとディアブロスの亜種を倒してこい!」

「はい…」

そうですよ…黒い塊って言っけどディアブロスの亜種だよ…なん
でだよ…試験ってまだ俺下位ハンターだよ!姉さん無茶振りにも程
があるよ…

亜種って明らかに上位クエストじゃん!

ディアブロスは前世でかなり狩ってたモンスターだけどさ…亜
種って怖すぎるだろ…なんであんな真つ黒なんだよ…

なんか異常な雰囲気あるよ…

姉さんに睨まれた…

と言うわけで戦います…一人で…

俺はみんなから少し離れシビレ罠を仕掛け樽Gを設置する

その後ディアブロスの亜種に向かって竜の一矢を放つ

赤い光の起動を残しながら綺麗に飛んでいきディアブロスの尻尾
に突き刺さる

ディアブロスがこちらに気づき走って向かってくる…が途中でシ
ビレ罠にはばまれ停止する…少し離れたところから爆弾に矢を当て
爆発させる

ものすごい爆炎で爆炎とディアブロスが区別できなくなる…そこ
に俺はひたすらに曲射で矢を放つ

これ見た目完全にモヤットボールだよな…

ディアブロスは罠から抜け出したのだが顔にモヤットボールが当
たり続け横に倒れる。

俺はそのスキに竜の一矢を3発ほど放ったところでディアブロス
が立ち上がる

こちらに向かって走ってくるのを横に飛ぶことにより回避する

そして俺は落とし穴を設置しようとしたのだがディアブロスが地面に穴を掘り始めたのでやめる：

あ：これめっちゃ怖い：

走り続けながらどこから出てくるかわからないディアブロスから逃げ続ける：

ディアブロスさつきまで俺の居た場所の地面から飛び出してくる。地面から10m近い大ジャンプを決めてディアブロスは飛び出してきた：

こわっ：あんなん当たつたら確実に死ぬ：

おれは出てきた瞬間に罠を設置する

ディアブロスはこちらを見つけたようでまた走ってくる：がまたしても途中でディアブロスが地面に落ちるその好きに俺はたる爆弾を設置しモヤットボールを放っていく：

ディアブロスは罠から抜け出して完全に怒り状態になった：俺は閃光玉を投げることを考えたが行動が読めなくなるのは危険すぎる：

俺は壁ギリギリまで逃げていきディアブロスが来るのを矢を放ちながら待つ

ディアブロスがこちらに向けて物凄い勢いで走ってきたので俺は左に大きく飛ぶことにより回避する

目標を失ったディアブロスは壁に激突し壁が崩落して岩が頭にあたりまたしても倒れる：

俺は竜の一矢をどんどんと放っていく：

今回ののは流石に効いたのか5発も打つ余裕があった。

ディアブロスは立ち上がり角で地面をつきあげるような攻撃をしってくるが俺はそれを後ろに飛び回避しそのまま曲射で頭にモヤットボールを当てる

ディアブロスの角が壊れた！よし！

これなら行ける！角が破壊されディアブロスは倒れる

おれはディアブロスが倒れてる間に矢に毒を塗る

ディアブロスが立ち上がったので胴体を狙い先程毒塗った矢をど
んどんとディアブロスに刺していく

多分これでディアブロスは毒状態になった

その後はスキを見て矢に強撃ピンを塗りディアブロスの尻尾をひ
たすらに遠くから狙っていく：

ディアブロスの尻尾が切れた

ディアブロスは横転する：そこに俺はモヤットボールをひたすら
頭に当て脳震盪が起こるのを期待する

ディアブロスは立ち上がったが脳震盪のためか尻尾が切られたた
めにバランスが取れないのか動きがものすごく悪かった：

回避してディアブロスが攻撃でたどり着いた先をあらかじめ予想
して狙い竜の一矢をどんどんと当てていく：

ディアブロスは流石に不利と思ったのか足を引きずりながら逃げ
ていく：

そしてたどり着いた先でディアブロスは寝ていた

俺はその横に唯一、1つだけ残った：大たる爆弾を設置する：遠く
から爆弾を当てて爆発させる：

その後は今までで以上に動きの悪くなったディアブロスを矢で突
き刺していく

グアアアア！！！！

ディアブロスが巨大な咆哮を放ったかと思ったらそのまま巨大な
地響きをさせながら倒れていく：

それを見た俺は少し離れたところで見ている姉さんの方を見て
ピースサインをしながら微笑む

姉さんはまるで何が起こったかわからないからとでもいうかのよ
うに唾然としていた。

先輩はピースサインを返してくれたかわいい：

その後は照明弾を打ち上げ竜車で帰ったのだが

姉さんは俺がハンターになることは認めてくれたがどんなに簡単なクエストにも姉さんが同伴するなら許すと言う条件だった…

俺は少し悩んで生存率も上がるし受け入れたのだが先輩の顔を見ると何か不満がありそうな顔をしていた…

あつ…ごめんね…

ディアブ羅斯を討伐して村に戻り姉さんの提案でパーティーを作ることになった。

パーティー名は『白銀の微風』
になった。俺に提案する権利は無かった。

そしてなぜか俺と先輩は上位ハンターにさせられた…うん、あのニヤヤしながらこつちを見てるギルドマスターを殴っていいですか？

だから、俺らのパーティーは上位パーティーとして登録された。

その日はそのまま解散して3日の休養を取ることになった。

そして3日後にギルドに集まったら先輩がナルガクルガを倒した
言い始めた…ぜひとも先輩にはナルガ装備をしていただきたい
…

その提案にすぐに姉は乗りナルガクルガの討伐に向かうことにな
った

そして、やってきました！溪流！懐かしいねえー

ジンオウガ以来じゃない？

うん、その時来た溪流とはまた違うんだけどね…

なんかこの世界だと同じようなところがいくつもあってでもそこ
にいるモンスターが強さが全く違うらしく強いところを上位、弱いモ
ンスターが多いところを下位としてるらしい。

で、探索を始めたのが、ユクモ装備とタマツミツネの装備を足して
2で割ったような装備の人がいたのだがその人に先輩が話しかけて
いった。装備は太刀でなんか侍みたいだった。

何でも話を聞くと我がギルド元No. 2、現最強のハンターらしい
…何でも彼もナルガクルガを討伐しようと思っていたところらしく
一緒に狩ることになった…

あと、クシャルダオラるときは村の周辺に異常が起きてて調査依頼

に言っていたと謝罪された。

いいやつではあるみたいだがそいつはほとんど喋らなかった。何か喋り方は武士みたいなやつだった。

自分のこと拙者っていう人始めてみたよ

俺はそいつを見ててル○ンの五○衛門を思い出した…なんか雰囲気似てる。

4人でナルガ探索をしてるとすぐに見つかった。

俺と先輩は2人に少し待ってもらい落とし穴を設置し樽Gを4個設置する。

その後俺が食事時のナルガに毒瓶を塗った竜の一矢を撃ち込みナルガに気づかせる。

ナルガクルガはいきなりの攻撃に驚いたのか一瞬固まったが大きな方向を放ち、怒り状態になりこちらに向かってくる。

ものすごい勢いで走ってくるが途中の落とし穴に落ちる

そこに俺は素早く矢を撃ち込み樽Gを爆発させる

そして爆発したところに全員でかかっていく

ちなみに俺は弓で遠くからなスタンスは変わらない

そこからは一方的な蹂躪が始まった…

先輩は鬼人化をしてナルガと変わらない速度で動いているのか赤い残像と黒い残像が縦横無尽に駆け回り金属をかけ合わせたような音がダンダンと響き渡る。

姉さんは姉さんで、大剣を大きく構え何もないとところに振り下ろしたと思ったら振り下ろしてる途中その下にナルガが現れ大剣で切りつける。未来でも見えてるみたいで怖かった…

五右衛門（勝手に命名）は太刀でナルガが止まった瞬間を狙いドンとナルガを傷つけていく…

俺は…弓があたらない…

ねえ、これ俺いらなくね…

と、なんだかんだしてらうちにナルガが倒れる

早いよ！俺なんもしてないよ！なんでだよ！

あつげなく3人が倒してしまふ。その後は照明弾を撃ち

4人で竜車に乗り村に帰る

村につくまでに決まったのだが五右衛門が俺らのパーティーに入ることになった

なんで？

てかそしたら俺いらなくなるじゃん…ほんとにやばいよ…

村に帰ったんだけど…先輩がナルガ装備みたいなのを作っていた。うん可愛かったです。

装備が薄いけどそれで大丈夫なのか聞いたら双剣だから軽い装備がいいらしいのだ…

当たらなければなんの問題もないって…どこぞのバーサーカーさんですか？

それにしても先輩は可愛かったです…まる

あと、姉さん大剣なのに麒麟装備って防御力どうなってんだよ!?って思ってたけど…当たる直前に肘とかの角度を少しだけずらしてちように装備の硬い場所に攻撃が当たるように回避してるんだね…なんとか見えたけど…ナルガのあの速度の攻撃に対してそれが出来る時点で装備よりも姉さんが異常な気がしてきたよ…モンスターよりモンスターしてるんじゃないかな？

村の発展

私はとある村で村長をしている…いや、今はもう町長と言ったほうがいいかもしれない

初めは何もない小さな村だった

だがここ一年でものすごい発展をした。

理由は一重にとある新人ハンターがデビューしたこと始まる

その新人は凄まじく、初クエストでドスジャギイ、二度目にリオレウスとアンジヤナフ、三度目でジンオウガ、四度目になるとティガレックスを狩ってきたその後も順調に色んなモンスターを狩ってきた

このペースでモンスターを狩っていくとモンスターの皮や骨、肉などが村に流れていく

肉は村人が買って食べていくからそんなに関係ないのだが、骨や皮は用途が非常に多くハンターの装備に始まり装飾品、家や家具までモンスターの素材は使える…

そんなものが村に大量にあるのだ…それを求めて多数の商人が村にやってくる

商人が来るときは色々なものを持ってきては売り、その利益で帰りには大量の素材を持って帰る

村に商人が来れば村は発展していく、そしてどんどんと住人が増えていく…

それに加えうちの村のギルドにいるハンターは少数だが一人一人がかなり強いのだ…

ハンター全体で数えてもかなり数の少ないG級ハンター、武士で知られるギルド2位、舞姫と言う二つ名を持ったギルド3位の美人ハンター

それに加えて物凄い速度でモンスターを狩り昇格して行く異例の新人だ

このご時世、どんな村に住んでいてもどんな街に住んでいてもモンスターに襲われてしまえば簡単に死んでしまう。

そんな、世の中なら少しでも安全なところにいたいと思うのが人間だ…

私達の村はそんな理由でどんどんと人が増えていった…

ある日、新人ハンターは自分より先輩のハンターに戦い方を教えたらしく、教えられたハンターもどんどんとモンスターを狩っていった。またそれで素材が流通し人が集まってくる

そしてその中にはハンター志望の人も多くいた

その人達には新人に教わったハンター達が戦い方を教えていた

何でも『リアム式討伐術』という名で教えているらしい

その討伐術は素晴らしく、新しく来たハンターはほとんど死ぬことなくドスジャギイなどを狩っていく…

それによりまた村が発展するという感じだ…

またそれからしばらくしたとき、新人ハンターはガムートを討伐し、肉が余ってるからみんなでパーティーをしようと言い出した。

村に新しく増えた人もかなりいたのでいい機会だと思いい私が主催で行った

かなり村にきた人が増えていた。いい懇親会になったと思う。

でも、あの人数でも肉は食べきれなかった…

どんな量だよ！余った肉は商人が買い取っていた

肉って他の村まで持つのか…？

あとパーティーの途中で気になったんだけど…リアム式討伐術を学んだ人達の新人ハンターを見る目はまるで現世に現れた神を見ているかのような顔をしていた

何があつたのかもものすごく気になる…

そんなこんなで新しく村にきた人についての書類やら何やらを忙しくしていると突然外で大きな咆哮が聞こえたのだ

そこで私は外を見た

金のクシャルダオラがいた…

今までクシャルダオラの襲撃を受けて崩壊しなかった村は一つもない…

私は終わった…と思ったただか、あの新人ハンターたちが戦い金のクシャルダオラを追い払ってしまったのだ…

これには私も腰が抜けたかと思うほど驚いた

ただし、ギルド最強のG級ハンターを失うという大きな爪痕を残してだが…

そこからは早かった村の再建は不可能ではないレベルに納まったのと、新しい村人が沢山いたため労働力は有り余るほどにあった。そしてお金も新人ハンターのおかげで村は大変に潤っていた。

この際だから大規模に村を改築して街にしようという案がでて思うことになった

それからは仕事に追われていたのだが…村に来る人が多すぎて忙殺するかと思った…

何でもただでさえ危険なクシャルダオラなのに金になったクシャルダオラをも退ける村という話がものすごく有名になっていたらしい…

それに、鬼姫という二つ名のついた街でも有名なハンターがこの村に拠点を移したという噂もあったらしい

この前知ったんだけどあの新人ハンター鬼姫の弟なのね…道理で強いわけだよ…

クシャルダオラ討伐から二週間くらいがたつたとき村が騒がしくなったと思ったらあの新人たちがまたやらかしてくれちゃっていた…

黒く変色した亜種と呼ばれているディアブ羅斯を狩ってきたのだ

…

あまりの迫力に村人達は圧倒されていた

商人は燃え上がるような目でディアブロスを見て

リアム式討伐術の奴らは手に左手で拳を作り胸に当て右手は後ろにで横にしていた…なんだあのポーズ…そして無駄に揃ってる…ただ新人君が全く見てないよ…気づいているのかな？

その後、あの新人と鬼姫と舞姫でパーティーを作ったらしい。そしてあの新人と舞姫は上位に上がっていた。

パーティー名はたしか…『白銀の微風』

微風じゃねえよ！嵐だよ！

と聞いた瞬間に叫んでしまった私は悪くないはずだ…

そこあとはパーティー結成後初めてのクエストが上位のナルガクルガって…ぶっ飛び過ぎない気も…

あと、何故か白銀の微風に武士が入ったらしい…

これでうちの村のの最高戦力が全員でパーティーを組んだわけだ

…

もう微風どこじゃないよ…嵐すらも生ぬるいよ…

そうだ…最近村の近くで雷を纏ったモンスター見たいのがよく見られて被害報告がかなり来てるし、白銀の奴らに行ってもらおうか…

確かモンスター名は…麒麟？だったっけ？

睡眠爆殺

俺らのパーティーは今町長の部屋に呼び出されている

ナルガを討伐して3日後新しくクエストに行こうと話していたとき呼び出されたのだ

「いや、突然呼び出してすまなかつたね」

「いえ、全然大丈夫ですよ。」

「噂はかねがね聞いているよ…」

「町長まで知っていたかとは思いますがたいかぎりです」

「して、今回呼び出した件なんだか…その噂の君たちに最近町の近くに出現するようになったあるモンスターを討伐してほしくてな」

「あるモンスターとは？」

「幻獣…キリンだ」

「「キリン!?!」」

キリンを討伐してほしいって…あのキリンだよ…首が長いやつとかじゃなくて伝説上のやつだよ…睡眠爆殺で有名なあのきりんだよ…ラオキリンではないよね…?

「そのキリンが上位個体らしくてねえ…普通のハンターじゃあ手が出せなくてね…うちの町最高戦力のパーティーに行ってもらおうと思ってるな」

「わかりました…討伐しに行きます。」

しかし色々と準備があるので…討伐に行くのは明日でもいいですか?」

えっ!?姉さん!?勝手に決めちゃうの!?キリンとか睡眠爆殺と女の子用の装備のイメージしかないけど…あれ一応幻獣だし…攻撃力かなり高いよね…

先輩はどう思ってるんだろ?と思いき先輩を見たら目があつた瞬間無言で頷かれた…うん、あの目は行こうとしてるね…まじかよ先輩…さすがバトルジャンキー…

ちなみにさつきから会話をしていたのはずっと姉さんだ…あまり皆で話しても邪魔になると思い一人代表をたてようと先ほど会話していたのだが五右衛門さんは論外で…いまだに名前知らないし…

残る俺と姉さんと先輩で年齢的に姉さんが代表になった…

もう姉さんが独断で受けるのを決めてしまったからどうすることもできない…

ああなった姉さんを止められる人間を俺は知らない…

「ホントか！ありがたい！今回の件についてはギルドの方を通しての依頼ということにさせてもらう。手続きや竜車に関してはこちらの方で手配しておく

では、頼んだぞ！」

町長の部屋を出た俺達はギルドに併設された酒場に来て作戦会議をすることにした。

「姉さん…できるなら受ける依頼を独断で決めるのはやめて欲しいな…次からでいいから…」

「わかった。心の隅でもおいておこう…」

うん、姉さんそれわかってないやつだよ！次からもやるやつだよ！

「しかしキリンか…なかなか手ごわそうだね…リアムなんか作戦ある？」

「先輩なんで俺に聞くんですか？まあないわけではないですけど…」

「さすがリアム！そっぴいえばずっと気になってたんですけどお姉さんの装備ってキリンですよね？」

戦ったことあるんですか？」

「だからお姉さんと呼ぶ許可を出した覚えはない！

あとこれは下位個体のキリンの装備がたまたま売ってたので買っ

ただけだ戦ったことはない。」

姉さんの装備気になってたけど買ったのね…しかしキリンの装備なんてよく売ってたね…そしてそれを買う姉さんなかなかあれだね…

先輩と姉さんは未だに呼び方で争ってる…先輩は姉さんの事を「お姉さん」とよく呼んでいる

先輩兄弟居ないみたいだからお姉さん欲しかったのかな？

で、先輩が「お姉さん」と呼ぶと姉さんは機嫌が悪くなる…そしてお前は呼ぶなど何度も言っているその時の姉さんはマジで怖い…先輩も恐がってしまっているのかしばらくは「ルミアさん」とさん付けでしばらくは呼ぶのだがまた気づくと「お姉さん」と呼んでいる。

この争いは俺の心臓に悪いので是非ともやめていただきたい…

そして安定の何も話さずにいるだけの五右衛門さんね…強いんだけどさ…なんか不思議だ

「じゃあ、俺キリンと戦うための作戦があるから聞いて…まず先輩には…」

と作戦を説明していきその日はそれで解散になる…

皆それぞれ作戦会議が終わると帰っていくのだが俺だけは鍛冶屋によってから帰る…至急作って貰いたい秘密兵器があるのだ…頼んだら鍛冶屋のおっさんは快く引き受けてくれた。受取は明日の朝になる。

次の日俺は鍛冶屋により秘密兵器を受け取ってからみんなの集合場所に行く…

俺は爆発強化の護石を3つほど持っていたのでペンダントにして先輩に1つあげたら姉さんの機嫌が悪くなっていた…

姉さんにもあげたら機嫌が治った。3つ持ってたほんとに良かった…

その後はキリンの目撃情報のあつた場所に四人で向かった。

キリンはすぐに見つかった。俺は秘密兵器を取りだす…それを地面に刺して立ておく

「これでよし」と

「それ何？」

と先輩が聞いてきた…

「秘密兵器だよ、やってみないとわかんないけど多分これを地面に刺しとくとキリンが撃った雷がここに吸収されるはず…まだ確実にやないから避けないといけないんだけど試してみたくて…」

そう、俺が作った秘密兵器とは避雷針だ…詳しい仕組みは知っていたが何せ素材が足りなかつたのでジンオウガの皮などを代用して作った即席の避雷針もどきである

「へえ…それがホントならすごいね

そんなものまで思いつくんだ…」

「よし、準備はできたしみんな作戦は覚えてる？じゃあ行くよ！」

と言うと俺は竜の一矢のモーションを始め体から溢れだした光が矢に集まりきつた瞬間手を離しキリンに初撃を当てる

ちなみにきちんと睡眠ビンは塗ってある

キリンがこちらに気づくが俺はどんどんと催眠ビンの塗ってある矢を当てていく…

とこちらに向かつてきていたキリンは横にたおれ眠り始めた…

俺は眠っているキリンの横に大樽爆弾Gを仕掛け

離れて爆弾だけを弓で撃つ

横になっているキリン本体を隠すくらいまで爆炎が広がっていく。キリンは飛び起きてこちらに向かつてくるそれを3人が近距離で刻んでいき、俺は遠くから睡眠ビンでちまちまと攻撃していく

ちなみに今回は三人に睡眠武器を装備してもらっているのですぐに寝てくれると思う…

またしてもキリンが横に倒れて眠り始めるのでみんな離れて顔の横に樽Gを1つ仕掛け遠くから爆発させる…

そしてまたキリンは飛び起きる…今回キリンは向かってこずに雷を放ったのだが避雷針の方へと飛んでいき俺らへの被害は無かった…

それを見るとまた3人が襲いかかっていく…

その間に俺は大たる爆弾とカクサンデメキンを調合する。

ゲームみたいに2つを用意してストレージ内で調合しようと思うと勝手に調合されるのだ…

ここもまた現実なのに不思議な仕様だ

そしてまたキリンは横に倒れて眠る

俺は再度、樽Gで睡眠爆発を起こす…

今回は、これをひたすら繰り返す作戦だ。

3人にも調合を教えているので4人で合計32回できる計算だ…
恐ろしい…

4回目でキリンの角を折る事ができた

6回目でキリンの尻尾の色が変色していた

10回目のあと立ち上がる時のキリンはとても弱々しかった…

15回目の罪悪感はやばかった…ヨロヨロになりながら足を引きずり逃げて行こうとしたのだが途中で再度眠らされるってしまった

18回目でキリンの討伐に成功した…ラオキリンじゃなくてよかった…普通のキリンだ。

まあ普通のキリンでよかったと言ってる時点でおかしいけど…

これはあまりにもえげつなかった…8回を超えたくらいから4人の間には会話がなくなっていた

先輩と姉さんの目が少し怖かった…目を合わせることができなかつた…

五右衛門さんだけキラキラした目でこちらを見ていた…五右衛門さんのあんなキラキラした目始めてみたよ…

その後照明弾を打ち上げ俺らの狩りは終わった

3日後、姉さんの装備がキリンは上位装備になったらしい：ただゲームとは違ってスカートのようなものはなく：下位と同じデザインだった：ナイスセンスです！鍛冶屋のおっさん！

これでうちのパーティーはナルガ装備の先輩とキリン装備の姉さんと言う2つの花が出来上がった。

五右衛門さんはタマミツネ+ユクモの謎装備のままだ。

あと俺の新装備も姉さんの新装備と同時に完成した。かなり凝ってデザインしたので注文してからかなりの時間がかかったが無事完成した。

見た目はモンハンXの時の亜種ディアブロスを使った、悪魔のような装備だ。名前はディアボロス装備（レイジシリーズ）太刀の審判の翼と同時に配信されたやつだ。

俺はアレが好きなのでこの前、ディアブロスの亜種を狩りに行ったときに作らなくてはこの使命感到襲われ密かに作っていた。予想道理かなりかつこよかった。

というわけで俺らのキリン討伐は終わった：

なんか五右衛門さんはこの前俺が戦い方を教えたハンター達と話していた：内容は聞こえなかったが意気投合してるように見えたのは気のせいだろうか。

美しき天狐に汚い戦い方

キリンを倒してから俺ら4人は1週間休みを取ることにした…普通のハンターは大型モンスターを1体狩ると1週間は休むらしい…
って考えると俺どんなペースで戦わされてきたんだよ！騙されたわ！

で、1週間の休みの間に各自装備の点検や新装備の発注をして届いてみんなで見せあつたのが3日目の話だ

その後は姉さんと先輩は2人で買い物に行くらしかった。この前のキリンとの戦いで仲良くなったらしい

だけど俺の見てるところだと仲悪い気がするんだが…

俺は五右衛門さんと二人になったのだが特に会話もないので解散することにしたとき、町長に呼び出された

この前の討伐の報告のあとに会ってるはずなのになんで？とは思ったが呼び出されたので五右衛門さんと行くことにした。

町長の部屋に入るとこの前戦い方を教えたハンター達と町長がいた。

まあなんだかんだ話があつて結論だけ言うところのクシヤルダオラみたいなのが来たらどうしようもないから何か対策になるものはないか？って言う話しだった。

俺はバリスタや大砲のだいたい作り方を教えてこれを配備したらどうか？と提案したら部屋にいた奴らはみんな目を輝かせて見えた。

俺は面倒事に巻き込まれそうだったので早々に部屋を出ていったのだが五右衛門さんだけは部屋に残ってた。

その後は、一人寂しく帰りましたよ…

その後は4日あったのだが特にやることもなかったので1日寝て過ごしたり、減ってしまったアイテムやモンスター素材を整理したり

していたらあつという間に過ぎた。

そして、4日後ギルドに行こうとしたら姉に誘われたので一緒に行くことにした。

途中で先輩と合流してギルドに向かうと併設された酒場で4人で囲むタイプの丸いテーブルについた椅子に座っている五右衛門さんを見つけた。

五右衛門さんを近づくとテーブルの上には1枚の紙があるのを見つけた。

三人で近づいてよく見ると天眼という二つ名のついたタママツネの討伐依頼だった。しかも受理されたあとの

「これは…?」

「拙者、このクエストをうけたでござる」

ん?うけたでござる??ってうけたでござるじゃねえよ!何勝手にクエスト受けてくれちやってるの?馬鹿なの?ハウレンソウは?社人なら当たり前だよ!

「あ、いいねー!これ楽しそう!」

えっ!?先輩…楽しそうって…やっぱバトルジャンキーだったんだ

…

「次のクエストは天眼タママツネかなかないモンスターじゃないか…」

おーい!姉さん?なんでもう行くの確定したみたいな顔してんの?このパーティ個人行動多すぎるよ?モンスターと戦ってるよきの一体感はどこにやったの?

「拙者、こやつ素材を使った太刀を新調したいでござる。」

五右衛門さん話し方が…よくわからなくなってるよ…

「じゃあ、準備して一時間後にここ集合ていいかな?」

「うん」

「承った」

あ、もう討伐行くの確定なのね…

しかし天眼タママツネか…泡まみれになるかもしれないから消散

剤だけでも人数分持つてくるか：

武器は弓でいいよな：

一旦、家に戻りいろいろな準備をして一時間後にギルドにみんな集まった。俺はタマミツネの泡の効果やらを説明してみんなに消散剤を配った

その後、竜車に乗り溪流に向かった。

天眼タマミツネはすぐに見つかったのだがゲーム通寝ていた：

寝てるタマミツネの周りに起きないように4人で樽Gを8個設置し、少し離れたところに落とし穴を設置しておく。

俺は静に弓を展開し矢に毒を塗ったあと樽Gだけを撃ち抜く、1つ目の爆弾が爆発するとその爆発に誘爆され周りの爆弾がどんどんと爆発していきものすごい爆炎が立ち込める

そこに俺は毒の塗った矢をどんと打ち込んでいく：爆炎が晴れたところには真っ黒になったタマミツネが怒り状態になっていた。タマミツネはこちらに気づいたのか滑りながらこちらに近づいてくる：

がしかし途中の落とし穴に落ちる：そこで近距離戦闘組3人は俺がタマミツネに毒矢を撃つてる間に調合していた樽Gをタマミツネの横に再度設置していく

俺は3人が設置してる間に急いで調合して、俺も2個設置する。

その後少し離れて樽Gを弓で爆発される先程のようにどんどんと誘爆していき物凄い爆炎と爆音が響き渡る。

先輩は爆炎が晴れるまでにシビレ罠を近くに設置した。

爆炎が晴れ罠から抜け出したタマミツネが再度こちらに向かってくるがシビレ罠に引っかかるそれを見た近距離3人はそれぞれの武器を出して襲いかかる

五右衛門さんは鬼人兜割りが好きみたいでよく使っている。今回は鬼人兜割りを使わずに左側でひたすらに太刀を振り回している

姉さんは大剣のため攻撃が好きらしい。右側に大威力の大剣をどんとどんと当てていく：あの腕の細さでどうやってあの大きさの大剣

を振り回しているのか未だに謎だ…

先輩は兵長のような動きをしているのだがゲームとは違い背中を切っていくのだが切り終わる直前に背中を蹴り大ジャンプその後スリンガーを使い戻ってくる勢いを使って切り刻んでいくのを何度も繰り返して…

なんてトリツキーな…先輩いつの間にゲームのハンターの上を行くように…

これからは絶対に先輩を怒らせないように生きよう…

で俺はもう一度シビレ罠を設置したあと竜の一矢を尻尾に当てていく。

タマミツネがシビレ罠から抜け出すと直ぐに3人は離れて俺の設置したシビレ罠の近くに移動してきた。

タマミツネが赤や緑そして白い泡を放ったので俺らは赤いのにわざとぶつかりに行きそれ以外は回避する。

タマミツネは散らばった俺らを見てS時に滑りながら向かってくるが予想通りだったので綺麗に回避する。

そしてタマミツネが止まった先にシビレ罠が設置してあり再度タマミツネの動きが止まる。

今回、先輩は尻尾を狙って地面から右へ左へと怒涛の連打を放っていく。

姉さんは右側に…そして五右衛門さんは正面から顔や前足に向かって鬼人兜割りを放っていく

おれは余った左側に曲射でもやつとボールを当てていく…

タマミツネはシビレ罠を脱出し大きな咆哮を放った。

俺らは狩りの途中あまり話さないなので耳栓をしているので一切効かない。

と、タマミツネは大きく前足を上げ下ろすと同時に水のブレスを放ってくる

ちようど直線状にいた五右衛門さんは左に大きく飛び回避する…

その後、タマミツネに近づいていき武器をしまうそれを見た俺は五右衛門さんと目を合わせ五右衛門さんに向かって走っていく五右衛門さんが近くなったとき俺は軽くジャンプをする

五右衛門さんは腕を下で組み俺の左足が組んだところに取った瞬間思いっきり上に持ち上げる

そして俺は飛んだ

タマミツネよりも遥か高くに飛んだそして落ちてく途中タマミツネの背中に乗る…

足に装着していた短剣を取り出し背中にズカズカと突き刺していく…

とタマミツネは大きく咆哮をして暴れだしたので俺は落ちないように必死で捕まる…

これ落ちたら死ぬんじゃないかっていうくらい揺れる…

いやね、俺もこんなの嫌だったよ…モンスターに近づくとか今まで一回もした事なかったし…

でも、乗り攻撃つてもものがあるって説明を3人にしたらよくわからないからやってってくれて言われて…最初は拒否してたんだけど…根負けしました…

あのとときの俺なんで根負けしてんだよ!?!怖えよ!

何だよこれ!富士急のジェットコースターを命綱なしで乗るのと同じくらい、いや…確実にそれ以上は怖え…もう絶対やらない…

タマミツネが落ち着いたので再度突き刺すとタマミツネは横転した…

と同時に俺は投げ飛ばされる…なんとか受け身を取ることはできたが痛い…

倒れたタマミツネに3人は集団リンチのように攻撃を当てていく体を打った痛みで逆に冷静になったのか倒れたモンスターに切りかかっていくハンターを初めてまともに見ただけこれ…集団リンチ

だわ：酷すぎるだろ：タマミツネ何もしてないじゃん！

寝てたら急に爆弾で起こされて毘仕掛けられて爆弾当てられて背中に剣刺されて倒れたら3人のハンターにひたすら切られ続ける…

これはいじめなんじゃ…

ってそんなこと考えてる場合じゃない！

と思ったがタマミツネは立ち上がったが足をひきずってこちらをチラチラと見ながら逃げていく…

罪悪感が半端じゃない：なんだこれ…

タマミツネを追いかけていくと寝ていた…

俺達は寝てるタマミツネの横に樽G設置少し離れたところから矢を撃ち爆発させる…

ものすごい爆発が起きタマミツネが飛び起きる

そして大きな咆哮を放ったと思ったらそのまま横に倒れていき息絶える…

この虚無感は何だろう…

先輩と姉さんは討伐を喜んでいた

何か大きなことを達成したあのような喜び方だ

五右衛門さんはよくわからない：表情は一切変わっていないがこちらを少しキラキラした目で見てる気がする…

そんなこんなで照明弾を打ち上げ俺らの狩りは終わった。

帰ってから作られた五右衛門さんの太刀は刀身に桜が見えてとてもかっこよかった。

先輩と姉さんはゲームと同じようなタマミツネの装備を作って着替えて喜んでた。多分討伐で喜んでたんじゃなくて可愛い服を作れるから喜んでたんだね。なんだかんだ言って二人も女の子だしね

たしかに可愛かった：タマミツネよ：すまない…このために犠牲になってくれたんだね…

似合ってるよとても可愛いといったら赤くなっていた解せぬ…

銀の猛者

タマミツネの討伐から3日がたち俺らは再度ギルドの横の酒場に集まり話していたのだが

「で、結局リアムはなんのクエストに行きたいの？」

というふうには振られていた…なんでも先輩のやりたいナルガクルガに行つて姉が勝手に受けたキリンに行つて五右衛門さんが欲しいクエストらしい…俺の行きたいのは採取クエストだと言っているのだが一切信じてもらえずさっきからこれの繰り返しなのだ…

なんかちようどいいモンスターは…

「あつ…リオレウス…」

俺が言い終わる前に

バタツン！と大きな音がしてギルドの扉が開かれる…

「大変だ!! 溪流にリオレウスの希少種が現れた!!!」

「リオレウスの希少種か…リアム殿もなかなかチャレンジジャーですな…」

「そつか…リオレウスの希少種か…リアムだもんね…それはそうだよね…」

「さすが私の弟だ…だが、私達で勝てるのか？」

つて、何みんな行く気満々になつてるの!? アホなの!? 俺が行きたいのは普通のリオレウスなんですけど!?

なんで俺がリオレウスの希少種行きたいとか言い出した風になつてるの? 理解が追いつかないよー!

「では、私がギルドマスターに話をつけてくる」

「えっ、?」

つて、姉さん早いよ…もういないじゃん…

と言うわけで次の狩は銀レウスみたいです…死にたくないです…

「あのギルマスも、私達が行くことで納得してくれたよ!」

姉さん許可取るの早いです…あとあのクソギルマスあとでころs

……
　　こういう時なんで数の暴力で倒さないんだよ！つて俺は常々
思ってたんだけど最近聞いた話によると

昔とある町に少し特殊なギルドがあったらしい

何でもそのギルドはどんなに弱いモンスターだろうがベテランハンターが最低1は入った10人の小隊で狩りに行っていたとのことだ。で、そんなギルドが近くにクシャルダオラが現れ100人近くの討伐隊ほぼ軍隊のようなものを作り戦いに行った。そのギルドには何人もの上位ハンターやベテランハンターがいたので決して倒せないわけではなかったはずだったが誰も帰ってこなかったとのことだ……

そしてそれから3日後街にモンスターのスタンピートがおこった。クシャルダオラを筆頭にジンオウガやリオレウス、ナルガクルガ、イビルジョー、ベリオロス、ラギアクルスなどなど多種多様なモンスターが何の前触れもなく街に襲いかかり……強いハンターはすべて先の討伐で行方不明になっていたため街に抵抗する策はなく、ただひたすらに蹂躪されたと言う話がある……

そのさい生き残った数人の町の人たちはその話を色々な街で言いふらしていき、絶対に大人数で狩りに行ってはいけないと言い伝えていったそうだ。

しかしどこにでも人の話を信じない人はいる。それはいい案だと同じように10人の小隊を作るのを強制させたギルマスがいたのだがその街も滅んだらしい

2つの村が滅んだことからギルドはモンスターと大人数で戦う事を禁忌としたとの話だ。

なのでギルドは4人を推奨している。例外的に村や街をモンスターが襲ってきたときにのみ4人以上での戦うことを認めているがそれ以外は一切を持って認めていない
という話だった。

ゲームとは違う理由に驚いたが確かに英雄に敬意をとかで人類が滅んでしまつたら元も子もない、俺もそれが理由ならなりふり構わ

ずに大人数で討伐の提案をしていたと思う。

あとは余談的なものだがハンターになるような人間は気むずかしい人間が多く団体行動などをさせると何も決まらないし、喧嘩などの色々と問題が起こるらしい

俺はこっちの理由で団体行動しない気がする…

まあ、こんな話をしているうちにそんなこんなで用意が終わり集合してやってきました溪流…

ほんとに行きたくないです…

ちなみに俺の今回の武器はヘビーボウガンです
なぜなら近づきたくないから…乗り攻撃は封印しました。

探していると銀レウスはすぐに見つかった

俺は水冷弾をセットしリオレウスの頭に打ち込んでいく

これを合図に戦闘が開始したこちらに気づいたりリオレウスは飛んで近づいてくる。

それを全員で回避するリオレウスが降りた先には先輩がこつそり設置していたシビレ罠がありリオレウスの動きが止まる。

先輩は前回タマミツネに使っていたあのトリツキーな動きで背中に攻撃を与えていく

五右衛門さんは尻尾の同じ場所に太刀をどんどんと当てていき切断している

姉さんはひたすらに左の羽を振り回した大剣で切り刻もうしていた

俺は頭に水冷弾がある限りすべて打ち尽くすような勢いで当てていく…

ちょうど水冷弾を使い尽くしたときリオレウスは罠から脱出した
脱出したりオレウスは尻尾を思いつき横に薙ぎ払う

「危ない!!!」

俺は咄嗟に叫んだが一瞬遅く五右衛門さんが尻尾にあたり吹き飛ばされる

崖にぶつかり止まった五右衛門さんは膝から崩れ落ちた…

俺はそれを見て速攻で駆け寄る…

五右衛門さんは意思があつたので俺は秘薬を飲ませる

「リアムー早くしてくれ！私達だけだときつい…」

と姉さんの声がしたので五右衛門さんを壁に背をつけるような状態で座らせすぐに戦闘に参加する

今度は頭に雷撃弾を撃ち込むために玉を入れ替え用としたときりオレウスが飛んだ

俺はすかさず閃光玉を投げ

りオレウス幅目の前で爆発した閃光玉は一瞬世界を明るくし消えていく…

りオレウスはそのまま地面に落ちる

今度は姉さんが尻尾に大剣でためた攻撃を当てていく。

先輩は羽に小さな切り傷をどんどんとつけながら走り回っている

俺は雷撃弾を頭に当てていく

雷撃弾がつかたときりオレウスは立ち上がった

その瞬間先輩と姉さんがアイコンタクトをした気がした

先輩は姉さんの方に全力で走っていき軽く飛ぶ

姉さんは腕を組みそこに先輩の足が乗ると同時に振り上げ先輩が宙を舞う

バク宙のようにバック回転をしながら先輩はレウスの背中に乗り双剣を突き刺していく

りオレウスは暴れているが先輩は一切落ちないで双剣を刺し続けている…

先輩落ちない…なんで…

とりオレウスはたまらず横にコケる

俺はコケたりオレウスの頭に竜撃弾を撃ち込む…

何発か撃ち込んだときりオレウスの頭部の鱗が音を立てて弾けた部位破壊に成功したみたいだ

姉さんは変わらず尻尾を切りつけている

先輩は羽を変わず攻撃している

リオレウスが立ち上がるこの瞬間姉さんの極限まで溜めた大剣が
リオレウスの尻尾にあたりリオレウスの尻尾が宙を舞った…

リオレウスは押し出されるかのようにバランスを崩しこちら側に
倒れてくるがある程度離れていた俺には関係ない

すぐに拡散弾をセットし撃ち込む背中に拡散弾が当たり爆発が起
きていく…

リオレウスは立ち上がったので俺はすぐに先輩の方に向かう

リオレウスが咆哮を放ち怒り状態になり

こちらに突進をしてくる

が途中の先輩の仕掛けた落とし穴に落ちて止まる

先輩は変わらずに羽を攻撃していく

そして怪我が治ったらしい五右衛門さんも戻ってきて切れた尻尾
の断面にたちを突き刺しグリグリとしていた…

五右衛門さん性格悪い…？

姉さんは部位破壊を成功した頭に大剣を振り回していく…

俺は何してるか？って？攻撃する場所ないから催眠弾のセットす
る

リオレウスは落とし穴から脱出し、飛び上がるのでこの時を待つて
ましたとばかりに俺は催眠弾をリオレウスに当てる

飛んでいたりリオレウス降りたと思ったらそのまま寝始める俺は尻
尾の断面の横に樽Gをセットする

4人が爆弾をセットし終わったのを見ると俺はすぐに樽Gを撃ち
抜き爆発させる…

これはエグい…

リオレウスが苦しそうな咆哮を放つ

リオレウスが飛び上がったので再度閃光弾をリオレウスの目の前
で爆発させる

リオレウスは空から落とされる…

そして俺はリオレウスに近づき尻尾の断面部分に機関銃の様な連

射を打ち込んでいく

他のみんなも思い思いの場所を切りつけていく…

リオレウスが立ち上がり大きな咆哮を放つが俺らは一切動じない
それからは飛び上がったら閃光玉で落として…

突進してきたら罠にはめて…

と一方的な展開をしていた…

銀レウスは流石に体力が多いのか一向に倒れずその繰り返しを永遠としていた

かなりの時間が立ったときリオレウスは閃光玉で落とした衝撃で死んでしまったのか落ちた瞬間から動かなくなる…

「勝った…」

「やったね！リアム！」

「うん！勝ってよかったよ！」

「何を申す…リアム殿のことだ…この展開もわかっていたのである
う…」

あ、うん五右衛門さんの過大評価がきつい…

そんなこんなで帰ることになったのだが…竜車で発見された衝撃
の新事実！

五右衛門さんの名前は雪村と言うらしい！

真っ赤な鎧が似合うあの人と同じ名前じゃん！漢字違うけど…
つてこの世界来て初めて日本人みたいな名前の人見たよ…雪村さん
つて何なんだ…

生態系の覇者

銀レウス討伐から3日がたちギルドに集まった四人で話した結果姉さんが

「最近強いモンスターばかりだし、息抜きがてらドスジャグラスでも行くか」

と言う提案にみんなが賛成してドスジャグラスの討伐に行くことになった

古代樹の森につき探索をしたのだがドスジャグラスが一向に見つからなかった

ガサツ

後ろから何か歩いたような音が聞こえ振り向くとドスジャグラスを唾え木々の間から出てきた

「イビルジョー!?!」

これには流石にびっくりした…息抜きにドスジャグラスの討伐に来たらイビルジョーがいたのだ…

「イビルジョーか…中々の好敵手じゃないか…」

うん姉さん…戦おうとしないでね…そいつ強いから…

「拙者、前々から一度戦ってみたいと思つてたでござるよ」

あく、うん、雪村さんも賛同しないでね

「リアムくん、これどうする?」

先輩…あなたバトルジャンキーじゃないの?ただしないしナイス質問だ!もちろん答えは

「にgg…」

「何を言っているアリス、もちろん戦うに決まっているだろう」

姉さん…うん、もう何も言わないよ…こうなった姉さんの止め方

知らないし…

「じゃあ、戦闘開始!」

姉さんその合図はなに…?

姉さんはイビルジョーに向かって走りながら大剣を素早く抜刀し

ドスジャグラスを啞えた頭に正面から切りかかる

これにはさすがのイビルジョーも耐えられなかったのかドスジャグラスを離てしまう。

真下に落ちたドスジャグラスはまだ生きがあつたようでゴキブリみたいな素早い動きで逃げていった…

「ターゲツト逃げたけどいいのによよ…」

「リアム殿、それより今はイビルジョーを

拙者は戦いたくてウズウズしてるでござる」

今日から俺は密かに雪村さんをバトルジャンキーのカテゴリに組み込むことにした

先輩はすでに双剣を使ってイビルジョーに攻撃を始めていた最近の先輩の強くなる速度は異常だ…

前回は兵長を思い出すかのような動きで背中を駆け回っていたが今回はイビルジョーの周りある木々を使いターザンのように木にスリンガーを使い縦横無尽に飛び回っていた…

イビルジョーには小さな切り傷が背中だけではなく全身のいたる所にどんどんとできていく

「拙者もそろそろ行きますぞ…」

と雪村さんは言うやいなや駆け出していき桜の模様の書かれた太刀を抜刀し尻尾を切りつけていく…

俺も弓を展開し目を狙い撃つていくがイビルジョーが動いてしまつてうまく当たらない…

と姉さんがイビルジョーと距離を取りイビルジョーに向かって走りながら大剣を地面に突き刺したそして大剣に体重をのせ体を浮かせるそのまま空中で回転する勢いを使い地面に突き刺さつた大剣を抜き大きく回転をしながら背中を切りつけ背中に乗る

まるで操虫棍のジャンプのようだった

姉さん…なにやってんの…その動き他の武器の動きだよ…嘘だろ…

俺の仲間がどんどん人外になってく…いや、ハンターは人外なのか…?

雪村さんは尻尾の方に周りかわしながらどんどん尻尾の同じ場所を切りつけていく

姉さんは乗り攻撃に成功したようでイビルジョーは倒れる

俺はそれを見た瞬間に左目を狙い竜の一矢をはなつ赤い軌道を残しながら飛んでいく矢は綺麗に左目に突き刺さった

イビルジョーは大きな咆哮を放ち暴れ始める

ッ！まずい！

イビルジョーが左側からブレスを放ちながら首を右側に持つていく

俺は後ろに飛ぶことでギリギリブレスの効果範囲を離れる

ブレスが終わると同時にイビルジョーは軽く後ろ足を後ろによせ飛んだ

あぶねえー！

俺はイビルジョーが後ろに足を引いた瞬間に気づき左に大きく飛ぶことにより回避する

先程の左目にさした矢のおかげでなんとか視界から外れることができた

俺は左に回避したところに罠を設置する

イビルジョーはこちらを発見し右足左足と交互に進みながら噛みつき攻撃をしてくるが落とし穴に落ちることにより止まる俺はその間に先程採取した肉に睡眠ビンの中身を振りかける

この世界だとコレでも眠り生肉ができるみたいだそれを無理やりイビルジョーの空いた口の中に投げ入れるイビルジョーはそれを迷わずに呑み込んだ

近接隊の三人はそれぞれ思い思いに攻撃しているが尻尾が半分くらいまで切れかかっている

体の至るところに小さな切り傷ができておりイビルジョーもだいぶ弱ってきてるかもしれない

そして罠から脱出したがそのままその場で眠ってしまう

俺ら4人は8個の大樽Gを設置して少し離れる…

樽を弓で撃ち抜き爆発させる

イビルジョーは飛び起きるそして思いっきり尻尾を振り回した……振り回し終わった尻尾に矢を当てると一瞬で尻尾は吹っ飛んだ。ただでさえ切れかかった尻尾を振り回してたのだ。矢が決定打になり尻尾は吹っ飛びイビルジョーは倒れる。

そこに3人は切りかかっていく。姉さんは溜め攻撃をしてるのだが時間は変わらないが威力がどんどん上がってる気がする……

雪村さんは鬼人兜割りを放っているのだが飛ぶ高さがどんどんと上がってきている。これは確実だ。

先輩は動きがどんどん凄いくらいになっていく……

ほんとにこの3人の成長には目を見張るものがある……

イビルジョーはすぐに立ち上がったが足を引きずりながら逃げていく……

追いついたときにはイビルジョーが丸くなって寝ていた。そこにその場で調査した大樽Gを8個設置して爆発させる。

爆発が起き止んだところにイビルジョーは倒れ付していた……

まだ生きているようだったが動く力は残っていないような感じだった……

それを見た姉が大剣を大きく首元に振り下ろし

イビルジョーは息絶えた……

始めてこうなってる状態を殺したかなかなかある……

その後照明弾を打ち上げ村に戻ったのだがギルドマスターにめちやくちや心配された

イビルジョーに会ったので仕方ないとは思いますが少し過剰ではないかな？

まあそんなこんなで今回の狩りは終わったのだが……せめて普通の狩りさせて!!!

もういいよ!!息抜き狩とかほんとしていいよ!もうやだよ!強いモンスターばかりだし!全部怖いし!最初の頃みたいにドスジャギイとか狩らせる!!

最襲

その日はバケツをひっくり返したと言うほどではないが、それなりに強くどこまでも体にこびりつくような雨が降っていた。

3日間続いた雨により地面はぬかるみ狩りに行くことはできるだろうがとてもいつものように戦闘できるとは言いがたい……

そんな雨に打たれてから街は閑散としていた。

そんな中ギルドには狩りに行けなかったハンターたちが併設された酒場で話し合いながら酒を飲んでいた。

各言う俺もいつものパーティーメンバー達でイビルジョー討伐の祝勝会的なものをしていた。

しかし雨のせいか4人のテンションは低そうに見えた。

そんなか閑散とした町にモンスターの咆哮が響きわたった。どこか不気味なそれでいて高圧的な、挑戦的な咆哮だと思った。

俺らは急いでギルドの外に飛び出し、あたりを見回すと、町の広場のような場所に奴がいた。

人間なんか紙のように噛みきれそうな牙、その輝きは素晴らしいと同時に確実な恐怖を与えてくる鱗、四足歩行の足には鋭い爪が、体の周りに纏った風の鎧はすべてのものを拒絶するように……

そう、金のクシャルダオラが前戦った場所に悠然と立っていたのだ。

俺らが金のクシャルダオラを見つけると目があった。

その目は俺らを待っていたと言ってるようだった。

俺達はクシャルダオラの方に駆け寄り武器を展開する。

バシユ！と大きな音が響いたかと思うと街の広場に向かって設置されたバリスタから矢が一斉に飛んでいき、クシャルダオラの風の矢を突き破りなんとかクシャルダオラに突き刺さった

「よし!!:どんどん放てーこの攻撃なら効くぞー!」

と、バリスタを使ったハンター達のリーダー格らしき男が叫んだ。

あの男……この前俺が戦い方教えたやつじゃないか……だからバリスタ

タか！

この前俺はギルドマスターとそいつにこの世界にはまだ存在しなかったらしきバリスタと大砲の作り方を大まかに教えたのだが2人はすぐに完成させたみたいで、リオレウスの希少種に行く頃には街の外壁に相当数、そして広場にまたモンスターが来るのを恐れて広場を囲うように30箇近くのバリスタが設置されていた。

クシャルダオラはそのハンターたちを見て一瞬煩わしいと言つうような動きをしたあとため息を吐くかのようにブレスを放った。

そのブレスはクシャルダオラの本気というわけではないだろうがかなりの威力を持っていた。

そのブレスはバリスタの指示を出していたハンターに当たった。そのハンターはバリスタの残骸とともに宙を舞った。

クシャルダオラは首を軽く振り広場に設置されていた半数近くのバリスタをそのままぶち壊してしまった。

50人近くのハンターたちがクシャルダオラに向かおうと武器を構えていたが先のブレスで30人ぐらいが吹き飛ばされバリスタの残骸とともに転がっていた。

クシャルダオラはその光景を見たあと満足したかのように小さくし吠えたあとこちらを見てきた。

それと同時に俺らは戦闘を開始した。

近接戦闘3人は見られた瞬間には駆け出しており今にも切りかかりんとしていた。

俺は弓を展開し速攻で竜の一矢のモーションに入り角を狙い撃ち抜く、放った矢は一直線に赤い軌道を置き去りにして角に当たったが破壊するほどの威力はなかった。

先輩は風の鎧があるためにいつものジャンプはせずに前足に切りかかっていた。

姉さんは左側の胴体に幸村殿は右の胴体から後ろ足にかけて広範囲に切りかかっている。

俺はもちろん頭が担当だ。最近では会話をしなくても各自がどこを狙うかなどを瞬時に決め役割を分け合えるようになった。

そしてギルマスがいつの間にか出現してクシャルダオラの尻尾を切りつけていた。

ってギルマス!?!どっから出てきた!

俺達は前回より格段に強くなっているのか風の鎧は全員が余裕を持って突き破れるようになっていた。しかし、鎧は固く小さな切り傷をつけるのがやっとだった。

バリスト部隊は20人近くのハンターと10機くらいのバリストが残っていたのだが指揮官を失ったことにより混乱が起き、とても戦闘に参加できる状態ではなかった

俺は弓矢とバリストを使い匠に角を攻撃していく、バリストでクシャルダオラの角を狙い撃つるとき急に悪漢がしてその場を飛び退くと、今まで俺のいた場所に竜巻が巻き起こりバリストの1つが大破し粉々になった破片があたりにちらばる。

って危ねえ!俺これ避けなかった確実に死んでるじゃん!何だあの感覚は!

クシャルダオラの方を見るとこちらに向かって歩いてきていた…

やばい!俺が狙われてる!

と、姉さんが極限まで溜めた切り上げ攻撃をクシャルダオラの右脇腹に思いつきりぶつける。

バコンっ!と金属同士が当たった様な爆音が響き渡る

クシャルダオラはそのまま左側に倒れる

「ナイス姉さん!」

姉さんがクシャルダオラを倒したことにより少しのスキができた。前衛組はすぐにツツコミむ

姉さんはクシャルダオラの角を先輩は背中を幸村殿は尻尾をといつものように分かれる

ギルマスは余った足を攻撃している。

クシャルダオラが立ち上がった瞬間俺はバリストを角にピンポイントでぶち込む。

クシャルダオラの角はきれいに空を舞った。

よっしゃ!!!クシャルダオラが纏つてた風の鎧が消えた!!

と思つたらクシャルダオラは大地を揺るがすような大きな咆哮を放った。クシャルダオラの方を見るとの目の色が変わった気がする
:

俺らはたまらず耳を抑える。耳栓をしていてもこれだ。他のハンターたちは耳が聞こえなくなつてもおかしくないんじゃないか…

「危ない!!!」

クシャルダオラの方を注目していた俺はブレスを放とうとしてるのが見えた…

そのブレスの直線の先にはギルマスが見えた。俺は叫んだがギルマスは気づいていたようで回避をしようと踏み込んだが雨でぬかるんだ地面に足を取られ回避が少し遅れる

クシャルダオラはブレスを放つ、意味で喉のブレスよりも威力が高く一直線上に進んでいく。

ブレスの中では風の刃が網の目状に広がっていきどこにも逃げ場がないのがここからでもわかる。

ブレスはギルマスの方へと飛んでいきギルマス左腕と左足を吹き飛ばす。

吹き飛ばされたギルマスの手と足はブレスの中でを飛んでいき粉々になり消えた…

「クソギルマス!!!」

とみんなが叫びギルマスに近寄る

ギルマスはまだ息があつたみたいだが…手、足からは血が垂れ流れ雨でできた水たまりと混ざり奇妙な色になっていた。

俺は急いでギルマスに秘薬を飲ませる。ギルマスの血は止まり切り口がどんとと治っていくがナメック○人のように新しく生えてくるわけではなく傷が塞がるだった…

やっぱ切れた腕がないと…治らないのか…

俺は治りかけたギルドマスターを安全な場所に運ぼうと思つたが

俺よりあとにハンターになった新人ハンターが寄ってきたのでギルマスを渡しクシャルダオラの方を向く。

俺の左右には先輩と姉さんが並び立つそして姉さんの横には雪村殿が立っている。

俺の後ろには30人近くのハンター達が立っている。

この仲間たちがこんなに頼もしいとは…

「行くぞ!!これでラストだ!!」

と俺は叫ぶと全員が動き出す。

いつもの4人に関しては何も話さずともすべてが伝わってくるのがこんなにも良いものとは思わなかった…

これなら狩れる…

決着

走り出した3人に向かってクシャルダオラは左腕を大きく振り上げ薙ぎ払おうとしている

俺は素早く弓を展開し、顔面に一撃を当て一瞬怯ませる

これにより一瞬遅れたクシャルダオラの腕は空を切り3人はクシャルダオラの懐に入りこんだ

3人の攻撃は風の鎧を失ったクシャルダオラの体にどんどんと傷をつけていく

姉さんの切り上げた大剣はクシャルダオラの右足を巻き込みクシャルダオラは倒れふす

3人はそれを見た瞬間にはクシャルダオラから離れるように飛び込みかなりの距離を取る。

俺は3人が行動を始めた瞬間には声を上げる

「今だ!!撃て!!」

俺を含め15人近くのハンター達が用意していたバリスタを一斉に射撃しバリスタの雨がクシャルダオラの体に突き刺さっていく。

雨のようなバリスタは続きクシャルダオラが立ち上がるまで続く

この間に3人は回復薬を飲んだり体力の回復に当てたりと軽い休憩を取るのだ

何も会話していないが先程、目を合わせた瞬間に自分が何をすべきなのかわかった。

この信頼感が心強い

第一陣が10発のバリスタを撃ち終わった直後後ろに控えていた15人のバリスマの弾を持ったハンター達とすぐに入れ替わりバリスタの雨を止むことなく降りそそいでいく

クシャルダオラは風の鎧が無くなったのでバリスタの威力そのままクシャルダオラに当たる

深く突き刺さっているわけではないがそれでもクシャルダオラの鱗を貫通しクシャルダオラには確実なダメージをいれていく

クシャルダオラが立ち上がりそれを見た俺達はすぐにバリスタか

ら離れる。

クシャルダオラが咆哮を放った。

それと同時に俺達が今までいた場所に嵐が起こりバリスタは木片とかし残骸だけがそこに残った。

近接隊3人は再度クシャルダオラに襲いかかる。

先輩は縦横無尽に空や地と全てを使った三次元的な動きによりクシャルダオラの攻撃をかわしながらもどんどんとクシャルダオラに攻撃を当てていく。

姉さんはクシャルダオラの攻撃をギリギリでかわし未来予知の能力でもあるかのようにクシャルダオラの動きを読み先行して振り回した大剣にクシャルダオラが吸い込まれていく。

雪村殿は太刀の機動力と取り回しやすさを活かしながらいい場所取りをしながら確実にクシャルダオラの体力を削っていく。

俺は三人の動きを見て必要なタイミングや時にクシャルダオラに矢を撃ち込み動きを止め周りのハンター達にとある仕掛けの指示をしていく。

クシャルダオラは突然飛び上がり低空飛行しながら姉さんの方に突っ込んでいく。

姉さんはそれをわかっていたかのように左に大きく飛ぶことにより回避に成功したがクシャルダオラのほうが一枚上手だったらしく姉さんがかわした瞬間その場に止まり回転をしながら爪を姉さんに振り下ろす。

しかし姉さんは大剣で防ぎクシャルダオラの攻撃を殺すことに成功したがクシャルダオラはそのままその場で回転しクシャルダオラの尻尾が姉さんが大剣でガードできていない横側にぶつかり吹き飛ばされる

姉さんは民家の前の地面に落ち大きなクレーターを作った

「姉さん!!」

通れは近寄ろうと思ったがクシャルダオラのほうが早く弓を展開したところで間にあいそうにない…

クシャルダオラは低空飛行をしながら姉さんの方に向かう
終わった：

と思つたが姉さんの後ろにある屋根から何か黒い物体が飛んだように見えた

その黒い物体はクシャルダオラの顔面にくつつく

あれは…この前教えたパーティーのリーダー!!

リーダーはそのままスラッシュユアックスをクシャルダオラの顔面に突っ込み属性解放突きを放つ

クシャルダオラの顔面の目の前で大きな爆発が起きクシャルダオラがたまらず後ろに倒れる

リーダーは自分の爆発で吹っ飛んでいき街の外れ辺りまで吹っ飛んでいった。

助けたいが今はその余裕が無い…

「今だ!!!全ハンター即時!設置せよ!!!」

この瞬間俺はずっと指示を出して準備をしていた作戦を開始する

約30人のハンターたちは一齐にクシャルダオラの近くまで走っていき大樽爆弾2つと大樽G2つをもものすごい速度で設置し離れていく

これは…30?4||120のものすごい量の爆弾がクシャルダオラの近くに設置された。

120なんてゲームじゃあ絶対無理な数だぞして最悪、街が吹っ飛ぶかもしれない…

だがやるしかない。

爆弾を設置したハンター達は俺が急いで作らせた堀の中に潜り堀の前には掘るときに使った土でできた簡易的な壁もある俺は全員が隠れたのを確認し壁の上から矢を放つ

矢は爆弾の1つに突き刺さり爆発する

そこからはどんどんと誘爆していく

これまで見たこともないような大爆発が起こった

堀に隠れていたが堀の前の壁は壊され土が体にかかっていく

とても目は開けることはできずひたすら堀で小さくなりながら耳を抑える

耳を抑えていても爆発音が脳に直接入っているのではないかと言うくらい音が聞こえている。

爆音が終わった時、モンスター咆哮らしきが聞こえたが爆音なのか咆哮なのかすらわからない。

俺は爆音が晴れたとき堀から立ち上がった煙が立ち込めてクシャルダオラを見ることができない

空を見ると巨大なキノコ雲ができておりどす黒く曇った雲と混ざり始め空はわけのわからない状態になっていた。

俺は堀から出て煙の方に少し近づく…

煙が少しずつ晴れて来て黒い煙の中にシルエットがみえてきた

俺は一瞬悪寒を感じ全力で横に飛ぶ

そして、俺が今までのいた場所にはクシャルダオラの腕が振り下ろされていた。

危ない…死ぬところだった…

爆炎の中から出てきたクシャルダオラを見て俺はすぐに動き出す。

弓を展開し、1つだけ残った不発だったであろう大樽爆弾にチャージステップで近づき爆弾を使い飛び上がる。

その時不発弾が爆発し爆風で俺に勢いをつける

飛び上がった俺は空中で矢を一本取り出しクシャルダオラの背中めがけて一直線に落ちていく

矢がクシャルダオラの背中に突き刺さり俺はクシャルダオラの背中に乗る。

クシャルダオラはそのまま何も言わずに倒れふした

勝った…やっとな勝てた!!

俺は感極まって声が出なくなっていた。

クシャルダオラの背中に立ち右拳を握りしめ天高く突き上げた。

それを見たハンター達は各自が喜びの声を上げていた。

体にこびりつくような不快な雨はいつの間にか止っており、世界をどこまでも覆い隠すかのように黒く広がっていた暗雲の隙間からは

まるで一涙の希望を示すかのように、村の真ん中の広場へと降りそそいでいた。

その光はクシャルダオラの被害による絶望の中にある村へと僅かな希望を運んできたと言わんばかりにクシャルダオラの金の鱗に反射し村を揮るく照らしていた。

クシャルダオラの上に立ち光に照らされたりアムの背中はどこまでも広がる海のごとく美しくとてつもなく広大に見えた。

討伐のあと

クシャルダオラ襲撃からは毎日はものすごいペースで過ぎていった。

今はクシャルダオラに壊された家を街のみんなで協力しながら直しているのだが…一つ言わせてもらいたいことがある…

村の真ん中の広場に立つてる銅像何!?

いやね…村にいるハンターは狩りに行かないし、男たちは畑仕事や商売などをしないで家の再建してるのになかなか村が家が建て直されないな…と思っただらさ、あれ作ってたんだね…だけど俺個人としてはあれを潰してほしい…

あんなんあつたら恥ずかしくて村を歩けない…

さつきから言ってる銅像はなんだって? うん、俺のライフポイントがもつところまでは詳しく説明しよう。

村の真ん中の、クシャルダオラと戦った広場の真ん中に銅像が立って、その銅像が俺がクシャルダオラを倒したあとに拳を握り腕を突き上げたあの瞬間を銅像にしたものだった。しかも顔も俺そっくりだし…その銅像が立ってる下には倒されたクシャルダオラの銅像まできちんと作られており、まるで俺がクシャルダオラを倒した瞬間を切り取ったかのような感じになっていた。

これ以上は俺のライフが持たないのでやめておく…何故か銅像は俺しかいなかったりといろいろと言いたいことはあるが…まあこれは放置だ…

それから、最近知ったのだがリアム式討伐術とか言う謎の武術? が出来ていた。しかも、俺が開祖みたいな変な立ち位置になってその討伐術の奴らとすれ違おうと必ず進撃みたいなポーズをされる…正直恥ずかしい

それに加えて討伐術の奴らはめちゃくちゃ多い

クシャルダオラを討伐した噂は一週間も立っていないのに各地を駆け回り街の住人はまだ、増え続けている。その中にもハンターは非常に多くベテランから新人まで様々なハンター達が街に来たのだが

まあ、クシャルダオラの討伐からはこんな感じで毎日が過ぎていった。

あ、みんな仕事しないで、食糧とかはどうなってるんだと思ってるかもしれないが、俺がハンターになったくらいの頃にこの街に来た商人たちが格安で売ってくれている。まあその代わりに倒したクシャルダオラの素材を鼻肩していたのだがそこはwinwinの関係だ。

そんな訳で忙しい日々を過ごしていたのだがそれも昨日最期の一軒の建築が終わりすべて終わった。

ギルドは以前の10倍近いサイズになっていた。

町長の家も大きくなり壁の代わりに使っていた外壁もより外側になり今まで以上の人が住めるようになっていた。

で今日は久々にパーティのみんなでギルドに集まることになっているため俺は早めに起きてギルドに行く準備をしている。

家の扉がノックされ母親が対応しに行ったのを見ながら俺は朝飯のパンを齧る

「リアムー！ちよつと来て！絶対びっくりするよ！」

と、母さんに呼ばれたので食べかけのパンを机の上に置き玄関の方へと向かう

「えっ…」

そこには、女の子が立っていた。

髪は肩にかかるくらいの長さで、身長は先輩よりも低く、胸はない。

その子はこちらを見つけるを軽く微笑み

「久しぶりだね」

俺はこの瞬間こいつの事を思い出した。こいつは俺に最大のトラウマを作り、隣の街に引っ越して行った幼馴染だ…